
永遠ノ園

幼ゐこみ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠ノ園

【Nコード】

N3850G

【作者名】

幼ぬこみ

【あらすじ】

永遠の園とされるリポス。そこへ足を踏み入れた者は、二度と帰れないと言う。雄の赤狼 ドール のリボルトは、狩りの最中に闇に吞まれ、その異世界へと辿り着いてしまう。其処は、争いのない平和の国だった。リポスの狼の群れに入り、何の疑いもなく安息の中で暮らしていた彼だが、白い大山猫 リンクス の女に出会った頃、楽園の影が見え隠れし始めた。

序章（前書き）

書ける限り更新していきます。よろしくお願いします。

序章

序章

緑があつた。

深い深い緑だった。

緑は大地にもあり、時に宙にもある。

辺りは緑に包まれていたのだ。

深く、濃厚な緑。

その緑の奥に、動く者があつた。

その動く者を、見つめる者があつた。

見つめる者は、赤い毛で覆われた狼ドール達だった。ドール達はゆつくりと緑の中に散り、動く者との距離を縮めていく。ふと、動く者が止まった。

ドール達も止まった。一頭一頭が、互いの息を確認する。

その時、風が吹いた。気まぐれな風が、吹き去っていった。幾らかの草が攫われ、また幾らかの気配も攫われていった。

動く者が倒れた。風に押される様に、倒れ、そのままの勢いで駆けていく。

ドール達が立ち上がった。動く者を追いかけて、追いかけて追いかける。

動く者は逃げた。逃げて、逃げて、逃げ続ける。

互いに風になり、互いに風を産み、走り去っていく。

だが、ドール達は止まった。本能的に、ただ直感的に、彼らは止まった。動く者が、睨むようにドール達を見つめ、そのまま進んでいく。

其処は、闇だった。無限に広がる闇だった。動く者の姿が、その闇に飲まれていく。

ドール達はそれを見送っていた。何も言わず、ただじつと、動く者の背を見送った。

ただ一頭、唸っている者があつた。

その者は、動かぬ仲間たちに痺れを切らし、走りだした。慌てて仲間たちが彼を止めようとする。

だが、彼は耳を貸さずに、動く者を追いかけていった。

何の戸惑いもなく、何の躊躇いもなく、闇へと飛び込んでいった。ドール達の目から、彼の背が消えていく。

闇はしんと静まり返り、ドール達の前に広がっていた。

やがて、ドール達の止まっていた時間が蘇り始めた。

一声、一声、呟いた後、一番小柄なドールが、絶叫した。

「リボルト！」

その声は、凍っていたドール達を完全に溶かしたけれども、当のリボルトには届かずに、闇に吸い込まれていった。闇はその声を吸い込み切ると、ドール達の目の前で急激に萎んでいき、やがて、跡形もなく、消えた。

一章 永遠の園（一）

第一部

一章

永遠の園（一）

その昔、陸の果てには永遠の園があつた。その園はリポスと呼ばれ、その余りの美しさに、ある神に大層気に入られ、不滅の地として施しを受けたと言われている。

最も、それを言っている者達の中で、リポスを見た。もしくは、行ったという者はいなかった。何故ならば、其処に足を踏み入れた者は、二度と帰りたくなるからだ。帰らなくていいと思う程の至福を与えられるからだ。

だからこそ多くの人間達は、リポスを探して旅に出たのだ。時には私財を投げ打つてまで、リポスに執着する人間もいた。彼らがリポスに辿り着けたかどうか、知る者はいない。辿り着いたのか、はたまた志し半ばで死んでしまったのか、知る者はいなかった。だが、いないだけ、リポスは新たな挑戦者を生み出すのだ。

そんな人間達を、野の獣達は嘲笑つた。如何にも人間らしい世間知らずの戯言である、と。だが、そんな野の獣達の中でさえも、リポスを信じる者と信じない者とは半々だった。そして、人間達のように、リポスを望む者が存在している事も、また事実だった。

リポスは、望む者全てが辿りつける場所ではない。

人間達と違い、野の獣達はそれを知っていた。だからこそ、望めども、旅立たない者が多いのだ。態々自身の命を冒してまで、リポスに行こうとも思わなかった。

だが皮肉な事に旅立つ人間達よりも、そうした野を懸命に生きる

獣達の方が、偶然にもリポスに足を踏み入れる事が多かったのだ。彼らが望むにしろ、望まないにしろ。

兎も角、赤狼ドールのリボルトは、その偶々足を踏み入れた獣の一人だった。

リボルトは茫然とした。目の前に広がっているのは、何処までも長閑な平原。先ほどまで追っていた雌鹿は、リボルトの事など忘れかけたように、平原を見渡している。リボルトもまた、彼女の事を今の瞬間忘れていた。

リボルトは雌鹿を再び目に映し、咄嗟に身構えた。雌鹿がふところらを見やる。リボルトはその目を見つめた。見つめながら身構え続け、だが、彼は首を傾げた。

何故、身構えているんだ？

彼は疑問を覚えた。先ほどまで、腹が減って仕方なかった。仲間と共に雌鹿を見つけ、その意外な程の俊足にたじろぎつつも、甘美な肉を求めて雌鹿を追い続けた。それなのに、如何したことが。

雌鹿は戸惑いを隠せない様子で、リボルトと周りの景色とを見比べていた。

狩るならば絶好の機会だ。絶好の機会である筈なのだ。それなのに、如何したことが。

何で、狩るのだろうか？

リボルトは自身に訊ねた。狩る理由がなくなる程、空腹を感じないのだ。腹が減っていないのなら、あの雌鹿を狩る理由もない。リボルトは座り込んだ。そして、雌鹿と同じく、彼も辺りを見渡す。

一体此処は、何だろうか。

「リポス……リポスなの？」

ふと声がした。リボルトは目を這わせた。雌鹿が言ったようだ。彼女は戸惑いながらも、リボルトに目を合わせた。

「リポスなのかしら……？」

そう訊ねられ、リボルトも困ったように首を傾げた。雌鹿はリボルトに近づいてきた。リボルトは奇妙な感覚に陥ったが、じっと彼

女を待った。

「絶対そう」

雌鹿が言った。リボルトは苦笑する。こうやって獲物となる生き物が自分に歩み寄ってくる事など、そうそう無い。きつと此処は彼女の言うとおり、リポスなのだろう。そう彼は思った。それならば、と彼は思い、雌鹿に訊ねてみる事にした。

「あんた、名前は？」

雌鹿はリボルトに目を向けると、くすくすと笑いだした。リボルトは無表情に待った。彼女は一頻り笑い続けると、答えた。

「狼に名を訊ねられるなんて初めてだわ。きつとここはリポスなのね」

「それで？ 名は？」

リボルトは尾をぱたりとひと振りし、訊ねた。

雌鹿は目を細め、リボルトに言った。

「プレティ。自分から名乗るなんて事、狼はしないの？」

「しないね」

リボルトは目を細めて言った。

「少なくとも、明らかに順位が上の者にしかしない」

「ふうん」

雌鹿のプレティは、やや呆れたように言った。

リボルトは不思議だった。普段なら会話する前に襲いかかるか追い払うような鹿と、気安く喋れる自分がいるのだ。それも名前まで聞いて。これこそが、ここがリポスであるという証拠とでもいうのだろうか。

「プレティか」

リボルトは言った。

「似合った名だな」

「どういう意味？」

プレティがやや怒ったように訊ねてきた為、リボルトはきょとんとして言った。

「ただそう思っただけだが？」

尾を一旦振り、リボルトは軽く目を閉じた。

「俺はリボルト。見ての通りドールの冴えない男さ」

「ああ、執拗そうな名だね。貴方にぴったり」

「それはどうも」

リボルトはくすりと笑んだ。プレティがどんなに悪態を吐いても、リボルトは気にならなかった。寧ろ、皮肉交じりのユーモアとして解する事が出来たのだ。不思議だった。若しも、少し前のリボルトだったら、今すぐにでもこの雌鹿に飛び掛かって、その腹に真っ先に喰らいついていた筈なのに、全くそんな気にならない。

「ともかく」と、プレティは言った。彼女は周りを見渡しながら、小さく溜め息を吐いてから、リボルトに言った。

「これからどうしようかしら。此処がリポスだとして、私達はどうすればいいの？」

「さあね」

「ともかく、此処に居ても仕方ない。少し様子を見に行かないと」

「ああ、そうだね」

リボルトは適当に返事をし、欠伸を漏らした。思えば、このプレティを追っていた所為で、寝ていない。何と足の速い、タフな鹿だろう。今更ながらに、リボルトは思った。

「ちょっと」

プレティが言った。

「貴方、他人事の様に相槌打ってるけど、そうはいかないわよ。私と一緒に来なさい」

リボルトは面白くない顔をした。出来れば此処で休んでから行きたい。行くならば、勝手に行って欲しいと思った。だが、そう思いつつも、ここが一体何物をきちんと理解すべきだと考えなおしたリボルトは、「分かった、分かった」と立ち上がった。

「よし、行ってみようじゃないか。プレティ。何だか妙だが、一緒に行ってみよう」

そう言つて、リボルトとプレティは平原を歩きだした。踏み込む地面は柔らかく、足を撫でていく草も、妙に暖かった。空の青も不思議な色合いを留め、吹く風も仄かに香っている。少し前までいた世界と何も変わらない。だが、何かが違う。何が違うのだろう。リボルトは考えながら、プレティと歩いた。

歩く内に、自分たち以外の動く生き物が目に入りだした。飛ぶ鳥や虫、または草の間で遊ぶ兎達。

「あの兎に訊いてみようかしら」

プレティが言い、駆けて行つた。リボルトもすぐに追つたが、やはりプレティの足には追いつかなかつた。彼女は真つ先に遊んでいる兎達に話しかけ、何やら会話している。リボルトは急いでその場所へと近寄つて行つた。ふと、兎の一羽がリボルトを振り返り、リボルトは遠慮で止まつたが、兎は何事もなかつたかのように目線を逸らし、再びプレティを見上げた。

「つまり、ここがリポスで間違いないの？」

プレティが言つた。

兎達は頷き合い、プレティに答える。

「そうだよ。ここが永遠の園」「ずっと遊んで暮らせる永遠の園だよ」「お姉さんたちは選ばれたんだね。ここでずっと幸せに暮らせる権利があるの」「良かったね」

リボルトは兎達を見た。どの兎達も、リボルトを見ても恐れの一つすら浮かべない。それどころか、彼らはリボルトにも話しかけてきた。

「小父ちゃんみたいな狼も、他にも居るんだよ」

「あっち、今日はあっちで見かけたの」

「何人かいるんだよ」

無邪気に説明してくる兎達に、リボルトは目を細めた。無垢な子ども達。この兎達は、まだ純粋な子どもだった。親は一緒なのだろうか。子ども達だけでここへ来たのだろうか。もしそうならば、きっと悲しんでいることだろう。

リボルトはそう思ったが、ふと、今まで他でもない自分が、こういった仔兎を情け容赦無しに親から奪う者であった事に気付き、失笑した。

やはり変だ。ここがリポスだからだろうか。

リボルトが再び首を傾げていると、ふとプレティがこちらを見た。
「リボルト。私、ちよつと森に行ってみるわ」

「森？」

リボルトが訊ねると、兎達が跳ねながら教えてきた。

「森には鹿がいるの」「このお姉さんみたいな鹿がね」「いっぱいだよ！」

兎達の声の背後に、プレティは耳を動かした。

「私、行ってくるわ。リボルト、貴方も此処の狼に会ってみたら如何？」

プレティはそう言うのと、呆気なく去ってしまった。リボルトは戸惑った。だいたい、此処へ来るように誘ったのはプレティだ。それなのに、彼女はリボルトを振り返りもせずに、行ってしまったのだ。困惑の内に佇んでいると、兎達が不思議そうに覗いてきた。

風を感じながら、だが、リボルトはプレティの去る背を見つめていた。獲物として見ていたのとは違う目で、友を見送る様な眼で、見つめていた。

その時、ふと兎の一羽が言った。

「他の狼達はあっちだよ？」

気を利かせたつもりなのか、その兎は小さな手で方向を示していた。

リボルトは苦笑し、その方向を見やった。其処は、禿山へと続く森林だった。プレティの去った方向とは逆の、森林。

「とても広い所なんだねえ、ここは」

リボルトが言くと、兎達は自分の事を褒められたかのように笑った。

「でしょう？ すごくでしょう？ ここはずっと広がってるんだよ

！
」

リボルトは小さく頷き、兎達に言った。

「あっちにいるんだね。有難う」

そして、ゆっくりと、その場所へと歩んでいく。

兎達は暫しリボルトを見送っていたが、やがて、再び、遊び始めた。

一章 永遠の園（二）

永遠の園（二）

リボルトは平原を走りながら、ふと疑問を感じた。

空を舞う鳥。草叢を飛ぶ虫。所々居座る獣たち。その誰もが、リボルトに取って違和感を拭えない者であった。

何がおかしいんだ？

リボルトは考えながら走った。しかし、よく分からなかった。兎も角、何かが異質だ。そう考えかけ、リボルトはふつと笑んだ。当たり前だ。ここはリポスなのだ。永遠の園であるリポスなのだ。外界の野蛮な雰囲気は一切持たない場所なのだ。其処に住む獣がリボルトの知らない印象に包まれている等、当然ではないか。

リボルトは考えなおし、兎達の示した場所へと進む事だけに専念した。禿山を後ろに携える森林。否、森林を待らす禿山か。

どちらでもいい。

其処に狼がいるのならば、挨拶ぐらいはして置こうではないか。そう思いつつ、走る。だが、それも、後付けの理由だ。結局のところ、リボルトは何故自分がこうも一生懸命走っているのか、分からないのだ。

リボルトはふと空を見上げてみた。

日が真上に登り、辺りを一層明るくしていた。

暗闇から突如此処へ来たリボルトは、最初、このリポスには時がないのだと思った。だが、違うようだ。日は、リボルトとプレティがここへ来た時よりも、動いている。今より確実に傾き始めるのだ。昼と夜がある。其処は、外界と変わらないらしい。ただ、外界との時空は歪み、ずれているという事は確かだった。

ふと、リボルトは立ち止まった。森林の入口に付いたのだ。ただ

一人で駆け抜ける時間は、仲間と駆け抜ける時間と違い、早くも遅くも感じた。一体どちらだろうか。ふと、リボルトは疑問に思った。仲間と駆け抜ける時間と違うのは確かだ。だが、それが遅いのか、早いのか、全く分からない。

まあ、分かった所で如何という訳でもない。

リボルトは一人納得し、森林に足を踏み入れた。不意に、まるで自分の周りの空間が歪むような不自然な感覚に浸る。リボルトは一瞬怯み、立ち止まった。不自然な感覚も、動きを止めた。

何だ、これ。

リボルトは考えつつ、もう一步踏み出し、様子を見た。風が赤い体毛を撫でていく。リボルトは気を取り直し、森林を突き進んでいった。見た目は外界と変わらない。リボルトがドールの仲間達と駆けまわっていた場所と変わらない。だが、何かが違う。雰囲気か、匂いか、色か、何か。リボルトはこれを、余所特有の違和感だと思う事で、自分を納得させた。きっと、見知らぬ土地だからこそ、不安に思うのだ。

ざわざわとした空氣の振動が、リボルトの耳に沁み込んでくる。森林の音楽。リボルトの耳に慣れた森林の音楽だ。だが、それも、少し違った。何が違うのだろうか。何かが足りないような気がする。リボルトは考えた。考えに考えた。だが、何が足りないかは分からないまま、森林を更に進んでいった。今のところ、リボルトの話し相手になる様な者は見当たらない。さっきから虫ばかりだ。住む世界の違う者ばかりがいる。

本当にいるのだろうか。

誰でもいいから現れないだろうか。リボルトはそう思い始めた。だが、そんな願いも虚しく、狼はおるか、栗鼠や兎さえもない。これならばプレティについて行けばよかっただろうか。リボルトは幾度かそう思ったが、その度に鹿の群れに囲まれて肩を竦める惨めな自分を想像し、やはり止めておいて良かったと安堵していた。「それにしても、誰もいない」

遂にリボルトは独り言を放った。返事をしてくれるような者は居ないだろうけれども。

「いるよ」
いた。

リボルトは振り返った。振り返り、すぐに大きく溜め息を吐いた。そして、自分の鼻が病気なのではと心配までしたのだった。リボルトのすぐ後ろに、タヌキがいたのだ。一人きりで、振り返るリボルトに平然と視線をやっている。何時から居たのだろうか。

「兄さん、見慣れない人だね」

タヌキが言った。

「何時から此処にいるんだい？」

「さっきだ」

リボルトは短く答えた。

タヌキは短く「ほう」と声を漏らすと、動きだした。ふつくりとした身体が、振動で揺れている。タヌキは期待を裏切らずにのっそりと駆け寄ってくると、リボルトの匂いを嗅いだ。リボルトはやや緊張し、身を竦めた。

何でタヌキに怯えているんだ、俺は。

すぐに自分に呆れた。

タヌキはリボルトを見上げ、口を開いた。

「ほうほう。兄さんはドールってやつかい？」

リボルトはやや呆れてタヌキを見やった。赤狼ドールと言えば、その名を聞くだけで被食者の背筋まで凍らせてしまう程の猛獣だ。その姿を一目見ただけで彼らは一目散に逃げてしまう。リボルトはそれを誇りに思っていた。無論、仲間達もそうだ。時に、虎や熊などとも戦いながら、生き抜く事もあった。というのに、タヌキは冗談を言っている訳ではないらしい。本当に一目で分らなかったのだろうか。否、きっと、確認の為に言ったのだろう。此処がリボスだからタヌキとてそのような事を言ったのだ。

そう思いリボルトは、溜め息混じりにタヌキに言った。

「見て分かるだろう？ その通りさ」

タヌキは真丸の目をリボルトに向けると、苦笑を浮かべて言った。
「いやはや失礼。何せ、あつしの育った地域じゃドール所か狼自身もいなくてですねえ。知っていても、噂や昔話や伝説ぐらいなものだ」

リボルトは驚いた。狼のいない地方があるなんて知らなかったのだ。

「犬ならよく見るんだが、やっぱり違うんだな、と此処へ来て理解しましたよ。丁度この森林の先にも狼がいるんですさあ」

「ああ、さつき兎の子ども達に聞いた。会ってみようと思って……」
タヌキは「ほう」と無表情に尾を振った。

「それはいいでしょうな。彼らはあの禿山を駆けるのが好きらしいですね？ 夜な夜な遠吠えなんかが聞こえてきますわ」

「あの禿山ねえ」

リボルトは前を見やった。木々の間から、禿山は見える。淡い灰色に染められ、空に浮きだされるように佇むそれは、人間が見たら絵のようだと思うだろう。リボルトにとっては、非現実的にしか映らないのだが。

「そうそう」とタヌキは付けくわえた。

「此処にいる狼は、兄さんの様なドールではありませんぜ」

リボルトはふと首を傾げ、タヌキを見やった。

タヌキは続けた。

「ドールの御方が来たのは初めてかも知れませんが。まあ、あつしのリポスの全土を回ったわけじゃないので確かじゃありませんがねえ」

「此処にいる狼は何人なんだ？」

「ええ、確か、五人だったと」

リボルトは鼻で息を吐き、口を閉じる。五人も狼がいるのに一人もドールがないなど、リボルトには想像もつかなかった。リボルトの居た地域は、狼と言えばドールだと言ってもいいほど、ドール

が沢山いたのだ。

「そいつらがドールじゃなけりや、何なんだ？」

「まあ、会ってみりや分かりませ。兎も角あつしは、兄さんのような綺麗な赤毛の狼は初めて見ました」

ぴんと来なかったが、タヌキの世辞は些か嬉しかった。

リボルトは何も言わず歩み出した。タヌキも何気なくついて来ていた。

ふと、その静けさの中で、リボルトは思案に入る。ドールではない狼達。リボルトの中に、リポスに来て最初の好奇心が生まれた。何せ、ドールの中で、当たり前のドールとして生活していたリボルトは、赤い毛並みが珍しい等という事は初めてだったのだ。寧ろ、違う毛並みの方が珍しいとも思う。兎も角、自分とは何か違うその狼達と、何か話してみたかった。その期待は、リボルトの足を自然と動かしていく。

無言の中で歩く内に、リボルトはふとタヌキの存在を忘れていた事に気付き、ふと辺りを見渡した。そして、一瞬だけ驚愕した。増えている。

タヌキの隣に、クズリがいる。小さな熊にも似たその生き物は、さも当然であるかのように、振り返ったリボルトをじっと見つめていた。

タヌキがリボルトの表情を見て、濁し笑いをした。

「ああ、こいつですかい？ あつしの友人でさあ。気にしないでやって下さいな」

リボルトは何も言わず、向きなおった。

気にしないでいいなら、気にしないようにしよう。

リボルトは再び興味を狼達へと向け、歩きだした。森林は何処までも静かで、それでいて、あのざわざわとした音楽が耳に沁み込んできく。其処から不快感は生じず、ただ奇妙な心地よさだけがリボルトの体を包み込んできた。その感覚に浸りながら進むリボルトは、再びタヌキや、さっき現れたクズリの存在を忘れて進みだした。

森林の光が薄れてきた。木々の間から見える空が赤く染まっている。夜が来ようとしているのだろう。リボルトはふと立ち止まり、赤く染まってく空を見上げた。其処で、視界にタヌキとクズリが入り、彼らの存在を思い出した。

ん？

リボルトは空から目を外した。美しいけれども明日も見られるだろう夕焼けよりも、もっと気になる光景が視界に映ったからだ。タヌキとクズリを見つめ、リボルトは呆気に取られる。

増えている。

仲好く並ぶタヌキとクズリの上に、アライグマがいた。何の違和感も無しに、其処にいる。クズリと同じように、唐突に現れていた。タヌキが再びリボルトの表情に気付き、さっきのクズリの時と同じような顔で言った。

「あ、こいつも友人です」

「何で付いてくるんだ？」

気味を悪くしたりリボルトは、思いきってタヌキに訊ねてみた。すると、タヌキはくすくす笑い、答えた。

「そりゃ、兄さんが気になるからですって。兄さんは気にしないで下せえ」

そうすることにした。

リボルトはタヌキとクズリとアライグマとを従えるかの様に、先へ先へと進んだ。刹那的な夕焼けが終わりを迎え、今まで影に隠れていた月が、辺りを照らし始めた。と、その時、リボルトの耳に、親しみを感じる声が聞こえた。

狼の咆哮。人間が聞けば物悲しいその旋律は、リボルトにとっては楽しい歌声だった。

リボルトは走った。一刻も早く、彼らに会いたい。会って話したい。その思いに駆られ、どんどん走っていく。その間、後ろについてくる気配が多くなった事を薄々感じていたが、タヌキに二度言われたように、気にしなかった。

やがて、長い森林が終わりを迎えた。

リボルトの目に、禿山への入口が見え始める。其処へ来た時に、ふとリボルトは振り返った。

誰もいなかった。

目を凝らせば、森林の終わり口で、背を向ける無数の獣たちの姿が見える。リボルトへの興味も逸れたらしい。それにしても、沢山の獣だ。タヌキに会うまでは一人も会わなかった事が信じられないくらいだった。

リボルトは目を逸らし、禿山を見上げた。

この何処かに狼達はいる。

その時、再び遠吠えが聞こえた。場所を告げる声。まるで、リボルトを呼んでいるかのような内容。

リボルトは禿山の地を踏んだ。

途端に、目眩を覚えた。森林に入り込んだ時と同じ違和感。

だが、風が彼の毛並みを整えると、すぐに消えた。

何なのだろう、これは。

リボルトは立ち止まって振り返る。毛並みを整えていった風は、遠くへと消えていった。

遠吠えが聞こえる。リボルトは耳にその音を入れ、再び走りだした。

一章 永遠の園（三）

永遠の園（三）

禿山の地も、柔らかかった。リボルトの足を引き込むかのように、禿山の大地は足跡を作っている。

リボルトはしかし、気にしなかった。兎も角、前へ。兎も角、声のする方向へ。リボルトは走った。匂いのする方向へ。リボルトは走った。

月が昇り、輝いている。その光は禿山を照らし、禿山を光の山へと転生させているかのようにだった。薄明るい暗闇。何処かあべこべなその中で、リボルトは走った。匂いを追って、声を追って。

この先にいる。

また、遠吠えが聞こえた。

その時、リボルトは、足跡を見付けた。リボルトの足よりも、大きい物もある。小さい物もある。それらはリボルトの前を横切り、道でない道を真っ直ぐと進んでいる。

リボルトはそれを辿った。

この先なのだ。

そう信じ、走り続けた。

匂いは濃くなっていく。やはり、この先だ。狼の遠吠えが聞こえる。不思議な遠吠えが聞こえる。やはり、此処にいるのはドールではない。

近づけば、近づくほど、リボルトには分かった。

違う種族の遠吠え。複数の遠吠え。

禿山はほとんど足場を悪くしていった。まるで、リボルトが彼らに会う事を阻んでいるかのように。新参者のリボルトに、嫌がらせをしているかのように。

リボルトは立ち止まった。禿山の頂上が見えてきた。そして、リボルトは目を奪われた。満月。今宵は満月だったのか。満月が、禿山の頂上からリボルトを見下ろしている。神々しいまでの輝きが、リボルトを包み込む。安楽の中。その中にいるような感覚に包まれ、リボルトは息を漏らした。

だが、リボルトは首を傾げた。外界とは歪んでいるのだろうか。昨日までいた世界を考えて、今、満月を見ているのは、不自然な事だった。そういえば、昼間共にいたタヌキは、リボルトとは違う地域からやってきたと言っていた。

不思議な所だ。

リボルトは一人思った。リポスだから。そう納得する程には、リボルトはまだリポスに馴染んでいなかった。全てが不思議で、全てが異質だった。

ふと、満月を見つめる。禿山の頂上に生えるように光っている満月。その真ん中に、影がある。一頭の、影。リボルトは目を奪われた。漆黒の狼の影。その蒼い双眸が、真っ直ぐリボルトを見つめている。リボルトは息を飲んで、その狼に近づいた。

狼は、じつとリボルトを待っている。近づけば、近づくほど、狼の姿ははつきりとしてきた。影ではない。実際に真っ黒なのだ。息も吐けぬほど、美しい黒の狼。その目は何処までも蒼く、何処までも澄んでいる。漆黒の狼はリボルトを見つめ、目を細めた。

「リボルト」

リボルトは固まった。

漆黒の狼は真っ赤な口を開いた。

「面白い名だ」

くつくつと漆黒の狼が笑った時、リボルトの周りを取り巻くように、気配が漂い始めた。驚いて見渡したリボルトの目に、四頭の狼の影が見えた。それぞれの色、それぞれの大きさで、リボルトを見つめている。黄色い狼、灰色の狼達、そして、真っ白な狼。どの狼も、美しかった。

リボルトはふと漆黒の狼を見つめた。

「何故、名前を？」

漆黒の狼は目を細め、リボルトをじっと見つめた。

「我が名はシェイド。この禿山の夜の王」

シェイド。リボルトは呟きながら、漆黒の狼を見つめた。美しい黒の狼の目を見つめた。

「お前が来る事は知っていた。リボルト。我が群れで安息の元に暮らすがいい」

シェイドと名乗る狼が言うと、他の狼たちが寄って来た。リボルトより遥かに大きい者もいれば、小さい者もいる。五頭しかいないはずなのに、その特徴は、被る者がいない。真っ先にリボルトに触れたのは、真っ白な狼だった。

「貴方、見かけない顔をしているわ」

真っ白な狼が言った。淡い色の目を細め、くすりと笑う。その色は、シェイドとは真逆の輝きを放ち、月の光そのものの様だった。

「リボルトって言うの。面白い名だわ」

「貴女は？」

リボルトが恐る恐る問うと、真っ白な狼はくすりと笑いながら答えた。

「ブレイズ」

そう名乗った彼女が下がると、他の狼達もリボルトへと近寄り、匂いを嗅ぎ始めた。リボルトもその三頭を見分ける。黄色い色のやけに小さな狼。灰色のやや大きな狼。そして、中位の濃灰色の狼。ふと、最後の狼をリボルトは見つめた。

「犬の匂いがする」

思わず口に出してしまった為、リボルトは身を竦めた。濃灰色の狼はやや顔を顰め、溜め息を吐いた。そしてリボルトをちらりと睨みつける。

「ああ、犬の血が混じっているよ。悪いかね？」

気の強い娘の声だった。

リボルトは慌てて首を振り、彼女を窺った。

「気を悪くさせてすまない。ただ、不思議に思っただけなんだ」

犬の血の混じった彼女は、暫しリボルトの表情を窺っていたが、やはり嫌みを含ませたような溜め息を吐いた。リボルトは困り果てた。本当に不思議だったのだ。何せ、リボルトの周りに、犬の血を混ぜた者などいなかったものだから。

印象を悪くしてしまった。

リボルトは少し落胆した。

「赦してやれよ、ジュナイ」

笑み混じりに言ったのは、灰色のやや大きい狼だった。

「悪気があつたわけじゃないんだし」

ジュナイと呼ばれた彼女は、でも、と灰色の大狼を見つめたが、その目に押されて再び息を吐いた。

「分かったよ、ダステイ」

ダステイと呼ばれた大狼は、苦笑交じりにリボルトを見つめ、言った。

「そう言うわけだから、そう気を落とすな」

「有難うございます」

リボルトが頭を下げると、ダステイは不思議そうな顔でリボルトを窺った。

「ほお？ ドールの一族はもつと怖い者だと思っていたよ」

リボルトは驚いてダステイを見やった。ダステイは如何見てもドールではない。リボルトも見た事のないような狼。それも、漆黒のシェイドや、純白のブレイズ、そして犬の血の混じるジュナイとも違う一族の様だった。それは、ダステイだけでなく、傍にいる小さな黄色い狼も同じだった。

「貴方達は何と言う一族なのですか？ ドールは他にはいないというのは？」

「気を使わなくていい」

ダステイは一言放ち、ふっと笑んだ。

「俺達に種属名はない。ただの狼だ」

「でも、貴方は？」

「ダステイで良い」

低く言われ、リボルトは言いなす。「ダステイは？ それに」と、黄色い狼に目を移した。黄色い狼はふとりボルトを見上げ、慌てたように言った。

「キイと言う」

少年の様な声だった。

リボルトは頷き、言った。

「ダステイや、キイは？」

ジュナイが面白くなさそうな一瞥をやった。

「新入りの癖にしつこいねえ」

「ジュナイ」

そう咎めたのは、離れた場所から見つめているブレイズだった。

彼女はシェイドの傍から、リボルト達を見つめている。

ブレイズに咎められ、ジュナイは肩を竦めた。

「冗談ですよ。からかっただけ」

ジュナイはそう言うのと、リボルトに言った。

「確かに、ダステイやキイは、あたしらとは少し違う。確か、二人とも、少し変わった所から来ていたような……ねえ？」

ジュナイが見つめると、ダステイは頷いた。

「俺はコヨーテ族。キイはジャッカル族らしい。外界で会う事はなかっただろうな」

「コヨーテ？」

リボルトは眉を寄せた。

「聞いた事もないな。ジャッカル族は聞いた事はあるけれど」

「そうだろうねえ」

キイが言った。

「俺だって、ドールなんて聞いたことないし、コヨーテも知らなかったもの。俺が知ってる狼は、ジャッカル族かリカオン族くらいさ」

「ふうん」とリボルトはキイを見やった。きつと、住んでいる場所が違ったのだろう。リボルトの住む辺りにも、遭遇こそしなかったものの、噂から、ジャツカル族の存在は確かにあった。あちらもドール族の事をよく知っているらしい。キイは違うジャツカル族なのかもしれない。リボルトはそう思い、つくづく興味深く感じた。昼間会ったタヌキも、ドールの存在をよく知らなかった。世界は思っているよりも、広いらしい。そして、その広い世界は、同じようにこの永遠の園へと続いているのだろうか。

「ふん」とジュナイが息を吐き、リボルト達に言った。

「種族なんてどうでもいいだろう？　今宵は満月なんだ。早く駆け回ろうぜ」

座り込んでいたシェイドが立ち上がった。蒼い目を細め、大きく身を震わせた。

「ジュナイの言うとおりだ。行こう。満月奥へ。新たな仲間を祝して」

シェイドが月に向かって吠えた。心の奥底まで沁み込む、その咆哮。闇夜の覇者宜しく響き渡るその声。

仲間たちが続いて吠えた。それぞれの、声。ドールとは違う声だった。そして、外界で聞く、狼の声とも違った。恐ろしさと残酷さを兼ね揃えたあの声ではなかった。

それは、不思議な程に、神秘的な声。

夜に相応しい、神聖な声。

シェイドが走りだした。夜の風となつて。黒い風となつて。

ブレイズがそれに続く。シェイドとは真逆の真つ白な風となつて。その二色の風に見惚れていると、ふとジュナイがリボルトを振り返った。

「行こう。案内してあげる」

夜の禿山の中で、走りだす狼達に、リボルトは続いた。

二章 狼の風（一）

二章

狼の風（一）

今夜も狼達は駆けていく。その行く先は、月奥。その名は月の満ち欠けにより、若干変わる。群れに入っただばかりに、シェイドが言っていた満月奥とはこの事だった。だが、群れに入って暫く経つても、リボルトにはこの月奥が理解出来なかった。他の狼達が理解しているのか確認する事も、何処か憚られた。

リボルトは月を仰いだ。白い月の満ち欠けは、外界と変わりない。違うのは、きっと、その時間の流れ。外界とずれている、時間の流れのみだ。

今宵は、半月。下弦の半月。リポス風に言えば、半月奥。もしくは、下弦奥に行く夜なのだろうか。そう言えば、外界では、どのような月なのだろうか。そもそも、リボルトが此処へ来て、何夜経っているのか。

リボルトは半月を見て考え、ふと止めた。

そんな事が分かったと言って、如何なるというのか。

今の彼にはこの世界を生きる道はない。この世界は美しい。そして、とても居心地がいい。何故ここへ辿り着いたのか。何がここへ引き寄せたのか。リボルトには分からない。だが、幸せに満ちたこの世界で、リボルトは何の疑問も抱かなかった。

それは、群れの仲間も同じだった。

彼らは皆、外界から来た。此処にいる生き物の殆どが、外界から来たらしい。この地に生える草花や木々も、外界からの風に釣られてやってきたと言われているらしい。

誰がそれを言ったのか、リボルトは訊ねた。

すると、群れの者達は眉を寄せ、互いに見合わせたのだった。

「あたしはシェイドから聞いた気がする」

そう言ったのは、ジュナイだった。彼女はちらりとシェイドを見やり、首を傾げる。

「違ったかな？」

シェイドは低く唸り、溜め息を吐いた。蒼い目が闇夜に照り返っている。その目は穏やかだが、リボルトは少し怖かった。

シェイドがふっと目を細め、ジュナイに言った。

「ああ、そうだったな。お前が来た日に教えたかも知れない。だが、それは、俺ではなくてブレイズだったと思うが？」

蒼い目がブレイズを見つめる。リボルトもブレイズを見つめた。闇夜の中で、ブレイズは、白く輝いていた。まるで月の化身かのような、その姿。

ブレイズは窺うようにシェイドを見やると、首を傾げた。

「覚えていないわ。何せ、昔の事ですもの」

ブレイズが言った。

「でも、知っている。此処には神がいるの。リポスの守護神がいるのよ。神は此処に住む全ての者を見守り、リポスの平安を守り続けている、とね」

だが、ブレイズのこの話も、誰が言い出したのか分からなかった。狼達は話し合った。きつと群れ以外の誰かが話したのだろう。そういう可能性も持ち出された。しかし、誰が言ったのか、誰も思い出せなかった。そういうものなのだ、と言ったのは、コヨーテのダスティだった。

「此処では揺ぎ無い安息の毎日が訪れる。住む者は皆、死を感じず、永遠の時を生きていく。外界から来たばかりのお前には奇妙に思えるかもしれない。だが、直に慣れてくるさ」

リボルトは鼻で息を吐いた。

そういうものなのか。

そう心に問いつつも、溜め息が漏れる。そう思うしかないのだ。此処を出る方法など無いのだろう。それに、此処を出よう等と思わない。思わない以上、飽く迄も在るが俛に、この世界を受け止めるしかないのだ。

「そう難しく考えないでいいよ」

ジュナイが言った。

「それよりも、今宵の半月。下弦奥は何処なんだい？」

ジュナイの問いに、座っていたシェイドが立ち上がった。

「湖。山の向こうの湖だ」

「へえ」と目を丸くしたのは、ジャツカルのキイだった。彼は尾を軽く払うように振ると、軽い身のこなしで立ちあがり、シェイドに訊ねた。

「湖つてのは、鹿達の領域じゃないの？ 勝手に行ってもいいのかしら？」

そのあどけない声に、ジュナイが少し目を細めた。

シェイドは皆を立たせ、キイに答えた。

「別に鹿の物じゃない。あの湖は、他のあらゆる生き物が立ち寄る場所だ」

「でも……」と言いかけたキイだったが、そのまま口籠り、頷いた。シェイドはその様子を見つめると、大きく咆哮した。出掛けの合図。リボルト達は一斉に駆けだした。

白い下弦の月に照らされる禿山の道を、狼達は駆けていく。毎夜のように、毎夜と同じく、彼らは駆けていく。時折立ち止まり、月に向かって咆哮する。黒と白の風と化したシェイドとブレイズを追いながら、リボルトは咆哮の余韻を味わった。月の光を味わった。美しい空気が狼達を包み込んでいく。美しい匂いが狼達を包み込んでいく。

リボルトはその世界に酔いながら、二色の風を追った。仲間達と共に。風となつて。

この喜びは狼にしか分からない。この楽しみは狼にしか分からない

い。

空腹もなく、狩りへの欲求もなく、ただあるのは衝動。山を駆けまわる、衝動。月に吠える衝動。仲間達と風になる衝動。

この世界は、美しかった。

狼達の衝動を静かに受け止めるほど、美しかった。

何故此処に居るのか。如何して此処に来たのか。

リボルトはその疑問を捨て始めた。

考えるだけ、無粋だ。リポスはこんなに美しいのに、それに泥を塗っている気がした。

そして、また、リボルトは咆哮する。

月に向かって。

リボルトを包み込む、リポスに向かって。

ふと、リボルトは月の傍に、違う光を見たような気がした。

「あれは……」

その光はリボルトの足を留めさせ、リボルトの眼を己に打ち付ける。七色の光に見えた。鳥の様な、光に見えた。

「どうしたんだい？」

ジュナイが振り返った。

「皆、行っちゃうよ？」

リボルトは我に返った。

はっとジュナイを見つめ、空を示した。

「今、鳥が……」

「鳥？」

ジュナイは不思議そうな顔でリボルトを見つめる。

その時、咆哮が響いた。シェイドの声。呼んでいる。

地を蹴るジュナイに釣られて、リボルトは再び走り出した。

走りながらふと振り返るリボルトの目には、もう光の影も形も映らなかった。

「あの鳥は？」

独りリボルトは呟いた。

だが、すぐに走る事に専念する。シェイド達が待っている。遅れているリボルトとジュナイを待っている。

夜はすでに半分過ぎているのだ。

美しいその時間が、すでに半分過ぎているのだ。

リボルトは光の事を頭の奥へと仕舞い込んだ。

何であれ、俺には関係ないことなのだから。

「やっぱり鹿がいるねえ」

ジュナイが言った。

リボルトは走りながら、ふとジュナイの見やる方向に目を合わせた。

リボルトとジュナイの走る山道。その横は緩やかな崖となっている。そして、その奥に、森林に包まれる湖が薄らと見えた。湖には、幾らかの蠢く影がある。

「あれが、鹿達？」

リボルトは首を傾げた。

ジュナイがふと振り返り、怪訝そうに言った。

「何だい、見えないのかい？」

「見えるのか？」

リボルトが逆に訊ねると、ジュナイはけらけらと笑った。

「狼の血が濃い癖に、あんなのも見えないなんてねえ」

小莫迦にされ、リボルトは少し苛立った。だが、それよりも、ジュナイがあゝの影を鹿だと断言する事に訝しんだ。

「本当に鹿か？ 何か違う生き物じゃないのか？」

「ふふん。あの湖は鹿の大好きな場所だからねえ……と言うか、何処から如何見ても鹿だよ。それ以外の何者でもない。あんな、よくそれで外界で暮らしてたんだねえ。ドールってのはそんなものなのかい？」

ジュナイの言い様に、いよいよ我慢ならなくなった頃、やっとシェイド達に追いついた。

シェイドは何も言わず、緩やかな崖を降りはじめた。それにブレ

イズが続くと、リボルト達も降り始める。

ほどなくして、木々が囲む森林へと入り込む。

月光の飾る木々の間を通り過ぎ、狼達は真っ直ぐ湖へと向かう。

シェイドやブレイズ、そして仲間達を頼りに、リボルトも走り続けた。

寒くもない。暑くもない。

不思議なその大地を、リボルトは走り続けた。

毎夜のように。

月奥へと向かう。

今宵は、下弦奥へ。

下弦奥の、湖へ。

木々が誘っていくのだ。

狼達を。

風になった狼達を。

シェイドが大きく咆哮した。

二章 狼の風（二）

狼の風（二）

湖は確かに幻想的だった。月の光に照らされて、所々反射している。その輝きは遠くからも確認でき、リボルトの目に焼き付けられていた。

「やはりな、鹿共がうようよいる」

そう言ったのは、ジャツカルのキイ。リボルトのすぐ横で走り続けるキイだった。

「ここには鹿は多いのか？」

リボルトが問うと、キイはその円らな瞳をちらりと向け、くすりと笑んだ。あどけなさの多く残された笑み。まだ子どもらしさの十分残された表情。

「まあ、俺達よか多いのは確か！」

キイはそう言うのと、リボルトの先へと飛び出して行った。湖に着く。

遠くから見えていた輝きと、蠢く影がはつきりとしてきた。

鹿……。

リボルトはその影を見つめた。その動きを見てもうずうずしないのは、単に腹が減っていないからというわけでもなさそうだ。

鹿達は辿り着いたリボルト達を次々に振り返ったが、何の驚愕も無しに目線を外していく。彼らは彼らで、狼に対する恐怖心等は無くなってしまうらしい。それぞれがそれぞれの思うままに座り込み、湖の輝きを体に宿している。

リボルトは息を飲んだ。

この湖こそ、鹿の為に存在するという事が良く分かった。鹿の取り囲む風景はとても美しく、神秘的で、リボルトの目に深く焼き付くのだ。

きつと、彼らはリポスの湖の神に仕えているのだろう。

リボルトが一人そう思っていると、声を掛けられた。

「リボルト？」

女の声。狼仲間の声ではなかった。

リボルトは、はっとして見渡す。鹿と目が合った。一頭の雌鹿。

「プレティ……」

其処にはプレティがいた。共にここへ足を踏み入れたあの雌鹿。リボルトがこの地に足を踏み入れる切っ掛けとなった、あの雌鹿。だが、リボルトは其れつきり、プレティに声を掛けられなくなった。美しい。信じられないほど、美しい。全ての輝きは、プレティの為にあるのかと思うほど、美しかった。その美しさは、他の鹿達とは明らかに違う。プレティを取り巻いている雰囲気そのものが、違うのだ。

狩ろうとしていた時。共にこの地を歩んだ時には思わなかった。

リボルトはだが、息を飲んで、プレティの姿をまじまじと見つめる。

濃紺に包まれた景色の中で、プレティの赤い体毛を鮮やかに着飾らせるかの様に、光の粒が漂っている。その幻想的な光の中で、プレティの体は淡く輝いて見えた。

こんなに神秘的な鹿を見たことがない。

「よかった。狼の仲間に会えたのね」

プレティが言った。

微かに微笑む姿そのものが、幻想的だった。

「リボルト？ どうしたの？」

プレティに問いかけられ、リボルトは我に返った。

「あ、ああ。プレティ、久しぶりだ。君も仲間に会えたようですよ」

乾いた笑いを洩らしながら、リボルトは如何にか切り返した。

プレティは不思議そうに、しかし、小さく微笑むとシェイドを見つめて言った。

「今宵の下弦奥はこちらなのですね？ 狼の方」

「ああ、悪いが邪魔をする。そなたらに迷惑をかけようとは思わん。どうか気にせんでくれ」

「そうは参りませんわ」

プレティは言った。

「狼の方は山の使い。相応の持て成しをせねば、と我らが王も常々、プレティはその瞳を横へと向け、傍に座り込む鹿の群れへと声をかけた。

「ねえ。ベイスン」

プレティの呼びかけに、むくりと起き上がる者があった。

リボルトはまた目を奪われた。

それは、見た事もない程神々しい牡鹿だった。大木の枝の様な角、石の様な蹄、ふさふさと生えている胸毛、そして何よりも、大きく開かれた澄んだ瞳。

ただの鹿ではない。

そう思わせるような牡鹿だった。

ベイスンと呼ばれた彼は狼達を見据えると、穏やかな声でシェイドに言った。

「シェイド。久々だ」

シェイドがやや目を細める。

ベイスンは軽く地面を掻き、続けた。

「そなたら狼がここへ来たのは喜ばしき事だ。どうりで湖の輝きが常ごとでないはず。歓迎しよう。心行くまで堪能するがよい」

「礼を言う。光栄な事だ」

シェイドは短く言い、プレイズを連れて湖へと寄っていった。

気づけば、他の狼達も各々の好きなようにしている。

リボルトはやや戸惑いつつも、水を飲もうと湖へと寄ろうとした。腹が減らないのは確かだが、渴きは来る。あれだけ走った後だからか、リボルトの喉はからからだった。

だがいざ湖へ向かうとした時、ベイスンに見つめられている

事に気付いた。

リボルトが振り向くと、ベイスンは耳を動かし、じっとリボルトを見つめ続けた。

「なにか？」

リボルトが問うと、ベイスンは口を開いた。

「そなた、来たばかりのドールか？」

リボルトはベイスンを向き座り込んだ。

そして「ええ」と頷き、空かさずに付け加える。

「其処にいるプレティと同じ時に来ました」

ベイスンの耳が微かに動いた。ちらりとプレティを見つめ、再びリボルトを見やる。リボルトとプレティは一瞬だけ目を合わせた。

「成程。彼女を追って来たか。喰うつもりだったわけか。しかし、そなたが狙わなければ、プレティが此処へたどり着けなかったのも、また事実」

ベイスンはそう言つて、背を向けた。

「ゆるりと過ごされよ、若き狼」

ベイスンの後を追ひ、プレティも下がる。リボルトはその二人を暫し見つめると、静かに湖へと向かった。

ゆっくりと屈み、水を飲む。

不思議な味がした。ここに来て以来飲んでいる水よりも、些か甘いような気がする。

「おい、リボルト」

声をかけられ、リボルトは顔を上げた。

気づけば、隣にジュナイがいた。にやにやと笑いながら、ジュナイは顎でプレティのいる方向を示す。

「あの綺麗な姉ちゃん、お前の知り合いか？」

まるで少年の様な声で、彼女は言った。

「鹿の王様もはらはらしていたじゃねえか、え？」

リボルトは溜め息を吐き、水を飲み続けた。

ジュナイはその横に屈み、リボルトに囁くように言った。

「なあ、ちょっと出ないか？ 退屈でさ」

リボルトは水面から口を離し、ジュナイを見つめた。

「いいのか？ 勝手に抜け出しても」

「夜明けまでに帰ればお咎めなしさ」

けらけら笑うジュナイを見つめ、リボルトは暫し考えた。仄暖かい風。心地よい匂い。甘い水の貯まるこの場所。

リボルトは鼻で笑い、答えた。

「一人で行けよ」

「な、なんだよ！」とジュナイは押し殺した声でリボルトに噛みついた。尾をばたばたと振り、不満そうな顔でリボルトを見つめる。

「か弱い女の子一人で夜道を歩かせる気がい？」

「キイやダステイを誘えばいいだろう？」

ジュナイは呆れたように「キイやダステイ！」と繰り返し、リボルトに言った。

「キイが用心棒になるわけがないだろう？ こっちが保護者じゃないかい。それに、ダステイだって？ あんな奴から守ってもらっためにあんたを誘ってるんじゃないか！」

「おい、俺の話をしてないか？」

少し離れた場所からダステイが声をかけてきた。

ジュナイは呆れ顔のまま「してないさ」と答えると、リボルトを見つめた。

「なあ、頼むよ」

リボルトは息を吐き、考える。

このリポスでジュナイが心配するような荒くれ者が存在するのだろうか。そもそも、そんな危険を冒してまで群れを離れる必要があるのだろうか。

そうは思ったのだが、ジュナイは喰い下らない。

とうとうリボルトは頷いた。

「わかった。だが、少しだけだぞ？」

「有難う」

ジュナイは本当に嬉しそうに笑った。

その笑みを見ると、リボルトも何故か嬉しくなった。

何だ、俺。

すぐに覚めたのだが。

兎も角、ジュナイに導かれるままに、リボルトは歩きだした。明らかに群れから離れるような進み方だったというのに、一番咎めてくる筈のシェイドやブレイズは何も言わなかった。ダスティやキイに至っては、気付いていないようだ。

夜明けまでに帰ればいいだろうしな。

そう思いつつ、リボルトはジュナイに続いて歩いた。

二章 狼の風（三）

狼の風（三）

辺りは冷え冷えとしていた。

この地へやってきて、初めて感じる寒さかも知れない。

だが、リボルトは思う。

それは、決して外界と同じ寒さではなく、無意識のうちに生まれ
ては去っていく風のための生む冷たさだった。

やはり此処は違う。

リボルトは思いながら、ジュナイに続いた。

彼女が何処へ行きたいのか、リボルトにはよく分からない。だが、
彼女曰く、「たまには群れを離れたリフレッシュも必要だ」との事
なので、リボルトは黙って彼女に続いた。

下弦の月が傾いている。

あとどのくらいで夜明けなのか。

リボルトはそればかりを考えていた。

ジュナイはと言うと、リボルトが居ても居なくても同じなのでは
ないかと思う程に、勝手気ままに進んでいた。だが、リボルトがわ
ざとその場で止まってみたり、違う道へと行こうとすると、目敏く
気付き、文句を言う。

彼女の背には目でも付いているのかと疑う程に、リボルトの行動
を呼んで振り返るのだ。

リボルトはだんだん疲れてきた。

黙ってついて行くのが辛い。

何よりも、居た堪れない。

「なあ、ジュナイ」

彼は遂に声をかけた。

「何処へ向かってる？」

リボルトの問いに、ジュナイはちらりと振り返り、眉を微かに寄せた。その仕草は少年らしく、ジュナイが娘である事を忘れてしまふほどだった。

「うん、実は……」

そう喋り出すジュナイに、リボルトは少し驚いた。話せるような目的があったとは思わなかったのだ。ただふらふらと歩いているだけかと思っていた。

ジュナイは顎で森林の先を示した。

禿山へと続く道。

リボルト達が先ほど降りてきた所だ。

「あつちに、不思議な洞窟があるんだ」
ジュナイは言った。

首を傾げ、尾を軽く振り、彼女は一言ずつ噛み締めるように言った。

「一度行ってみたくて……でも、一人ではちょっと……ね」

リボルトは怪訝に思った。

それならば、どうして湖で誘った時に言わなかったのだろう。

その問いに、ジュナイは素直に答えた。

「その洞窟の話をする、シェイドが不機嫌になるんだよ。何でだかも教えてくれないんだけれど、その話はやめろって。だから、あたし、どうしても気になってねえ」

「ふうん」とリボルトは呟き、ジュナイの示した方向を見やった。

そう離れていないように思う。あの場所まで行って、帰ってくるのに時間もかからないだろう。

「分かった。ついて行くよ」

「よかった」とジュナイは息を吐く。「怖がって帰っちゃったらどうしようかと思った」

その言葉に、リボルトは些か傷ついた。

「俺がそんなに臆病に見えるのか？」

「だって、暗黙のルールをやたら守ってるんだもん」

ジュナイはそう言うと、駆けだした。

リボルトが行く気を表した所為だろう。その足取りは軽い。リボルトは少し溜め息を吐き、その後を追った。

ジュナイを追っている間、リボルトは考えていた。

ここに来てからの日々。そして、ここに来る前の日々。一体今が何時で、この地へ来てどのくらい経っているのだろうか。

思い出せない。

だが、思い出す意味などあるのか。

「ねえ」

ジュナイが声をかけた。

リボルトが見やると、ジュナイは前足で前方を示していた。

「すぐ其処なの」

ジュナイの言っている意を悟り、リボルトは走った。

駆けだしてすぐ、リボルトはそれに気付く。

禿山の一角。其処は絶壁となっていた。緑に包まれた砂色の絶壁。所々苔が生えているのか、色が違う。そして、その足元。つまり、リボルトの前にて、絶壁はひび割れており、隙間ができている。ジュナイやリボルトは勿論、ダスティやシェイドのような大柄な者でも楽々入れるだろう、そんな隙間だった。

「これが洞窟？」

ジュナイは頷き、黙って歩み出した。リボルトは暫し戸惑ったが、溜め息を吐き、その後を追う。

中は其処まで暗くなかった。何処からなのか、光が入ってきているらしい。こそそとした話し声が聞こえる辺り、鼠か留守を預かっている蝙蝠でもいるのだろう。もしくは、虫だろうか。流石にリボルトでも、虫の声を聞く能力は身に付けていなかった。彼らとリボルト達との間には、少なからずの壁があるのだ。

リボルトはふと耳を傾けた。

ひたひたと音がする。水の音らしい。音楽を奏でるかの様なその

音。不気味だが、美しくも感じられるその音に、リボルトはやや心を奪われた。

「何だろう、この匂い」

その時、ジュナイが言った。

リボルトは我に返り、自身の鼻を澄ました。

この場に不釣り合いと思われる匂いがする。森林でするのならともかく、こんな場所でこんな匂いがするものなのだろうか。

リボルトはやや首を傾げ、ジュナイに言った。

「猫のような匂いだな」

「ような、じゃなくて本当に猫じゃないかい？」

ジュナイがちらりと振り返った。

リボルトは考えた。蝙蝠がいる。鼠がいる。それならば、猫がいるのも分かる。だが、それは少なくとも外界での話だ。ここは、リボス。誰も腹を空かせず、誰も獲物を求めない場所なのだ。猫がいるのだとしたら、如何してこのような場所にいるのだろうか。すぐ其処に森があるのに、如何してこのような場所にいるのだろうか。

「誰かな？」

声がした。

リボルトもジュナイも飛び上がりそうになった。

匂いの持ち主はすぐ傍にいたらしい。

全く気付かなかった。よく見てみれば、暗闇の中で火の玉の様な光が見えた。如何してこの光に気付かなかったのだろう。

気持ち落ち着かせると、その者が間違いない匂いの持ち主である猫だと分かった。猫と言っても、山猫だった。大きな山猫だった。リボルトは眉を顰めた。このような山猫は見たことがない。何と言っ種族なのだろう。

「あ、あんた……」

ジュナイが言葉を取り戻して山猫に声をかけた。

「あんた、大山猫だね？ 大山猫リンクスだね？」

「そう言う貴女はジュナイだね？」

大山猫リンクスが目を細めて言った。

ジュナイは息を詰まらせた。再び喋る機能を封じられてしまったらしい。その様子から、彼女とこのリンクスが知り合いと言っわけでもなさそうだ、トリボルトは思った。

リンクスはリボルトへと目をやった。

「そして、貴方はリボルト」

リボルトも身を竦めた。願ってもいなかったのに、ジュナイの感覚がリアルに体験できてしまった。

「二人とも心を奪われ、野性を失った、哀れな狼だね」

リンクスは目を細めたまま、くすりと笑って言った。

ジュナイがぴくりと耳を動かした。やや不満そうにリンクスを見つめているが、その表情からは、恐れが隠し切れていなかった。

「どういう意味だ？」

ジュナイが声を震わせて訊ねた。

リボルトは静かにそのリンクスを見つめる。

リンクスが言った。

「私はビアレス。リンクスのビアレス。このリボスの隙間でリボスを見守っている。貴方達、群れを離れてきたね？　もう直夜が明けらる。悪い事は言わない。そろそろ帰りなさい」

深く響く女性の声。ビアレスと名乗ったリンクスが耳を倒した。

その耳の先には細長い触角の様な毛が生えている。ビアレスが笑むと、その姿が段々と霧に包まれていった。

「待つて」

ジュナイが尾を立てた。慌ててビアレスに駆け寄っていく。だが、ジュナイが一步足を踏み出した途端、世界が大きく揺れた。

この感じ……。

前に体験した感覚だった。

「待つて、ねえ！」

ジュナイの声が聞こえる。やや小柄の彼女の姿が、リボルトの目には歪んで見えた。犬の匂いの混じるジュナイの匂いが、掠れてい

く。

「ジュナイ、こっちへ！」

リボルトが叫んだ時、歪みが治まった。ジュナイが尾を垂らし、振り返る。

其処は、禿山の麓だった。

辺りは何事もなかった様に、しんと静まり返っていた。

三章 大山猫（一）

三章

大山猫（一）

下弦奥のあの夜。夜明けぎりぎりに帰ってきたリボルトとジュナイは、お咎めなしだった。というよりも、シェイドもブレイズも何処が無関心といった感じで、小言の一つでも貰うだろうと予想していたリボルトは、少し拍子抜けした。

キイもいなかった事に気付かなかったらしい。

ただ、ダステイだけが意味有り気に、にやにや笑いながらリボルトとジュナイを眺めていたので、リボルトはつい好意的でない視線をダステイに返してしまった。だが、ダステイは憤慨するどころか益々にやにやるばかりで、何の効果もなかった。

ジュナイはジュナイで、あの夜見たリンクスのピアレスの話に一切触れず、心成しかリボルトを避けているような気がする。そのお陰で、ダステイの好奇の目線が更に隔心の無いものへと近づいていたが、二日、三日も経てば、もうどうにでもなれ、という気持ちがりボルトを包み込んだ。今に至っては、当たり前の感覚だった。

だが、リボルトはあの夜から、妙に禿山の麓が気になった。ジュナイに連れられていった、あの洞窟が気になった。リンクスの鋭い眼光が目には焼き付いていた。

何故だろう。

彼女の姿を見た瞬間、彼女の声を聞いた瞬間、リボルトの内部が揺さぶられたのだ。気付かないままに失っていた何かに気付いたような。それを求めているような。そんな気がするのだ。そして、それは、掛け替えのないものだったような気もする。

だが、一体、何だというのだ。

リボルトは知りたかった。

この虚無的な感覚が一体何なのかを。

一体全体、自分は何を無くしてしまったのかを。

「心と野生……」

リボルトは呟いた。

ピアレスが微笑みながら言った、その言葉。

「心を奪われ、野性を失った……」

どういう事なのだろう。それらがリボルトにとって、掛け替えのないものだっただろうか。ここまで引きずる様な、何かだったのだろうか。

リボルトは知りたかったのだ。

そして新月奥に着いた今宵。

再びリボルトは群れを離れた。

如何しても気になったから。如何しても確認したかったから。

リボルトは、森林を駆け抜けた。

新月奥は禿山の中腹だった。其処に辿り着いたシェイドは、暗闇の中をゆったりとブレイズと共に過ごす。ダステイ達も各々の好きなように寛いでいるなかで、リボルトはそつと抜けた。一気に山を駆けおり、滑り込むように木々の包む大地へと降り立つ。明から様な群れ抜けだったのに、シェイド達はやはり、何も言わなかった。まるで、全く気付いていない事を装っているかのように。

ふと、走りながら、リボルトは振り返った。

闇に包まれる森林を掻い潜りながら、リボルトは後方の一点を覗く。

「いるんだろう？」

声をかけた。

「ジュナイ」

暫しの静寂の後、忍び笑いの様な声が漏れた。ジュナイの声で間違いないだろう。匂いもしてきた。

「ご名答。案外、鼻良くなったんじゃない？」

「おい、莫迦にするなよ。幾ら俺だって、こんな近くの匂い分かるさ」

リボルトは呆れてジュナイの影を見やり、それで、と溜め息を吐いた。

「それで、ついて来たってことは、俺に用か？」

「自惚れんな」

ジュナイは飛び跳ねるようにリボルトに追いつき、にやけ顔で小突いてきた。少年の様な無邪気さに、リボルトも思わず笑みが漏れた。

「まあ、ついて来たってのは間違いじゃないけどね。あたし一人じや抜けなかったさ。あんた、言っとくけどね、そう頻繁に群れ抜けない方がいいぜ？ シェイドやダステイは気にするような奴じゃないけど、ブレイズやキイが気にするんでね。特に、キイなんかは神経質極まりなくてね、そういう年頃なのか」

「おい、キイは君と歳変わんないだろ？」

「失礼だね」

ジュナイは眉を顰め、リボルトを見上げた。

「あたしゃこう見えても、キイより一歳上だよ。キイとあたしの一歳じゃ相当な差さ」

「俺にとっちゃ、どっちもお子様だけどね」

呟いた瞬間、再び小突かれた。というか、これは、突進だろうか。小声のつもりだったが、ジュナイは地獄耳らしい。

「あんただって、あたしと変わんない癖に」

リボルトは薄らと笑みを浮かべ、前方を見やった。

新月の夜。

辺りはいつにもまして暗い。特に、森林と禿山の境は寂れていた。夜行性の獣一人でもいれば違うのに、そうリボルトは思った。

「あと少しだったよな？」

リボルトの問いに、ジュナイは空かさず肯いた。

「ああ、もう少ししたら、開けた場所に出る。その傍だよ」

「ジュナイ、君は俺についてきたんだよな？」

「あん？」

リボルトはジュナイを見やった。

狼犬のジュナイはリボルトよりも一回り小さい。ジャッカルであるキイよりはずっと大きい。平均的な狼からすると、小さいのだろうか。そんな予想をしたが、リボルトは考えなおした。そう言えば、彼自身、ドール以外の狼をあまり知らない。彼が基準にしているのは、飽く迄、シェイド、ブレイズ、ダステイ。同じ女であるブレイズとジュナイを比べると、ジュナイの方が小さかったものの、単にブレイズが大柄なのかもしれない。きっとその中に必ずしも、狼犬だから、という理由は含まれないだろう。

ジュナイが不思議そうな目でリボルトを見つめている。

リボルトは少し、独りで焦り、独りで落ち着いて、質問を続けた。

「もしかして、君もビアレスが気になるのかい？」

ジュナイはじつとリボルトを見つめ、首を傾げた。

「それ以外、理由はないだろう？」

呆気なく言われ、リボルトは苦笑した。

「そうだ。確かに。」

「そついや」

リボルトは照れ隠しに質問を変えた。

「君、ビアレスに会った時に、リンクスって言ったけど、あれは何？」

「大山猫」

ジュナイは呆れたように一言述べる。そして、ふっと笑んで付け加えた。

「そうだなあ、あたしの故郷では、神様の使いだったような気がする。否、神様って言うよりも、もっと具体的な？ 光を操るような幻獣だったか？」

「猫って、例えば山猫でも、もう少し柔な奴かと思ってたが……」

「だから、大山猫だつてば。うーん、リボルトって結構無知だね」
ざっくりと刺され、リボルトは少なからずショックだった。

「それとも、あんたの育った所じゃ、山猫なんていなかったの？」

「まさか。いたよ。虎とか」

「馬鹿だね、あんた」とジュナイはけらけらと笑い飛ばしてリボルトを見上げた。なかなか肝に障る事をしてくれる。と思つたが、確かに笑われるようなことかもしれない。

「あんた、虎と住み分けしてて、なんでリンクスぐらいにビビつてんのさ。虎とかと比べたらあんなの家猫じゃないか」

「家猫？」

反射的に問い掛けると、ジュナイはわざとらしく溜め息を吐いた。リボルトは考え、ふと思ひ出した。

そう言えば、珍しい犬の知り合いが出来た事があつた。人家の近くで、なかなか会うのは厳しかったが、不思議と話があつたため、度々会いに行つていたのだ。当初はリボルトに警戒していたその犬だった。名前はコリーだっただろうか？　が、リボルトが人間の物に手を出すほど困つていないと知ると、次第に気を許していった。

そんな彼が、ある日漏らしていたのだ。

最近、家猫どもが鼠捕りではない物に夢中になって主人が困つてゐる。

リボルトは不思議だつた。

犬はよく人間と共にいるのを見かける。耳に入ってくる犬の声から読み取れる中には、何処に人間の忠義などもあつた上、繋がれている犬も偶に見かけたからだ。

だが、猫は違った。

彼らは夜な夜な近所に住む同胞と集まっていたのを何度か見たことがあるが、其処から漏れるのは、人間への不満や要望ばかり。決して、彼らは飼われているのではなく、利害一致で一緒に住んでいるだけという間柄だと、その時はっきりと知つた。

つまり猫は、犬とは違う。

だから、今、ジュナイに聞いた家猫という言葉が、しっくりこなかっただけなのだ。

なぜ、一緒に住んでいるだけの彼等を家猫というのだろうか。

家猫。人間の家に住む猫。

同居する猫という意味か？

そんな事を少し考えていた。

「あんた、家猫も知らないのかい？」

「あ、いや、思い出した。ただ猫と家猫の違いを考えてただけだ」
リボルトが言くと、ジュナイはぽかんとした顔で、リボルトを見上げてきた。

何かまた、彼女を呆れされる様な事を言ったのだろうか。

リボルトが少し戸惑っていると、ジュナイが言った。

「あんた、面白い奴だね」

くすりと笑って見つめてくるジュナイに、リボルトは呆気に取られた。

ふと、森の道が開けた事に、二人は気付いた。

三章 大山猫（二）

大山猫（二）

禿山の麓の裂け目がある。

若しかしたら無いかもしれない。そう思っていたリボルトは、妙に安堵した。

あの夜、ビアレスにあった夜、不思議な体験をした。ビアレスが微笑んだ瞬間。その姿が霧に包まれた瞬間。世界が揺らぐような奇妙な体験をした。

そして、その体験は以前にもしている。

そうだ。

リボルトは思い出した。

世界が揺らぐ体感。それは、初めてこの土地に来た時、何度も何度も感じた。今でこそ慣れてしまった為か、あまり感じないのだが、平原から森林へ、森林から禿山へと渡るときなどに、ぐらりと世界が揺らぐような感覚を覚えたものだ。あの山猫が笑った時、その薄らいでいた感覚が、どっと押し寄せてくるように、リボルトを襲ったのだ。

あいつは何者なのだろう。

禿山の裂け目を覗き込み、リボルトは考えた。

そもそも、今もこの中にいるのだろうか。

否、それよりも、ビアレスという者は、本当に存在したのだろうか。

「なあ、入ってみようぜ？」

ジュナイが言った。

リボルトはぎこちなく頷き、身を屈めて裂け目へと潜り込んだ。

あの夜見たのと同じ景色。

あの夜嗅いだのと同じ匂い。

だが、包み込む雰囲気は、あの夜と違う。

如何違うのか。

そう問われて答えられるほど、リボルトは冷静ではなかった。だが違う事だけは確かだ。それは若しかしたら、ここに踏み込むリボルトとジュナイの心持の所為なのかもしれない。

「誰だい？」

声がした。

誰の声か、そう考える迄もない。

一度会ったきりなのに、リボルトは確信もってその声に答えた。

「俺です。リボルトです」

「……と、ジュナイ」

空かさずジュナイが付け加えた。

その時、暗闇に目が光った。段々と細められ、リボルトとジュナイの姿をじっくりと見やる。そして、ふっと緩められた瞬間、その輪郭がはっきりとしてきた。

まるで、魔術でも使うかの様に、大山猫は現れた。

「貴方達、やはりまた来たか。姿を晒したのは良くない事だったかもしれないね」

霧に様に現れたビアレスが微笑みながら言った。

その染み透るような女の声に、ジュナイが微かに震えるのが分かった。

まるで、ではない、きつとこの猫は、本当に魔術師なのだ。

そのような神聖さがビアレスにはあった。ジュナイもリボルトも、怖れ慄いてしまう程の、神聖な雰囲気が彼女を取り巻いていた。

「また来たからには、何か目的があるのだろうか？」

ビアレスに問われ、リボルトは身を竦めた。

目的。

そう言えば、目的とは何だっただろう。

理由。

そう言えば、理由とは何だっただろう。

リボルトはジュナイをちらりと見やった。その様子からして、彼女もリボルトと同じらしい。二人は返答できず、ただ戸惑いながらビアレスを見つめた。

ビアレスは呆れ気味に息を吐くと、静かにその短い尾を揺らした。「つまり、ただ何となく此処へ来たのだね」

そう言つて、ビアレスはリボルトとジュナイを見比べた。違う。理由はあつた。目的はあつた。思い出せない。

リボルトはじつとビアレスを見つめた。

「赤狼ドールに、狼犬……」

ビアレスは呟くように言い、彼女は耳を微かに動かす。

「偉大な獣達は尽くこのリポスの虜だね。全てを忘れ、永遠に、永遠に、心を奪われ、野性を無くし、永遠に、永遠に、繰り返しの毎日を過ごす。終わりのない人生を送るのだよ」

「どういう意味だ？」

リボルトが問うと、ビアレスは不敵に笑つた。その笑みはまさに、高台から犬を馬鹿にしたように目を細める猫の笑みだった。

だが、不思議と歯向かう気持ちは起きなかった。

ビアレスは髭をぴんと伸ばすと、静かに諳んじた。

「嗚呼、麗しの園リポス」

その者、その地を踏みしめし時　その永遠の理を得るだろう
虚偽に着飾られしその者は　無知のままに平安に眠る

その真意を見抜くことなく

心奪われ生きていく　野生奪われ生きていく

やがて、その者気付く時来ても　既にもう遅かりし頃合い

全ては永遠の園の土の中

全ては永遠の園の闇の中」

しんと静まり返る。

水を伝うような音のみが、響いていた。

歌うような、呟くような声で告げられたその言葉は、リボルトの体に染み込んだ。

それと同時に、何故だか途轍もなく恐ろしい、緊張感の様なものがリボルトの体の芯から湧いてきた。

何故だろう、知らない方が良かったような歌を聞いてしまった気がする。

ジュナイもまた、同じようだった。

彼女は大きく目を見開き、じっとビアレスを見つめている。

ビアレスは短い尾を軽く振ると、再び目を細め、呆然とするリボルトとビアレスを見つめた。まるで、その反応を楽しんでいるかのように、ビアレスは微笑んでいた。

「貴方達はまるで、冒険者のよう」

ふと、ビアレスが語り出した。

「与えられた永遠に縛られる事無く、私を見つけた。私を見つけて、心と野生を思い出し掛けている。だがそれは、あまりよくは無いこと。幸せを考えるのならば、今すぐお帰り。二度と私に会ってはいけない」

ビアレスの目線が鋭くなる。

だが、リボルトは動けなかった。

野生。心。

それらは何かとても大切なものだったような気がする。限られているけれども、掛け替えのない命の中で、大切なものだったような気がする。

全てが偽り。

リボルトの中に、その考えが過った。

この美しさの全てが、偽りなのかもしれない。

だが、それは、考えるだけで恐ろしい事だった。

偽りの中で永遠に生き続け、偽りの中で永遠に幸福に包まれる。では、実際のリボルトは何処にいるのだろう。実際のリボルトは、何処で何なっているのだろう。

全てはリポスの闇の中。

「リボルト……」

ジュナイが窺ってきた。その目は躊躇いを隠せずにいる。帰りたい。

だが、帰れない。

「一つ聞いてもいいか？」

リボルトはビアレスに訊ねた。

ビアレスは前足を組み、その上に顎を乗せた。

「何なりと」

細められるその目に吸い込まれそうだった。

リボルトは勇気を振り絞り、ビアレスに問いかけた。

「貴女の言う事で、何か分からないものがある。だが、それは、とても大切な事のような気がするし、捨てて置けるようにも思えないんだ」

ビアレスはくすりと笑った。

まるで全てを見通しているかのように、その目を細める。

「それで、何かしら？」

リボルトはちらりとジュナイに目をやった。見上げてくる目線からは表情が読み取れないが、恐らくその気持ちはリボルトと同じだろう。

「野性と心のことだ」

ビアレスは予想通りという気持ちを目に宿し、リボルトを見つめた。暗闇の中で、新月の夜だと言うのに現れている不自然な光が弱まっていく。その目だけが、爛々と輝いている。

「野性と心の何が訊きたいの？」

「すべて」

空かさず答えたのは、ジュナイだった。

リボルトはやや安堵する。やはり、ジュナイもリボルトと同じ感覚の中にいるらしい。

ビアレスはくつくつと笑い、静かに言った。

「知りたければ、己の力で知る努力をすることだ。そうすればきっと、七色の光が貴方達を導くだろうね」

ピアレスの目が静かに閉じられた。

リボルトはふと身を屈めた。

来る。

あの感覚。

予想通りに包みこむ。

世界の揺らぎ。

来る。

リボルトとジュナイは身を寄せ、その揺らぎを耐えた。

そして、全てが過ぎ去ったその時。

リボルトは閉じかけていた目を開いた。

二人はやはり、隙間の外にいた。

リボルトは、はっと空を見上げた。

闇夜は次第に薄らいでいた。

三章 大山猫（三）

大山猫（三）

知りたければ、知る努力をしろ。

ピアレスに再びあったあの夜から随分と日が過ぎた。リボルトは何処か虚無の拭えない日常を過ごしていた。

シェイドに導かれ、美しいリポスの中を駆け巡る毎日。

飢えは全く来ない。ただ、たまに渴きがくるのみの毎日。そして、その渴きを癒す湖や川の水、時には雨水。どれも違う味がしたが、不味い事は決してなかった。

また、冷風、日射、雨天などの悪天候はあれども、それが不快をもたらしはすれども、決して誰か、か弱い命に関わるまでもなかった。

端麗で完璧な幸せを含む永遠の園リポス。

だが、リボルトは妙に解せなかった。

ジュナイはどうなのだろう、と度々彼女の様子を窺う。彼女の表情を読み取ることとは出来なかった。毎夜、毎夜、奥を望む禿山の狼王シェイドとその伴侶ブレイズの号令に、彼女はいつも通り、否、いつも以上に素直に従っている。

その姿が、リボルトは不思議だった。

彼女は彼女で、今の幸せを守りたいのだろうか。疑いたくはないのだろうか。

リボルトは戸惑いつつも、毎夜、毎夜、シェイド達と共に、その日の奥へと駆け廻った。確かに、幸福はある。解放感はある。だが、何かが違う。懸命に外で生きていた時とは、何かが違うような気がする。

野性と、心。

何だっただろう。

その大切さとは。

ビアレスは語ってくれないだろう。

あの後から、度々リボルトはビアレスの元へとこっそり向かっている。だが、彼女は何にも答えない。答えようもしない。余りにしつこいと、彼女は光の霧の向こうへと消えてしまふ。ビアレスからはもう何も得られないようだ。

リボルトは毎回、尾を垂らして返った。

その度に、ついて来なかったジュナイがそっと目線をやる。何か聞いたそうな、知リたそうな、目線。だが、リボルトは気付かないふりをした。ジュナイもまた、リボルトには何も問わなかった。

野性と、心。

本当に、何だっただろう。

リボルトは空を仰いだ。昨日は満月だった。リボルトがここリポスへと来てから、一か月程経ったと言う事だろうか。今宵は既望奥へと向かう夜。何時ものように、シェイドの告げる場所へと向かう。既望奥は、禿山の麓らしい。

麓……。

リボルトは妙にどきりとした。

まさか、ビアレスの潜むあの裂け目付近ではなかるうか。

そう思ったのだが、シェイドの誘った場所は、ビアレスの潜む場所とは反対側の麓だった。その為、リボルトは心から安堵した。

「なあに溜め息吐いてんの、ドールちゃん」

思わず漏れた溜め息に、空かさずダステイが突っかって来た。熟れ過ぎた果実でも食したのか、妙に上機嫌だ。取りあえず、前足を頭から退かして欲しい。そう願うリボルトを知ってか知らずか、ダステイはぽんと軽くリボルトの頭を叩き、囁くように絡む。

「最近抜け駆けが多いじゃない。何、女でも見つけたの？」

「ダステイには関係ないことさ」

「余所余所しいねえ、いいじゃない、ちょっとくらい教えてくれた

って」

やはり変な物を喰ったのだろう。それとも、猫族にとってのマトビのような物でも嗅いだのだろうか。何処となく、ダステイはリポスの享樂を知り尽くしていそうだ。リボルトは息を吐き、ダステイの前足を退けた。

「ジュナイとの付き合いは止めたの？ え？」

ダステイは相変わらずの上機嫌で、リボルトの肩を叩く。この声が少し離れた位置で寝転んでいるジュナイに聞こえていない事を祈るばかりだ。

聞こえているだろうけれども。

「そう言う事じゃないよ。放っておいてくれ」

リボルトはうんざりと言ったが、ダステイは離れなかった。ここでブレイズが一声かけてくれれば、すんなりと解放されるような気がするのだが、どうだろう。とりボルトは当てもなく問い掛けてみた。

「なにに？ ジュナイと上手くいってないんだ？ お前、女心分かってなさそうだもんなあ？」

ダステイに言われたくない……様な気がした。少なくとも、そんな事言われる筋合いはないはずだ。そうリボルトは思ったものの、妙にジュナイが気にかかった。そう言えば、如何して彼女は一緒にピアレスの所に行かないのだろう。如何して、何も聞こうとしないのだろう。彼女はいつも、リボルトを見つめつつ、直ぐに目を逸らしてしまう。まるで、関わりたくないように。

「ジュナイも男みたいだけだよ。きっちり女の心も持ってるんだぜ？ 気をつけてやらにや」

「ジュナイはジュナイだろ」

「ほうら分かってない。会ってひと月の癖に、全て分かったような顔しやがって」

ダステイは忍び笑いをしながらリボルトの背中をばしばしと叩く。とても痛い。コヨーテとは、こんなにも力の強い生き物なのだろう

か。リボルトは顔を歪めながら、ダステイを見上げた。

「おらおら、白状しろよ、誰と会ってんだ、え？」

ダステイに甘噛みされるのを払いのけ、リボルトはふと彼に訊ねてみようかと考えた。野性と心。ダステイならば何か知っているかもしれない。彼はリボルトよりも遙か前から此処にいるんだと言っていた。彼ならば、何か感じているかもしれない。このリポスについて。

「ダステイ……」

リボルトは口を開いた。

「野性と心って知ってる？」

何気なさを装って訊ねたのだが、ダステイにとっては思いもよらない言葉だったのか、急に眼付きを変えた。失笑し、出していた舌を引っ込め、軽く前足を組んでリボルトを窺う。

「知ってるの？」

リボルトの問いに、ダステイは鼻先をぴくりと動かした。

「何処で聞いた？」

そう問われ、リボルトは戸惑った。ビアレスの事を言うのが、妙に躊躇われた。ダステイに打ち明けてもいいものか。否か。

少なくとも、シェイドに知られてはいけないと思っていた。ジュナイが以前、シェイドがあの際間の話をすると言っていると聞いた所から、シェイドはビアレスを知っている可能性もあるのだ。そうなれば、彼の伴侶でもあるブレイズにも知られる訳にはいかない。彼女からシェイドに漏れる可能性は、極めて高い。キイはと言うと、この一か月で彼がどれだけ群れの規律を重んじるのかがよく分かった。相当真面目な少年だ。きっと、真面目にシェイドに報告するだろう。

では、ダステイはどのようなだろう。

ダステイはリボルトの迷いを見通しているのか、不敵に微笑んだ。「そっぴや、前にジュナイが頻りに言っていたことがある」

なかなか語りださないリボルトに、ダステイは言った。

「禿山の麓……ここの反対側に不思議な裂け目があつて、その中がすごく気になつてしょうがないから行つてもいいかつてね。そしたら、いつもは放任主義なシェイドが、目の色を変えてジュナイを叱つたんだ。まるで、軽い男と付き合う娘を叱る父親みたいだね」

お前のことか、と言いつうになつたが、リボルトは口を噤み、じつとダステイを見つめた。ダステイはにやりと笑みを浮かべ、軽く咳払いをした。

「それが不思議な事に、ジュナイの奴、全く言わなくなつたんだよね。あんなに気にしていたのに。変だよなえ」

にやりと笑むダステイを横目に、リボルトは溜め息を吐き、ちらりとダステイを睨んだ。ダステイはくすくすと笑つと、目を逸らし、咳くように言つた。

「野性と心か。前にも同じ事を聞いた奴がいたな」

「え？」

リボルトは耳を立てた。そんな者がいたのか。やはり、リボルトのようにビアレスに会つた者なのだろうか。

「それは、狼？」

「否、違うね」

ダステイは首を振り、禿山の麓に広がる森林の奥を見やつた。この間行つた湖があるのとは反対側の森林。リボルトが初めて来た時、に通り返けた其処。

「マールという獣がいてね」

ダステイが言つた。

「名前じゃねえぞ。種属名だ。名前は忘れちまつたが、足の細い小母さんだったかな。俺が暇潰しに平原を散歩していたら声をかけられて、聞かれたのさ。『野性と心の行き先はどちらですか？』つてね。正直意味が分からなかつたんだが、そう言えば、森の小鳥たちが歌っているのを思い出してね。ほら、リボルト、お前も聞き覚えがないか？『歌えぬ力ナリや春の朝 音の心は何処へやら 探しに行くぞと飛び立つた 空掛かる虹を目指して飛び立つた』なんか、

こんなの歌ってるだろう？ それを思いだして、『きっと虹が導いてくれるでしょう』って適当な事を言っただよなあ」

「酷いな」

リボルトは心底そう思った。森林の向こうの平原。限りなく広いその場所で、適当な事を言われて当てもなく彷徨わされるとは、考えただけでも疲れ切ってしまう。

「知らないって正直に言えばいいのに」

「いやいや、お前もあの小母さんに問われれば分かるさ。知らないなんて言わせねえような眼つきだったんだから」

「そんな莫迦な」

そうリボルトは言ったが、ふとプレティを思い出した。半月とちよつと前、湖で偶然出会ったプレティ。共に此処へ来た時は、彼女を食おうと追いかけていた時とは打って変わって、結局彼女の言いなりになっていた。若しもプレティに凄まれたら、リボルトもまた出任せを言うかもしれない。

「ともかく、その時の小母さんが上手く辿り着くとは思わなかったんだけど、後日旅鳥が俺のところに来てね。そりゃ驚いた。だってあの小母さん、『言われた通りに進んだら着いた。有難う』って伝言寄越したんだからね。それで物凄く気になって、旅鳥に何処から来たか訊いてみたらさ、平原の遙か先の熱帯草原から来たんだと」

「熱帯草原？」

「ああ、ここから西へずつと行ったらいつか着く場所だ。其処にはハイエナの王国があつてな女王を中心に中々面白いルールを布いて生きているらしい。そういや、獅子もいるって話だな。なかなか興味深い場所だから、いつか行ってみたいんだよな」

「へえ、そう」

リボルトが関心なく合いの手を入れると、ダステイはやや不服そうにリボルトを覗きこんで、言った。

「他人事じゃねえだろ。野性と心はその熱帯草原にあったという話なんだから」

「うん、そうなんだけど……」

マールとやらは、野性と心を其処で見つけたのだ。どういう事なのだろう。どんな場所なのだろう。そう疑問に思わない訳ではない。出来ればその熱帯草原とやらへと足を運びたいのだが、この感じ。なんだかダステイがついてくると言い出しそうで怖い。

「なあ、野性と心を知りたいんだったらさ……」

「ねえ、さっきから何の話してんの？」

ダステイが言いかけた時、キイが訊ねてきた。ダステイは慌てて口籠り、軽く舌を嚙んでしまった。キイはそんなダステイを不思議そうに見やり、リボルトをちらりと見やる。

リボルトは苦笑し、キイに答えた。

「しょうもないことさ。気にするな」

キイは納得していないようだが、リボルトはそれ以上言わなかった。

既望の輝く夜。その夜も明けようとしている。段々と消え行く月と、代わりに現れていく太陽の光とが、既望奥の麓を見下ろしていた。

野性と心の行き先。

熱帯草原。

リボルトは顎を地面につけ、静かに頭の中で繰り返した。

四章 大平原（一）

四章

大平原（一）

リボルト達の群れは、月が昇る中はずっと目を覚まし、昼頃になると眠りに就く完全な夜型生活だった。水以外の物を特に求める必要もなければ、獲物や縄張りを巡っての争いも起きないここリポスでは、幾らでも眠りに就くことが出来る。昼という時間は、完全な眠りの時間でもあった。

穏やかな風が吹き、その眠りを誘うかの様に、狼達を包み込んでいく昼のリポス。

シェイドとブレイズは、真逆の輝きを放つ体毛をそよがし、寄り添いあつて眠っている。

群れの中で父と母にも似た位置に当たる彼らは、リボルト達とは少し離れた場所で、二頭だけで眠るのだった。

リボルトは少しだけ目を開け、その様子を窺った。

彼らは禿山の岩の上にて日の光を十二分に浴びて眠っている。ちよつとやさつとじゃ目を覚まさないだろうけれども、やはり狼である彼ら。物音でも立てようものなら、すぐに目を覚まして行き先を問うだろう。

何と応えるべきか。

用足しに行くとも言えば納得するだろうか。否、それでは禿山を降りる意味もあるまい。不審がられるだけだ。ならば、水を飲みに行くではどうだろう。

リボルトは考え、やはり首を振った。

水は禿山にもある。それも、リボルト達が眠るすぐ近くにあるの

だ。シェイドやブレイズの眠る場所からは、其処が良く見えるそう
だ。水を飲みに行くと言って、リボルトが山を下れば、怪しいばか
りだ。

それでは、何と云えばいいのだろう。

「大丈夫、起きないさ」

不意に囁く声がして、リボルトはびっくりとした。

すぐ傍に眠るジュナイが起きていたのだ。彼女は小さく目を開き、
リボルトを覗き込むように顔を近づけてきた。

「山を降りる近道を知ってるぜ？」

「何のことだ？」

そう言ったりボルトはだが、動揺を隠せていない事に気付いた。
軽く咳払いをして、ジュナイから顔を逸らす。ジュナイは意地悪く
目を細め、リボルトの背をそつと叩いた。

「行くんだろ？ ダステイの言ってた場所」

「聞いてたのか？」

「キイに聞いたんだよ。二人で何やら面白い話をしていたってね」

「あいつ。やはり聞いてたのか」

「んで？ 行くんだろ、其処へ」

ジュナイが窺う様に問うと、リボルトは「まさか」と笑った。

「そんな遠くまで行くわけないだろう？ 俺はただ、眠れなかった
だけさ」

そう言うリボルトの鼻を、ジュナイは「ほうら」と軽く舐めた。

リボルトは赤面した。ジュナイはいつもの少年の様な眼でリボルト
を見つめているのに、何故か一瞬だけ、違う匂いがした。

「キイの言う通りだ。あんた、喰えない男だねえ」

ジュナイがくすくすと笑うと、同じようにくすくすと笑う声が上
がった。ダステイ。キイ。二頭とも起きていたのだ。

キイがけらけら笑い転げながら、リボルトを見上げた。

「ばればれの嘘だね、リボルト」

押し殺しつつもキイは笑いながら言った。

「その尻尾、さっきからバタバタ五月蠅いぞ？ 一人でいくつもりだっただろ？」

キイが前足でリボルトの尾を指した。リボルトはふと、振り返った。成程、確かにばたばた五月蠅い。この馬鹿正直な尻尾、どうにかして欲しいものだ。

ダステイがリボルトの胸を軽く押して言った。

「お前が野性と心について話を聞いてきた時に、ジュナイに聞いたのを思い出してね。お前ら、あの洞穴の先で、リンクスを見たんだってな？」

ダステイの言葉にリボルトは愕然とした。

ジュナイは話していたのだ。ダステイに。この様子だと、キイにも。そうか。別にシエイドに伝わらなければ、ダステイやキイに漏れたって別に良いわけだ。リボルトの何十倍も群れを熟知しているジュナイならば、ダステイやキイがどのような者なのかを見分ける等、容易いのもかもしれない。それとも軽率に喋ってしまったのかは謎だが。

兎も角、リボルトは大きく溜め息を吐いた。

「喰えないのはお前たちじゃないか……」

「どっちもどっちってわけだ」とダステイは苦笑し、ちらりとシエイドやブレイズの眠る岩を窺った。ジュナイやキイもちらりとそちらを見やる。

「ぐっすり寝てるね」

キイが言った。

「これならあの道から抜けても気付かれないで済むかも」

「だといいけどねえ」

ダステイは大きく尾を揺らし、立ち上がった。ジュナイやキイも立ち上がる。リボルトは呆気に取られた。そんなリボルトを呆れたように見つめ、ジュナイが軽く背中を噛んだ。

「ほら、起きろ。何、ぼさつとしてんのさ」

一瞬怯みつつリボルトは起き上がる。

どういつつもりだろう。

「まさか、一緒に行くとか言うんじゃない……」

「この状況見て、そうじゃない訳ないだろう？」

ジュナイが薄らと笑みを浮かべた。そして、軽く尾を振って歩きだした。

「一人じゃ抜けられもしないくせに」

「そうだそうだ」とキイも笑みながら、ジュナイに続いた。茫然とするリボルトの前をダステイが横切り、横目でリボルトを促した。
「置いてくぞ」

短く言われ、リボルトは慌てて立ち上がり、彼らに続いた。

そう言えばジュナイが、近道を知っていると云っていたが、どういう事だろう。リボルト達が眠るのは、シェイドやブレイズの眠る岩の真正面。若しも物音などで彼らが目を覚ましたら、真っ先に目に入るだろう。何処を如何行けばいいのだ。そう思っていると、ジュナイは真っ直ぐシェイドやブレイズ達の方へと歩きだした。

リボルトは怯んだ。

自ら真っ直ぐそちらに行くとは思わなかった。

だが、ジュナイ達は忍び足でシェイドとブレイズの元へと寄り、彼らの眠る岩の真下へと張り付いた。リボルトはうろたえつつも、取り残される前にダステイと共に、ジュナイ達の元へと歩いた。

リボルトがあまりにびくびくしていた為か、ジュナイはくすりと笑い、真上に寝ているはずのシェイドとブレイズを確認するように上を見つめ、無言のまま動きだした。岩を添う様にぐるりと回り、その裏の坂へと向かう。キイもダステイも素早くそれに続いた。リボルトは、兎に角物音を立てまいと抜き足で歩き、どうにかそれに続いた。

成程、確かに、彼らの真下だったらすぐには見つからないだろう。彼らの位置からはリボルト達の寝床の先しか見えない。いつも奥にて丸まっている彼らの姿が見えずとも、不審がりはいないだろう。寧ろ、見えない方が不審がらない程だ。

そうリボルトが思っていると、小石の転がる音がした。

心臓が飛び跳ねそうな思いで前を見つめると、ジュナイが斜面を滑っていた。続いてキイも、ダステイも。

リボルトはびくびくと上を見やったが、シェイドとブレイズが気付いているのかすらも分からない。仕方無しに彼も、ジュナイ達に続いた。

「うわ……」

リボルトは思わず小さな声を漏らした。ジュナイ達が滑った斜面は、意外と急で、滑るとスピードもあった。先の三頭が上手く着地したのが信じられない程、リボルトはやや不格好に着地してしまい、キイに忍び笑いをされた。

様にならないな……。

そう思っていると、ダステイが顎で示した。

リボルトは前を見やった。

その先には、平原へと続く木々に囲まれた一本道が広がっていた。

緑の木々の間に見える、大小四頭の狼の影。勢いよく駆けて行く彼らは、真っ直ぐ大平原へと駆けて行く。

ブレイズは薄らと目を開け、その影を見つめていた。

ゆっくりと起き上がり、伸びをする。ふさふさとした白い尾を軽く巻き、隣にて薄目を開ける伴侶を見やった。

くすりと笑いながらブレイズは言った。

「四人とも行っちゃうなんてね、シェイド」

シェイドは暫し、小さくなっていく四頭の影をやや微笑ましく、やや切なげに、見つめている。黒い尾を伸ばし、黒い耳を倒し、彼は小さく溜め息を吐いた。

ブレイズは彼の耳を軽く噛み、囁いた。

「どうするの？」

「どうするもないだろ」

シェイドはぼそりと言った。

そして、立ち上がり、森林の向こうに広がる大平原を見やった。

白と黒の狼を包み込むような青い空。その青い空と同じくらい広く見える大平原。

ブレイズとシェイドはそれを見つめた。

「寂しくなるわね」

ブレイズが零すように言い、再び寝そべった。

シェイドは大平原を見つめたまま、ふっと笑んだ。

「全くだ」

木々の間に見えていた狼の影は、もう見えなくなっていた。

四章 大平原（二）

大平原（二）

初めて此処を訪れたその日より、平原を照らす太陽は眩しかった。少しだけ暑いその緑の中を、ただひたすらに西へと駆けていくダステイ達を追って、リボルトは走り続けた。風の様に走る狼達を乗せて、緑の大地は仄かに揺れている。リボルトは走りながら、空を見上げた。

きつと虹が導いてくれる。

そのダステイの言葉を信じて進んだ雌のマーラ。彼女は何処をどうやって進んで西の熱帯草原に辿り着いたのだろうか。

虹なんて出ていないしな。

「おおい、リボルト！ 遅れんなよ！」

ジュナイの声が上がった。

リボルトは慌てて前へと向き直った。ダステイ達との間に少し距離が出来ている。リボルトは走る方に集中する事にした。

「なあに、ばやっとしてんのさ！ 早く来いよ！」

ジュナイに急かされて、リボルトは走った。見れば、待っているのはジュナイだけで、ダステイとキイは、振り返りつつも更に先へと進んでいる。

「酷いな。ちよつとぐらい待ってくれたっていいじゃないか」

ジュナイの追い付いたリボルトが溜め息混じりに言うと、ジュナイは呆れたように一瞥をくれた。

「あんなに遅れといて厚かましい事言っんじゃないよ」

さらりとそう告げて、ジュナイは走りだしてしまった。

リボルトは大きく息を吐き、ジュナイを追った。

緑の大地は広く、広く、広すぎて、幾ら進んだのかリボルトには

さっぱりだった。しかも、此処へ来てすぐに禿山に定住していたリボルトにとって、この大平原は未知の中の未知なのだ。正直、ここまで迷わずに進めるダステイが怪しくて仕方がない。

きつと抜けがけしてきたんだろうな。

リボルトは苦笑いをしつつ、また空を見上げた。

何かが飛んで行った気がする。

「おい！　ぼやっとすんなって言ったろ！」

ジュナイの声が響き、リボルトは慌てて空から目を逸らし、前を見つめた。灰色と黄色の狼が、立ち止まって振り返っている。やっと待つてくれる気になったらしい。

リボルトはやっと追いついた。

「ここらで休憩するか？」

ダステイの問いにリボルトは首を振ったが、空かさずキイが声を上げた。

「しよう！　俺、喉渴いてさ」

「この辺りに水飲み場なんてあるの？」

ジュナイが首を傾げると、ダステイは得意げに笑み、森林の方角へと目を向けた。リボルト達も目を向けたが、此処からは深い色の木々以外は何も見えない。だが、ダステイは囁くように言った。

「ここいらは山猿と猪達の住処だね。丁度彼らの縄張りがぶつかり合う辺りに、綺麗な小川が流れているんだ」

森林の小川。

若しかしたら、リボルト達が住んでいる場所の水とその付近の湖の水の味が違う様に、其処の水も違う味がするのだろうか。

リボルトは考えながら、ダステイの話をぼんやりと聞いていた。

「其処だったら美味しい水が飲めるぜ？」

ダステイが軽く笑むのを、ジュナイとキイは不安げに見つめていた。リボルトは二人が何でそんな顔をするのか暫し考え、やっと思いついた。

何時だったか、山猿と猪達の噂を、小鳥達がしていたのを覚えてい

る。禿山から然程離れていない森林に住む山猿と猪達が、どうもぎくしゃくしているらしい。長年同居した結果、互いに遠慮が欠けていったのが原因らしく、ちょっとした事で小競り合いを起こしては、和解を結び直しているという。それが、猿と猪間だけならばいいのだが、関係ない他の獣たちまでも巻き込まれる事がしばしばあるというので、暫くはその森に行かない方がいい、というのが、小鳥達の話だった。

巻き込まれては堪らない。

だが、キイの言うとおり、リボルトもまた、喉が渴いていた。

食欲の起こらないこりポスでの唯一とも言える辛さは、渴きだ。喉の渴きだけは外界と同じように襲ってくる。

水は欲しい。

「猿や猪に怒られたりしないかな？」

キイが不安げに言うのと、ダステイはくつくつと笑い、強く尾を振り払った。このように激しく尾を動かす事が出来るのも、群れのリーダー格のシェイドが傍にいないからだろう。いくらダステイが結束力にけるコヨーテ一族だと言っても、勝手に尾を振り上げることは、激怒されかねない程の無礼にあたる事は同じ筈だろう。

リボルトがそう思っていると、ダステイは笑いを殺すように、キイに言った。

「猿や猪が怖いのか？ 大丈夫、奴等にやばねえよ」

あつさりと森林へ向かつて歩き出すダステイに、リボルト達はぎよつとした。まだ心の準備が出来ていない。出来ていないけれども、ダステイは待つてくれない。三頭が困っていると、ジュナイが大きく溜め息を吐いた。

「行こう。ダステイ一人で行かせるわけにもいかないだろ」

そう言つてジュナイも歩きだした為、リボルトとキイはぎこちなく頷いてダステイを追いはじめた。

森林の入口はリボルト達のすぐ傍で開いている。

リボルト達が森林に沿つて平原を進んでいたので当たり前なのだ

が、此処まで近いと、まるで森林がリボルト達を飲み込もうとしているようにも見えてしまう。更に、件の山猿や猪達の匂いが風に乘ってくるので、雰囲気は最悪だった。

早いところ、水を飲んでおさらばしないとね。

リボルトは舌を引つ込めて、森林へと入り込むダステイに続いた。途端に、揺らぐ感覚がしたが、あのビアレスと共に居るときの感覚よりはささやかなもので、然程気にならなかった。ダステイやキイ、ジュナイが全く気にしている様子を見せない所からすると、此処に居る内に何ともないように思っているのだろう。

「小川は何処にあるんだい？」

ジュナイがダステイに訊ねた。

「もう見えてくるはずだ。ほら」

ダステイが言った時、リボルトの目に光が映り込んだ。小川の反射する太陽の光だ。平原からそう離れていない位置にあつたらしいリボルトは少し安堵した。

「見つかりたくなければ、あまり騒がずにさつさと飲む事だぜ？」

ダステイは小さく笑んで、小川へと歩いて行つた。キイはだが、喉の渴きを我慢できなかったのか、走つてダステイを追い越した。ジュナイは呆れ気味にそれを見つめながらも、静かに進んでいく。

リボルトも彼らに続いて水を飲もうとしたのだが、ふと、太陽の光が微妙な変化を遂げたのに気付き、空を見上げた。

「何だ？」

光の色が増えた気がする。

リボルトは空を見渡した。

あれは？

そう言えばさつき平原に居た時も、このような気配を感じた。何かが飛んで行くような、鳥の影の様な気配。鳥であれば、こうもリボルトが気にする事もないのだが、鳥ではないらしい。もっと現実味のない、何か……。

リボルトは息を飲んだ。

残光が微かに見えた。七色のそれ。何時だっただろう。見た事がある様な気がする。確か、あれは、禿山でのこと。

「リボルト？」

ジュナイの声に、リボルトは我に返った。残光は消えた。空は変わりなく広がっている。

何なんだろう、あれは。

「リボルト」

ジュナイが再度声をかけてきた。彼女は立ち止まり、リボルトの様子を不思議そうに窺っていた。

「如何したんだい？ 疲れたの？」

「いや……違う」

もう一度見上げる先。光等、影も形もない。

「何でもないんだ」

リボルトは呟くように言い、前へと向き直る。ジュナイは暫しボルトの様子を訝しんでいたが、気を取り直し、小川へと歩いて行った。リボルトもそれを追った。

小川では、既にダステイとキイが水を飲み始めていた。さらさらと光を放ちながら流れる小川からは、涼しげな空気が漂ってくる。湖とはまた違う、爽やかな美しさが其処にはある。リボルトはさっそく水を飲んでみた。

やっぱり。

味が違う。禿山ともその麓の湖とも。予想した通りだったが、味が違った。湖の水よりも少ししょっぱい味がし、禿山の水に比べれば少し渋い味がする。だが、決して不味くなく、渴いた喉には驚くほど沁み渡っていった。

「美味しい」

思わず言葉を漏らすと、ダステイがくすりと笑んだ。

「だろう？ 山猿も猪も自慢するという小川らしいしね」

「その通り」

全く違う声が聞こえ、リボルト達は怯んだ。慌てて声のした方向

を見やると、小川の傍の茂みの向こうに、雄猿が一匹佇んでいた。余り思わしくない顔をしている。猿は一步小川へと近づき、リボルト達を見据えた。

「禿山の狼だな？ 家出したという」

リボルト達が戸惑っている中、猿はにこりともせず小川の水を口に含み、目線だけをリボルト達にやった。

「誰の許可も無しに此処の水を飲むとは無礼極まりない奴らだ」

水を呑みこんだ猿が無粋に言った為、リボルト達は皆、不服に眉を顰めた。ジュナイが軽く鼻で息を吐き、猿をざろりと見やった。

「へえ。許可制かい？ それはそれは悪かったねえ。で、どの猿に聞けばよかったんだい、え？ 聞いたところで、あたしらに猿の区別なんてつきやしないけど」

嫌味たつぷりに言うジュナイを見つめ、猿もまた眉を顰めた。

「雌狼め。偉そうに。勝手に入って来ただけでも罪作りだと言うのに、我々山猿を愚弄する気か？ 禿山を放浪するだけしか能のない狼共め」

この言葉にキイが唸り声を上げた。

「何だと、老いばれ猿め！ 猪とつまらない事で喧嘩し合うしか能がない奴に言われたくないわっ」

「え、何だって？ 声が小さくて聞こえないよ」

猿がけらけらと嗤いながら、キイを見やった。

「にしても、小さい狼だな。そんなに小さいと、狐にでも間違われて狼に喰われちゃうんじゃないか？ おっと此処はリポスだった。所詮、狼共の使いツパシリって所だろう？」

キイが更に唸った。

リボルトは暴言を吐き続ける猿と、それに対して怒りを顕わにするジュナイとキイとを見比べ、そつとダステイに囁いた。

「おい、放っておいて帰った方がいいんじゃないか？」

「ああ、その通りだね」

ダステイはだが、面白そうにそれを見つめていた。止める気が無

いらしい。リボルトは仕方なく、猿に声をかけた。

「悪かった」

キイとジュナイがリボルトを振り返った。リボルトは構わずに、猿へと声を掛け続ける。

「勝手に入って済まない。直ぐに立ち去るから、勘弁してくれ」

「ちよつと!」「おい、リボルト!」

キイとジュナイが同時に批難の声を上げたが、リボルトは首を振って彼らの言葉を跳ね退け、ダステイへと目をやった。ダステイは暫し傍観を装ったが、やがて観念し、猿へと声をかけた。

「まあ、そう言う事だ。仲間の暴言は忘れてくれ。それじゃ、俺達はこれで」

怒りの治まらないジュナイとキイを宥めながら、ダステイとリボルトはそそくさと元来た道を戻りはじめた。だがしかし、後ろから猿の咆哮が響き渡り、直後に怒声が浴びせられた。

「待て。そんな都合のいい事が罷り通ると思っっているのか?」

「やばい。逃げる」

ダステイがさらりと言った。

あれだけ猿へと威嚇していたジュナイもキイも、猿の咆哮にたじろぎ、慌ててダステイの言葉に従った。リボルトも勿論、ダステイの言葉通り、平原へと走り出した。

あの猿の咆哮はきつと、仲間を呼ぶ声だ。彼の声を聞きつけて、一体どの位で猿たちは駆けつけるのだらう。此処から平原までは其処まで離れていないが、何処に猿が潜んでいるかが分からない。

今もなお、猿の怒声が耳に入る。

「ほつら、お前らが刺激するから」

ダステイは飽く迄も暢気にジュナイやキイをからかった。ジュナイとキイはそれどころではないといった感じに、ダステイのからかいを無視して走り続けている。リボルトはそのやり取りを見つめながらも、頻りに後ろを確認した。

猿の声はするが、姿は見えない。

だが、安心は出来ない。相手は猿なのだ。木に登っているかもしれないし、いきなり進行方向に飛びおりてくるかもしれない。

「お前らビビり過ぎ。相手は猿だぜ？」

ダステイは呆れたように言ったが、リボルトも出来れば乱闘を避けたかった。無駄に争って傷を作るのも馬鹿げている。そのような不合理な事は、野性では在り得ない事なのだ。直接生きる事に関わらないのに戦うなど、如何して出来ようか。狼だって、無敵ではない。虎でさえも、獲物一匹取るのに細心の注意を払うと言うのに、リボルト達のような少数の狼が、選りに選って何かと厄介な猿と、如何して好んで戦えようか。

「俺なら喧嘩上等つてもんだ」

ダステイは笑いながら、大きく吠えた。

「へへっ、追いついて見やがれ猿ども」

「止めてよ、ダステイ！」

キイが本気で起こったため、ダステイは「へいへい」と言いながら吠えるのを止めた。だが、声は確実に聞こえた筈だ。

これは捕まったらただじゃおかれないぞ……。

リボルトが溜め息を吐いた時、救いの光が差し込んできた。

平原が見える。

ジュナイが歓喜の声を上げた。

「よしっ。あと少しだっ！ まさか平原まで奴等は来ねえだろ」

飛び込むように、リボルト達は平原へと抜けだし、ある程度森林と距離を置いた。息を切らしながら森林の様子を振り返ると、ジュナイの読み通り、集まった猿達は森林と平原の狭間に顔を見せつつも、それ以上リボルト達を追う兆しを見せなかった。皆白い歯を剥きだし、その場に留まって威嚇していた。

「二度と来んなよ、糞猿共っ！」

ジュナイやキイと言い争っていた雄猿の声が響いた。

リボルト達が茫然と見つめる中で、猿達は背を見せ始める。その背を静かに見つめ、リボルトはどっと疲れを感じた。

同じように我に返ったのか、ジュナイが一步踏み出し、去っていく猿達の背に吠えた。

「五月蠅えええ！ こんな不味い小川、こっちから願い下げだああッ！」

猿達が完全に森林の向こうへと消えても、ジュナイの吠え声は平原中に木霊していった。

四章 大平原（三）

大平原（三）

ジュナイは不味いと言ったけれども、実際の小川の水は最高だった。

勿論、ジュナイ自身もそう本心ではそう思っているはずだ。ただ、あの猿に対しての負け惜しみからついそんな事を言ってしまったという所だろう。キイとジュナイがくどくど文句を言う気持ちも分からないでもない。偉そうに追い払ったあの猿にムツときたのはリボルトも同じだった。

しかし、それも一日、二日と続けば、「いい加減に忘れろ」と言いたくもなる。

「だって、あいつらこのリポスで縄張りを独占しているんだぜ？ あたしら他の獣はどんな好い所もちゃんと共有するのにさ」

「もうずつつつと遠くの話なんだからさ、そろそろ機嫌直せよ」

リボルトが呆れ気味に言くと、キイは顔を顰めた。

「だって、苛々するんだもん。仕方無いじゃない」

「そうさ。こんな苛々したのは久々だよ」

ジュナイは気持ちを落ち着かせるように溜め息を吐いた。

「まあ、落ち着け。折角潤った喉がまた渴いちまう」

ダステイが苦笑交じりにジュナイとキイに言い聞かせると、ジュナイもキイも口籠った。尤もな事だった。この広大な平原。いつまた水が飲めるかは分からない。妙に熱くなって、後で喉が渴いてはどうしようもない。

「忘れるこつたね。時間の無駄さ」

ダステイはそう言い、歩きながら軽く伸びをした。

「それよりも、空を見ろよ。同じリポスでも、あの禿山とは一味違

うんだなあ」

ダステイに言われるままに、リボルトは空を見上げ、そして、瞬いた。

あれだ。

今度は、リボルト以外の者にも確実に見えている。

七色の鳥の影。舞うように空を流れ、一方向へと次々に消えていく光の群れ。ダステイに言われるまで気付かなかったその光景に、リボルトは啞然とした。

「玉虫流れじゃないか。へえ、ここって通り道なんだねえ」

ついさっきまであんなに怒っていたジュナイが、穏やかな口調で言った。その口調表情に驚きの色は一切含まれていない。余裕たっぷりの感想だった。

「玉虫流れ？」

リボルトが訊ねると、ダステイがふと空から目線を下ろした。そして、「ああ」と何かを納得すると、座り込んで尾を軽く揺らした。「そうか、禿山では滅多に通らないからねえ。もしかして、見るのも初めて？」

「あれかどうかは分からないけど、あれに似たのは見かけた事があるよ」

リボルトがそう答えると、ジュナイが目を丸くした。

「へえ。あんた、かなり運のいい奴じゃないか！」

「そうなのか？」

リボルトが首を傾げると、ダステイは頷いた。

「まず、玉虫流れと似た奴なんてない。見たって言うそれは、玉虫流れその物だろうね。あんな七色の光が流れ星のように消えていったんだらう？」

「いや」とリボルトは訂正した。「鳥のように見えた」

「見え方は人それぞれさ」

ダステイは頭を掻くと、再び立ち上がった。

「ともかく、ああやって七色の光が空を滑る事がリポスではたまに

あつてね。それを玉虫流れというんだ。群れて飛んでいたたり、たった独りで飛んでいたり様々だが、ああやって群れて飛ぶ空を、通り道と言うんだ」

「禿山には通り道はないのかい？」

リボルトが訊くと、ダステイは首肯し、再び歩き始めた。

「それにしてもまあ、俺の適当に言った事がどうやら本当だったらしいな。あの流れの先に、熱帯草原があるんだ」

静かな驚きを感じながら、リボルトは光を見上げた。空を滑りながら、遙か先に広がる世界へと光は消えていく。ただ真つ直ぐ、広がっているだけの大地。なのに、その先は特に何も見えない。ただ、時折木々が寂しく立っているだけ。

「ずっと進むとな」

ダステイが言った。

「巨大な岩柱が見えてくる。まるで、外界の人間が作るへんてこなオブジェみたいなのやつらしい。聞いた話なんだけどね。其処には雄チーターの三兄弟が住んでいるとかで、そいつらが見えたら熱帯平原に入ったと思っていーらしい」

「聞いた話だろ？ いまいち不安だな」

キイが率直に言ったが、ジュナイが肩を竦めた。

「まあ、進む以外選択肢はないしね。文句言ったら喉が渇くよ」

さっきまで一緒になって不満を言っていたジュナイが、急に大人びた事を言い出したのが不安だったのか、キイは渋々頷いた。

リボルトはダステイに訊ねた。

「その岩柱はどの位で着くと思う？」

だが、ダステイは首を振り、「ここからざっと見て」と前方を背伸びして覗く。果てしない平原に、辟易してしまいそうだった。

「全く岩柱が見えないってことは、まだかなり時間がかかるだろうな」

「そんなこたねえよ」

空かさずの否定に、ダステイは荒々しく振り返った。リボルトは

キイを見た。キイの声に似ていたからだ。だが、キイは激しく首を振った。リボルトも考え直した。そう言えば、キイの声よりも若干低かったかもしれない。

「幾ら地を這うお前さんたちでもね」

声は空から聞こえる。

空？

リボルトは傍に立つ枯れ木を目に止めた。上へと目を逸らし、そして、納得する。其処には、一羽の禿鷹がいた。少し荒れ気味の羽根を揃えながら、禿鷹はリボルト達を見下ろしている。

「遠くに見えるが意外と近いもんだ。走れば分かる」

禿鷹は普通に言葉を続けた。

ジユナイが首を傾げた。

「そんな事言つてもさ、見えないじゃないか。本当に近いの？」

「見えないのは目の所為さ。本当はすぐ近くにあるのに、お前さん達の目が誤解しているだけだ。現に、もうここ等は熱帯草原の入口にあたる。さっきお前さん達が言つたチーター兄弟の住処が門なら、此処は門に続く階段つてとこかな？」

「そうなの？」

キイが安心したように禿鷹に言うと、禿鷹は軽く笑んで羽根を広げた。

「まあ、ともかく進んでみるこつた。ようこそ、熱帯草原へ」

禿鷹は一声鳴くと、そのまま飛び去っていった。

ダステイの言つた、石柱の方向へと。

リボルトはその姿を、じっと目に焼き付けた。

次第に揺らいでいくその背を、じっと目に焼き付けた。

玉虫色の光とともに流されていくその鳥を。

五章 鬣犬の王国（一）

五章

鬣犬の王国（一）

禿鷹の言ったことはいまいち信じられなかったが、本当らしかった。

走って三十分もしないうちに、岩柱を目にしたからだ。リボルト達が驚きつつも、その岩柱へと進んでいくと、同じように付いてくる影が三つ、見え隠れし始めた。

「ほつら、早速のお出ましだ」

ダステイの言葉に周囲をよく見てみると、三つの影が次第にはつきりしていった。リボルトは納得した。そうか。この影は彼らか。影はリボルト達と同じような速さで付いて来て、ぐるりとリボルト達を囲んだ。ほっそりとした猫の様な姿。

「チーター兄弟つてのは、あんた達かい？」

ジュナイが訊ねると、猫の様な彼らは互いに見合わせて、立ち止まった。リボルト達も慌てて立ち止まる。猫の様な彼らは、四頭の狼をまじまじと見据え、口を開いた。

「ああ、そうだ。こちら辺にチーターは俺たちぐらいしかいないから、そう呼ばれている」

リボルトはチーターと言う種族の者を初めて目にした。足が妙に長く、体はほっそりとしていて、顔が妙に小さい。猫の様なのだが、爪は出しっぱなし。尾は太くて長かった。多くの山猫に見られるように、黄色い毛皮に黒い斑点がある。

兄弟はとても似ていて、リボルトにはとても見分けがつかなかった。

「此処から先に」と、ダステイがチーター兄弟に訊ねた。「ハイエナ族の王国があるって聞いたんだが、間違いないかい？」

すると、チーター兄弟は互いに顔を見合わせ、リボルト達四頭の狼をじつと見据えた。

「君達、ヒエナ女王にお会いするのかい？」

その言葉にダステイがほっと胸をなでおろした。此処で間違いない。間違いなく、熱帯草原に入っている。

「いや、そういうわけじゃない。ただ、少しこの辺りを見せてもらおうと思つて」

ダステイが言つと、チーター兄弟はまた顔を見合わせた。

「見せてもらつて言つと？」

「此処には見せてやれるような場所なんて、そうないけれど」

不思議そうなチーター兄弟に、リボルトが訊ねた。

「此処には、野性と心があるって聞いたんだが……」

すると、チーター兄弟は目を丸くした。

「なんだい、君達、狼の癖にはるばる野性と心を求めて来たつて言うのかい？」

「狼の癖につて？」

ジュナイが眉を顰めて訊き返すと、チーターの一頭があつさりと言った。

「そうだよ。わざわざヒエナ女王に謁見するまでもなく、狼ならすでに知っているつて思つてただけだなあ」

「ヒエナ女王に謁見しないと、野性と心は見つからないのかい？」

ジュナイが訊ねると、チーターは即答した。

「その方が早いだろうね。何人かいる偉大な方の中でも、ヒエナ女王はよく心得ていらつしやるだろうよ」

そのチーターは如何にも残念そうに首を振ると、他の二頭もちらりと目配せしてからリボルト達に続けて言つた。

「とにかく行きたい場所は分かつた。確かに此処から先、真っ直ぐ行けばハイエナの国がある。だがねえ、まさか君達全員で行くつて

のかい？」

「そのつもりだが……何か問題でも？」

ダステイが訊ねると、チーター達三頭は困惑したように互いに見合わせた。

「うーん、そっちのお嬢さんはいいんだがねえ……」

「あたしが？」

チーター達は頷きかけてそのまま考え込んでしまった。その意味有り気な目線に、ダステイがやや苛立った様子で再度訊ねた。

「だから、何か問題でも？」

「ああ、行ってみると良く分かると思っけね、何にも知らないのかい？」

「知ってたら訊いてないだろう？」

ダステイが面倒臭そうに相槌を打ったが、チーターは普通に「そうか」と呟き、姿勢を正して、言った。

「所詮他人の話だ。此処より先は、今までとは違う意識で臨むと良い。此処はリポス。だが、リポスでないリポスだ。進めば進むほどその事が痛いほど分かるだろう。食べ合いはないが、他のリポスとは明らかに違う事がある。それを踏まえたとっで訊くと良さ」

チーターの一頭はもったいぶった様子でそう言つと、ひと息を吐いてリボルト達を見据えた。そして、口を開いた。

「そちらのお嬢さん以外、ハイエナの国にはいけない方がいい。お嬢さんもお嬢さんだ。今の群れに愛着が少しでもあるならば、ハイエナの国には近づかない事だ」

「でも」と、キイが言いかけたのを、ダステイが制し、チーター達に質問をした。

「参考にしよう。でも、何故だ？ 理由は？ まさか、ハーレムなのかい？」

ダステイが半分不真面目に質問したが、飽く迄もチーター達はそれぞれ冷静に答えた。

「男が入れない訳じゃない。ただ、お勧めしないだけだ」

「まあ、どうしても行くんなら行ってみると良いけれどね」

「見ればすぐにわかるさ」

チーター達は言い終えると、走り去っていった。

リボルト達は、暫し、気不味い沈黙の中で静止していた。今、チーター達が言ったことを反芻しながら、先の事を考える。リボルトも考えた。男が行くのがお勧めできない？ ならば、どうすべきだろう。まさか、ジュナイー人で行かせるのだろうか？

リボルトは首を振った。

それは、自分が此処に來た意味がないように思えた。だいたい、ヒエナ女王ならば、野性と心を心得ていると言っていた。会わないでどうするのだ。

「ねえ、ダステイ」

キイが堪らずに口を開いた所で、皆に掛かっていた氷の呪縛が解かれた。

「行ってみるか」

溜め息混じりにダステイが言った。

「行ける所まで近づいてみようぜ」

四頭の中に、反論を唱える者はなかった。

五章 鬣犬の王国（二）

鬣犬の王国（二）

ハイエナの国。それが何処から何処までの範囲なのか、リボルト達には分からなかった。ただ、時折出会う者達により、それがこの近くで間違いない事は分かった。だが、肝心のハイエナらしき者には会えず、その事が、本当にこの辺りに国があるのかを疑わせるのだ。

ダステイは、辺りをじっと見渡し、大きく息を吐いた。

「こんな事なら、さっきの子猫ちゃん達にもついて来てもらえばよかったかな？」

「別の子猫ちゃんならいるみたいだけど？」

ジュナイが指し示しながら言った。そちらには、確かに猫族の生き物がいた。茂みに身を顰め、こちらをじっと見ている。さっきのチーターよりもやや小柄で、耳が異様に大きかった。

「あれはライオン？」

キイの質問に、ダステイは軽く笑いながら首を振った。

「いいや、ライオンはもっともっと大きい奴さ。あれは、うーん、なんだろうなあ」

ダステイが濁した時、ジュナイがその猫の様な生き物に訊ねた。

「おおい、其処に居るのは分かってんだ。出て来てくれないかい？」

「ジュナイ」

リボルトは嗜めるように言ったが、ジュナイは無視してじっと猫の様な生き物の反応を待った。リボルトはその猫が逃げ出してしまふのではないかと心配したのだが、思ったよりもすなりとその生き物は茂みから這い出し、リボルト達を改めてまじまじと見つめた。

「この辺りに住んでんのかい？」

ジュナイが訊ねると、猫の目がつと細められた。少し太めの尾

がゆらりと揺れ、異常に長い耳の先が、ぴくりと動いた。

「そうだよ」

涼しげな少女の声だった。

リボルトは一瞬、ビアレスを思い出した。同じ種族ではないようだが、この少女はビアレスに少し似ている気がした。

「あんた達、旅人でしょう？」

少女の方が訊ねてきた。

「ヒエナ陛下に会いにきた」

「そうなんだけど」と、ジュナイは少女から目を逸らしつつ肯定した。リボルトには、些か、ジュナイがこの少女の事が好きになれなさそうに見えたのだが、ジュナイはそれを悟られないようにしているらしかった。

「肝心のハイエナの国が分からないのよ」

「そうだろうと思った」

くすくすと笑いながら言う少女に、今度はあからさまに顔を顰めて見せたジュナイが、質問した。

「どうして？」

「どうしてって、だって、あんた達、あたしに話しかけてきたから」
リボルト達の怪訝そうな顔を見て、少女は猫のひげをぴんと伸ばし、尾を軽く振った。

「もうここ、ハイエナの国なの。ハイエナだけじゃなくて、ライオンの国でもあるし、シマウマやガゼルやヌーなんかの共同食堂でもあるし、チーターの庭でもあるわね。あと、鳥たちの休息所でもあるし、鼠達の外出場所でもある。そして、あたし達の住処でもあるわ」

「君はなんていう生き物なの？」

キイが不思議そうに訊ねると、少女は嬉しそうに笑んだ。

「あたし、フェリ。他の人はあたしのこと、カラカルの若娘っていわわ」

「カラカル？」

「聞いた事もない」

ジュナイとキイが互いに見つめ合って言った。

「この辺りのカラカルって、あたしとあたしの友達しかないの。あんた達の来た所にカラカルっていないの？」

フェリがやや期待を込めた目で見つめてきたため、リボルトは少し気まずく思いながら首を振った。しかしフェリは、「あらそう」と思ったほど残念がらずに返事をし、もう一度狼達を見渡した。

「で？ あたしに訊きたいのはそれだけ？ ヒエナ陛下に会えなくて困ってるの？」

「困ってるけど……あなたはヒエナ女王を知っているの？」

ジュナイが疑わしい目で訊ねると、フェリは平然と頷いた。

「勿論、だってあたし、ヒエナ陛下のお友達だもの」

これにはキイもジュナイと同じような目でフェリを見つめた。しかし、フェリは全く気にしないといった様子で、リボルト達を見た。「ヒエナ陛下は滅多に姿を見せないといった様子で、リボルト達を見ているのよ。会えるとしたら夕方から夜にかけてかしら。太陽がお嫌いな」

リボルトは空を見上げた。

太陽がじりじりと照りつけている。まだやつと昼を過ぎた頃だろうか。

「夕方になれば、女王にあるんだね？」

ジュナイが確認すると、フェリはうんと頷いた。

「そうだよ。でも、会うのはあんただけの方がいいよ」

フェリがジュナイを指した。リボルトは訊ねた。

「さつき、チーター兄弟にも言われた。だが、何故だ？ 何故、ジュナイだけはよくて、俺達は駄目なんだ？」

「あんた達、男だもん」

「男は会えないのかい？」

ダステイの問いに、フェリは首を振った。

「違うよ。でも、会わない方がいいよ」

「だが、野性と心を知りたいんだ」

リボルトが言うと、フェリは急に口を閉じた。尾を軽く振り、首を傾げ、リボルトをじっと見据えた。

「野性と心？ あんた達、本当に知りたいの？」

「ああ」

「どうして？ どうして知りたいの？」

ジュナイがちらりとリボルトを見つめた。リボルトはピアレスの事を想った。彼女に会ってから、胸に残るこの気持ち。野性と心。強く何かを語りかけてくるその事柄。その気持ちを、上手く言葉に表すことなど出来ない。

「どうしても」

リボルトは溜め息混じりに言った。

フェリは不思議そうにリボルトと、他の狼達を見つめ、長い耳をぴくりと動かした。

「狼って変わってんだ」

何か納得するように言い、フェリは座り込んだ。

「そうだね。ヒエナ陛下なら野性も心も知ってるよ。知ってる上で、大人しくされてるの。あたしも知ってるよ。熱帯平原に住む人なら、大抵が知ってる。……知つてると言うより、覚えているの。あんた達だって、知ってたはず。でも、忘れたの。忘れた方がいいから」

「どういう意味だ？」

「分からない。でも、本当なの」

フェリは一息吐くと、立ち上がり、リボルト達に背を向けた。

「あたし行かなきゃ。ヒエナ陛下に会うなら、また会えると思うよ。またね」

そう言つて、フェリは走り去っていった。

五章 鬣犬の王国（三）

鬣犬の国（三）

一時間後、リボルト達は今までの一連の動物たちの言葉が、信じられないほど正しかった事を知ることとなった。それは、数十分前、草原を駆けていたリボルト達が、一匹のハイエナの女の出くわしたのが切っ掛けだった。ここぞとばかりにヒエナ女王陛下への謁見を求めたリボルト達を、始終不審そうな目で見ていたそのハイエナは、すぐに仲間達を連れて来てくれた。だが、そこから予想外の出来事だった。否、今考えると、今までずつとリボルト達に忠告をくれていた者達の言葉を深く理解すれば、こんな事にはならなかったのだとリボルトは後悔した。

リボルト達は、今、ハイエナの国の獄中に居た。

如何頑張っても抜けられない落とし穴。それが、ハイエナの国の牢獄だ。落とし穴の中は真っ暗で、垂直に長く落ちており、登ることはほぼ不可能と見える。もし登れたとしても、上から被せられた倒木により、出る事も困難となっている。

その中に、リボルト、ダステイ、キイは落とされてしまった。

だが、ジュナイは落とされなかった。当初、ジュナイだけ別の穴に落とされるのだと思っていたリボルト達だが、そう言う訳でもないらしい。

「ジュナイだけ何処かに連れていかれたみたい」

キイが言った。

リボルト達は途方に暮れた。何をされるか分からない中で、ジュナイだけが何処かに連れて行かれた。とても不安な事だった。ジュナイは何処に連れて行かれたのだろうか。何も見えないため、これ以上は何も分からない。

ただ、時間を浪費するだけの時を、リボルト達は過ごした。

「いや、やっぱりジユナイも女だったねえ」

藪から棒にダスティが一人言ちた。

「こんな狭い部屋に、こう男ばつかじゃむさ苦しくて仕方ねえな」

「何を言い出すかと思えば」

キイが呆れたように言い、欠伸を一つした。

「それよか、これからどうなっちゃうんだろうね。ジユナイもどっかに連れてかれちゃったし。このまま出られないのかな？ ノド渴いたよ」

「それを言っなよ」

ダスティがうんざりしたように言い、溜め息を一つ吐いた。

思えば、熱帯草原に辿り着いてから、水を飲んでいない。この牢獄に居る以上、水なんて手に入るとは思えない。生き地獄だ。リポスでは飢餓は起こらない。だが、必ず渴きは来るのだ。渴きが満たされない場合の行く末は何なのか、リボルトは知らない。

脱水による死だろうか。

それとも、それさえも乗り越えてしまう生だろうか。

リボルトには分からなかった。

そんな時だった。大きな音がして、リボルト達の頭に木の屑が降ってきた。その不快感と驚きに仰いでみると、牢獄の穴を塞ぐ倒木が、ごろりと動いたのだ。啞然としているリボルト達を、見降ろしてくる者がいる。

「ジユナイ？」

キイが訊ねた。だが、ジユナイではなかった。それは、ハイエナの女の一人だった。否、一人ではなく、数人いる。皆、眼をぎらぎらと輝かせてリボルト達を見下ろしていた。

「お前達、上げれるか？」

ハイエナの一人が声を低めて言った。

リボルト達は顔を見合わせ、静かに頷いた。穴から這い出すのは、覚悟していたほどは難しくなく、リボルト達はあっさりとハイエナ

達の元へと戻って来られた。ハイエナ達はリボルト達を穴に落としたりとてんで変わらない目付きで、たった今穴より這い出してきたリボルト達を見つめていた。

やがて、このままどうすればいいのか内心困惑していたリボルト達の前に、一人のハイエナの女が、群れを割って現れた。この女が此処を仕切っているらしい。男っぽくも見えるが、狼のリボルト達にとって、そもそもハイエナの性差を見分けるのが難しい。

「ヒエナ陛下の命で、お前達を解放してやろう」

少年の様な声だった。

「謁見も認められたそうだ。光栄に思うがいい」

偉そうにそう言ったハイエナの男っぽい女は、軽く首を動かしてリボルト達を促した。

「ついて来い。お前達の仲間には既にヒエナ陛下のお言葉を聞いている。ここより先は、女の聖地。下手な真似は慎むように」

女は低くそう言くと、眉間にしわを寄せた。

「いいな？」

リボルトは何となく、ダステイを見やった。キイも全く同じ事をしていた。ダステイはというと、偉そうなその女から目を逸らさずに、何かを考えていた。やがて、軽く目を閉じ、濁すように笑った。「ああ、分かったよ」

ダステイの一つ返事で、女は踵を返した。ダステイの笑みに何の返答もせず、女はそのまま数歩進み、くるりとリボルト達を振り返った。

「何をしている。早くついて来い」

その言葉にリボルト達が付いて行くと、周りを囲んでいたハイエナ達も一緒に歩きだした。ハイエナに囲まれて、リボルトはやや竦んだ。だが、ハイエナ達はリボルト達にまるで無関心といった様子で進んでいた為、徐々にリボルトの不安は薄らいでいった。

やがて、リボルト達は、蟻塚がそのまま巨大化したかのような赤茶色の丘へと通された。出入り口がリボルト達から見える範囲でも

七つはある巨大な丘だった。どうやら、ここがハイエナ達の城らしい。中に入ると、それらの行先はすべて大広間とも呼べる空間へと繋がっており、其処の地面にはさらに沢山の穴が掘られていた。天井は時折開けており、光が差し込んでくる。

「あの場所だ」

見渡しているリボルト達に、女が指差した。其処は、数ある抜け穴の中でも、一番上方にある所だった。周りには足場があるのだが、其処に辿り着くのはやや難しそうで、子どもや年寄りには辛い場所だろうと思われた。

「あの先にお前達の仲間もいる。彼女に感謝する事だ。お前達の身柄を証明したのだからね」

女が目を細めた。さっきは男とも見えたというのに、その表情はやけに色っぽかった。

「さあ、行くがいい。ここより先は、お前達だけだ。道なりに真っ直ぐ進め。余計な穴には入るな。陛下は奥の奥で御待ちだ」

言い終えた女は座り込み、未だに動かずに呆然としているリボルト達を軽く睨んだ。

「行け！」

一喝が響き渡った。

リボルト達は背中を押されたかのように動き出し、そのヒエナ女王の部屋へと通ずるという抜け穴を目指して、地を蹴った。足場は思っていたよりも不安定で、リボルトはこの時だけ、ネコ科の身軽さを妬んだが、そう時間もかからずに、どうにか一番でその場所へと着地出来た。ほぼ送れずにダスティが辿り着いた。

リボルトは、下方を覗いた。

「キイ、来れるか？」

「莫迦にしないでよ」

キイはむっとした顔をして、目的の場所へと着地しようと、大きく足場を蹴った。体の小さな彼には、リボルトやダスティよりも距離が長い。大きく蹴ったとは言っても、キイの体は届かなかった。

「うわあああ」

「おっと」

ダスティのナイスキャッチに、リポルトまでもが安心した。首根っこを啜えられたキイは、むすつとした表情で引き上げられた。そして、「ありがとう」と、ぶっきら棒に言うつと、さっさと走り出してしまった。

「可愛くない奴」

ダスティが苦笑しながら言った。

第六章 銀髪の女王（一）

第六章

銀髪の女王（一）

「ジュナイ？」

抜け穴に入つてすぐ、リボルトは呟いた。行き先から微かだが、ジュナイの匂いがする。疑つたわけではないが、確かにヒエナ女王の元にいるらしい。

「行くぞ」

「待て」

走り出そうとしたリボルトを、ダステイは声を殺して咎めた。怪訝に振り返るリボルトを宥めるように、ダステイは言った。

「あまりずかすかとは行くな。此処はゆっくりと行くべきだ」

「そうだよ。リボルトのせつかち」

キイの生意気な口調に腹が立ったものの、ダステイの言う事も尤もだと感じ、リボルトは素直に従った。

余計な穴には入るなと言われただけあって、一本道の周りには沢山穴が開いており、それぞれから風が通つて来ていた。リボルトはぐつと好奇心を押さえ込み、道端で穴に囚われかけるキイを引つ張りつつ、ダステイの言いつけ通り堂々と歩んでいく。

一番前を歩くダステイは、慎重に匂いを嗅ぎながら、歩みを進めた。

「ふうん、ここより先はジュナイとハイエナの二人の匂いしかないうだ。そのハイエナがきつとヒエナ陛下だろうな」

「側近とか近くに置かないの？」

キイの質問に、ダステイは苦笑して振り返った。

「そりゃ、女王陛下に聞いてみな」

そんな会話をしている間に、いよいよ匂いが強まってきた。迸る緊張に唾を飲み込みながら、ダステイはぐつと足を踏み込む。通路がいきなり開け、かなり明るくなった。

リボルトはダステイに続いてその中に入り込むなり、思わず声を上げた。

「ジュナイ」

その声に、ジュナイは振り返った。一瞬だけ目を輝かせたジュナイは、すぐに笑みを消し、尾を垂らす。何があったのだろう。ジュナイはとても悲しそうだった。

リボルトはすぐに走り寄ろうと思ったが、ダステイの様子に気が付き、前方を見上げた。積み重なる岩の上に、誰かが身体を横たえている。ハイエナだ。その姿は、かの大山猫ビアレスの姿にそっくりだった。

「そなた達が遠路遙々旅してきた男達……か」

静かに通るその声は、耳触りのとてもいい柔らかな声だった。

「成程、そなた達のような狼を見るのは久しぶりだ」

「貴女がヒエナ陛下？」

キイが口を開いた。

リボルトの体に、奇妙な緊張が走った。頼むから、変な事言つなよ、と命の危機すら感じつつ、リボルトは黙ったまま岩の上に寝そべる一匹のハイエナを見た。そのハイエナは黒い目をふつと細め、銀に輝く鬣を軽く揺さぶると身を起こしてリボルト達をじつと見据えた。

「そう言うお前はジャッカルだね。名前はキイだろう？」

突然名前を当てられて、キイは驚いたように耳を伏せた。

「どうして、名前を……？」

うるたえるキイを微笑みながら見つめ、ハイエナは告げた。

「さよう。私がこの地を治めるヒエナだ。手荒な歓迎を許せ。この地の掟なのだよ」

「掟？」

リボルトの問いに、ヒエナ女王は笑みを崩さずに答えた。

「ハイエナ族の風習だ。素性の知れぬ輩はたとえこのリポスでも生かしておけないというね。ジュナイに礼を言うがいい。ハイエナは女の言う事しか信用しない」

何故、と問いかけて、リボルトは口を噤んだ。そういう風習なのだ。それが唯一の答えでしかない。

「さて、ジュナイに聞いたところによれば、お前達はこの私に訊きたい事があるということだが……」

ヒエナ女王の言葉に、ダステイの顔が上がった。

「あるようだな？」

ダステイの顔を見て、ヒエナ女王の目が細められた。

ダステイは深く頷き、平伏して告げた。

「我々はあるものを探し求めてこの地までやってきた。そのものは見えぬもの。この熱帯平原の者なら誰でも知っていると聞く」

ヒエナ女王の耳がやや伏せられた。

「ほう、そのあるものとは？」

ダステイはじつとヒエナ女王を見上げ、そして深くぐもった声で、告げた。

「心、そして野性です」

「心と野生」

ヒエナ女王は呟くと、ちらりとジュナイを見やった。そして、もう一度ダステイを見据えると、大きく溜め息を吐いた。

「では、どうしても聞きたいのだな？」

リボルトは、そのヒエナ女王の重たい声、そして、ジュナイの様子が少し気になった。思えば、フェリは何と言っていただろう。野性と心を知りたいと言ったりリボルト達に対して、何と言っていただろう。

全てを思い返しながらも、リボルトはヒエナ女王をまっすぐと見た。

きつとダステイも同じだ。キイも同じだ。

幾ら考えても自分達は覚えていない事柄。それを知っている
覚えている者達が何と言おうと、リボルトは一心に思っていた。
自分達は、それらのことを知らなければならない。否、思い出さ
なければならない。

第六章 銀髪の女王（二）

銀髪の女王（二）

ヒエナ女王は作り物のような眼をすつと細めると、リボルト達を一人一人見つめ、やがて、落ち着いた声で語りだした。

「お前達の知っている通り、ここはリポスと呼ばれる場所だ。ここは、永遠の楽園と呼ばれ、選ばれた者だけが足を踏み入れられる地として知られている。そこに行ったものは、もう生まれた世界に変えろうなどとは思わず、永遠の命を燃やしながら、幸せに暮らすと言われている」

その通りだとリボルトは思った。此処はリポス。生まれ故郷でも聞いた事のある、伝説の地。そこでは追う者も、追われる者も、永遠の幸せを掴むことができると言われている。

「そう、此処は楽園だ。楽園のリポスだ。そして、リポスがリポスたらしめる為に、ここではいくつかの則がある」

ヒエナ女王の声が深くなった。

「此処に足を踏み入れた者は、まず、食事という概念を忘れる。地の草を食んでいた者も、他者を捕らえて食らっていた者も、等しくその欲を忘れてしまう。思考のメカニズムが変化してしまうのだ。楽園に食べ合いがあれば、そこは楽園とは呼べない。よって、一つ目の則は、食べ合わない事」

食べ合わない事。

リボルトの胸に深く押し掛かる言葉だった。

食べ合わない事。食べ合うとは何だっただろう。どうして食べ合っていたのだろうか。そうだ。リポスの外では、食べ合っていたのだ。この地へ共にきたプレティのような者を食べて、生き長らえていた。

そもそも、此処へ来たきつかけは何だっただろうか。
覚えていた筈なのに、忘れかけた感覚がある。

「リポスの中において、何人も他の命を食べる事が出来ない。しなのではなく、出来ない。しようと思う事が出来ない。これが、リポスに仕組まれた則の一つだ」

ヒエナ女王は、何故か、じっとリボルトを見つめた。

「二つ目は、弑^{しい}さぬこと。食べ合いはもちろん、ただ、弑^{しい}さぬことだ。争わないことはできないだろう。だが、無闇にいざこざを招くような者は、リポスに留まる資格を失いかねない。因って、二つ目の則は、無闇に争わぬことともいわれる」

争わぬこと。

これは少しひっかった。

争わぬこと。

此処へ来る途中、やや争わなかっただろうか。そうでなくとも、ハイエナ達のリボルト達への仕打ちは、争いに入らないのだろうか。少なくともこれは、先の食べ合いの時のように、思考を弄られてはいないようにリボルトは思った。自と他のぶつかりは、リポスですらも制御できないということだろうか。

ヒエナ女王はリボルトの心情を見越したように、付け加えた。

「二つ目の則は、一つ目と異なり、破る事も出来る。もとより血の多い者はリポスに踏み込みにくい。だが、時折踏み込んでしまうこともある。今、動向が気になる者は数名いる。南の雀蜂、東の猿、西の鰐たちだ。中でも、猿達の動きは過激過ぎる。リポス自身にとつくに目を付けられていてもおかしくない」

ヒエナ女王の不穏な表情に、ダステイが首を傾げた。

「もしも破ったらどうなるのですか？ リポス自身って？」

ダステイの問いに、ヒエナ女王の目が微かに光った。その眼光を見たりボルト達は、即座に緊張した。一気にその場の雰囲気が重くなる。聞いていいものなのか、不安にさせる雰囲気。リボルトの心臓が、ばくばくと大きな音をたてた。

ヒエナ女王は目を細め、静かな声で答えた。

「私達は監視されているのだよ、コヨーテ」

明らかに緊張の含まれる、張りつめた声だった。

「破ること自体は罪じゃない。もしそうでなければ、我々ハイエナは暮らしていけないだろう。我々是我々の信条により、余所の男の侵入を許してはならない。よって、男を捕らえ、追いだす必要がある。このこと自体を咎められることはない。我々は命を奪ったりはしないからね。だが、物事には限度というものがあるのだよ。かの猿達のように、余所者を捕らえ、傷めつけ、哀れな魂を抜き取るまで弄り続けられ、さすがのリポスも黙ってはいないだろう」

ヒエナ女王の言葉に、リボルトは、はっとした。

東の猿達の過激な行動。東の猿。自分達のはるばる旅してきた方角だ。威嚇的な猿。確かにいた。追いだされ、不満を以て負け犬の遠吠えをかました、あの相手だ。あの猿達が、まさか、そんなことを。

リボルトは俄かには信じられなかったが、ダスティは全く意外そうな表情を見せずに、訊ねた。

「もしも猿達が改心しなければどうなるのです？ もし、今まで通り、そんな事を繰り返せば、彼らはどうなるのですか？」

ヒエナ女王はじっとダスティの目を見た。

何も語らず、じっとダスティの目を見つめた。

作り物にそのまま魂を宿したような瞳が、じっとダスティの姿を映し出していた。

その独特な間は、ヒエナ女王がこの世の生き物ではなく、違う世界に住む何者かなのではないかと疑うような、神秘的な雰囲気を作り出していた。

彼女ならば、全て答えられる筈だ。

そんな期待までが、生まれてくる。

ヒエナ女王は表情を変えず、不敵に目だけを細めた。

「我々は絶えず監視されている。監視され、管理されているのだよ。」

そして、リポス自身が作り出す箱庭で、理想というものの中で繋がれ、閉じ込められ、不要になるまで見つめられ続けるのだよ」

「見つめる？ 誰が？」

キイが訊ねた。

「誰かが監視をしているんですか？ 誰かが僕らを監視して、操作しているって言うんですか？」

「そう」

キイは、違う、と言われるのを予想していたのだろう。

ヒエナ女王の即答に、訊ねたキイ自身が、戸惑っていた。

「我々は操られている。大きな力に操られて、リポスの思うままに動かされている。もしも、我々がリポスの意に反することばかりを続け、リポスが我々をいらないといえば……その時は、簡単に、存在を抹消される」

「 抹消……」

誰もが絶句した。

抹消。つまり、殺されるというのだろうか。否、違う。存在を抹消される。どういう事だろうか。殺されるとは言わなかった。抹消。抹消されるとはこういう事なのだろうか。

皆の問いに答えるかのように、ヒエナ女王は言った。

「存在を消されれば、誰もがその者を忘れる。リポスの者ばかりではなく、故郷でもいなかった事にされてしまう。なかったことにされてしまうのだ。皆、抹消された者との関わりの記憶は消され、何もかも、いなかったという事が前提の世界へと変わってしまう。そうやって、リポスは自分の描く理想へと、軌道を修正する。全ては、リポスの思い通りというわけだ」

ヒエナ女王は一気に言い終えると、すっと表情を固めた。

ちらりと周囲を目で追い、そして、再びリボルト達を注意深く見つめた。

リボルトは、ヒエナ女王の言った事を理解することで忙しかった。情報が大きすぎて、すぐには飲み込めない。

だが、聞かなければよかった真実を聞いたような気分になったのは確かだった。

六章 銀髪の女王（三）

銀髪の女王（三）

ヒエナ女王は口を閉ざしたまま、何も言わなかった。

しんと静まり返った空気の中で、リボルトは今しがたヒエナ女王が言った話を少しずつ読み解くのに専念していた。彼女の話は、あまりに飛躍しすぎていて、リボルトにとっては理解に苦しむものだったのだ。少しずつ見えてきてはいるが、まだ、納得までにはいかない。なぜ、そうであるのか。なぜ、こうなるのか。リボルトは口を閉ざして考え続けた。

「それが本当ならば……」

ダスティが考えを反芻するようにゆっくりと言った。

「……どうして貴女は知っている？ 操られていることに気付いた貴女を、リポスが放っておいているのはなぜ？」

ヒエナ女王の目が細められた。彼女の笑みは深く、物静かで、どこか寂しげな心が含まれているようだった。

「掟を破らないからだ。コヨーテ」

ヒエナ女王は小さく答えた。

「少なくとも、リポスの許容範囲内ではね。それにここ熱帯草原は特別な場所なのさ」

彼女はそう言うふと表情を変え、立ち上がった。

「特別な場所？」

キイが呟いた。

ヒエナ女王はちらりとキイを見つめたが、ため息をつき、尾を払った。

「野性と心……それは、お前たちが無意識のうちにリポスに抑制されている性質そのもののことだ。熱帯草原の者ならば覚えている……」

：覚えているからこそ、たまに辛くなる。ここでは忘れたほうがいい事柄だ。だが、私の話を聞いた以上、お前たちも次第に思い出していくだろう。少しずつではあるけれどね……」

ヒエナ女王はもう一度溜め息をつくとき、大声で言った。

「私の話せることはそれだけだ。もう帰るがいい」

そう言ったきり、眠り込んでしまった。

リボルト達はどうしたらいいのか分からず、暫くその場に留まっていた。

しかし、しばらくすると、ヒエナ女王の声を聞きつけた使いの者が現れ、リボルト達を外まで案内してくれた。外は妙に明るかった。リボルト達の周りには、ハイエナ達の城以外に目立つものは転々と生える木々ぐらいなもので、誰が何処にいるなど、ひと目で分かるぐらい、すっきりとしていた。今は、ガゼルの群れと、カラカルが一匹、面白そうにこちらを見ているだけだった。

「フェリ？」

リボルトは思わず呟いた。

こちらを見ているカラカルは、確かにあのカラカルの少女、フェリだった。猫の目を狐目のように細くして、長い耳をぴくりと動かしている。リボルト達全員が気付いたのを確認すると、フェリはやつと口を開いた。

「あんた達、やっぱし聞いたのね」

尾をぱたぱたさせて、生欠伸をしながらの、いささかだらしない様子だった。

「ああ、聞いたとも」

ダステイが一步踏み出して、フェリに返事した。

「だが、いまいち納得できんし、実感もわかない」

ダステイの意見に同感だった。ハイエナの城を抜けた今になっても、リボルトの中には、ヒエナ女王の言った話が現実だという実感がわかなかつた。だから、話は怖いと思ったのだが、実際に自分がそのような目に遭っているとは思えなかつた。

「そりやそうだとも。あんた達は今聞いたばかりだからね」

フェリはくすりと笑いながら言った。

「でもね、すぐに分かるさ。だんだんと分かってくる。全部分かった日に、あんた達がどうするのか、ちょっと気になるかもね」

フェリはそれだけ言って、また駆けて行ってしまった。

リボルト達はしばしフェリの後姿を見つめていたが、やがて、ダスティの無言の促しで、歩き始めた。何処へ向かうつもりかは分からなかったが、ダスティの行く方向へ、皆、従った。方角的には、住処へと戻るわけではないらしい。思うままに進んでいる可能性もあるが、それでも皆、何も言わなかった。

熱帯平原を歩く複数の狼というのも、それなりに目立った。

熱帯平原に住む生き物のいくつかは、とぼとぼと連れだって歩くりボルト達について来たし、意味ありげな視線を投げかける者もいた。だが、皆、野性と心を知っているためか、リボルト達に話しかけようとする者はいなかった。リボルト達についてくるのも、大人ばかりで、子どもの住人がリボルト達に興味を持って近づこうとすると、別の大人がそれを必ず咎めていた。それを見ると、問答無用で害とされているような気がして、とても不快に思ったのだが、ダスティが歩き続けるので、リボルトはそのわだかまりを自分の中で有耶無耶にして、ダスティの後を追った。

ダスティはというと、ついてくる皆のことなど気にも留めずに、ただひたすらに自分達の来た方角とは反対方向へと向かい続けた。ただひたすらに自分達の来た方角とは反対方向へと向かい続けた。ただひたすらに自分達の来た方角とは反対方向へと向かい続けた。ただひたすらに自分達の来た方角とは反対方向へと向かい続けた。

「ねえ、何処行くんだよ」

破りにくい空気をどうにか打ち破ったのは、ジュナイだった。

「あたしら、ずっとついて来てんだよ？」

ジュナイの苛立った声に、ダスティはゆっくりと振り返った。だが、その表情はうつろで、あまり、リボルト達のことを意識していないという様子だった。ダスティは、ジュナイをさらに苛立たせそうな生返事をする、大きくため息を吐いた。

「どうしたんだよ、急に」

ジュナイが怒り出す前に、キイが口を開いた。

「なんか変だよ？」

キイの問いに、ダステイはもう一度生返事をした後、やっと我に返って、さつきよりはまともに応じた。

「いやね、頭と胸の奥から、何か呼びかけてくるんだよ……」

そう言って、彼は空を見上げた。

「思い出せそうで、思い出せない、あの感じだ……」

彼の頭の中に住みついた者。

リボルトはそのことについて考えた。

彼がヒエナ女王の話によって惑わされ始めたのは明らかだった。

だが、分からなかった。ヒエナ女王の話の何処に、惑わされているのだろうか。彼女の話は確かに恐ろしかったけれども、根拠も何もないものだっし、何よりも実感がわかない。そのことをフェリに言っていたのは、ほかでもないダステイではなかったか。

いまのダステイの様子は、とても不気味だった。

リボルト達は顔を見合わせつつも、これ以上、ダステイには何も言えなくなった。今の彼には、何を話しかけても無意味なのではないかと感じ始めたのだ。なので、その日、そのままずると夜が来てしまっても、誰も何も発言できぬままに、各々のタイミングで就寝した。就寝するまでもリボルトは、ヒエナ女王の話と、ダステイの不気味な変化について、考えた。考えたものの、何も答えらしきものは浮かばなかった。

その日、いつの間にか眠りに就いていたリボルトは、夢を見た。

沢山の《赤狼^{ドル}》たちと野山を駆け回る夢だった。なぜ、駆けているのかは、最初、リボルトには思い出せなかった。やがて、風景が変わっていき、木々が消え、茂みも消え、一頭の若い牡鹿が現れた時、それを思い出した。牡鹿はこちらを見つめると、すぐに駆けていった。リボルト達もすぐに追った。軽々と大地を飛び跳ねるその牡鹿を、見逃さないように、見逃さないように、追いかけていった。

突然、リボルトは目を覚ましてしまった。

揺さ振られた気がしたのだ。そして、それは、当たっていた。キイがリボルトの背にこつんと頭をぶつけたのだ。

「どうしたんだ？」

寝ぼけ頭でそう応えてみて、リボルトは改めて、言葉を放ったのが少しばかり久し振りだと気付いた。それは、キイも同じらしく、彼はほんの少し掠れ声でリボルトに言った。

「ダステイがい……ジュナイもどっかに行つたみたいなんだ……」

リボルトの眠気が吹っ飛んだ。

慌てて立ちあがって辺りを見渡してみると、辺りには満天の星空に包まれる平原のほか、リボルトとキイしかおらず、他の住人でさえも見当たらなかった。キイと取り残されたことを知って、いきなり不安になったものの、リボルトは冷静さをどうにか保って、キイに言った。

「ふむ、ちよつと出ているだけかもしれない。朝まで待ってみようか」

キイは不安げにリボルトを見たが、小さく頷くと、リボルトのすぐ傍に背をくつつけるようにして、再び眠りに就いた。リボルトも、こつそりキイの存在に感謝しながら、眠りに就いた。

しかし、朝になつても、昼になつても、ダステイとジュナイは戻ってこなかった。

七章 目覚めし者（一）

七章

目覚めし者（一）

リボルトとキイは、熱帯草原の中をひたすら歩いた。

不可思議かつ不気味なことに、ダステイの匂いも、ジュナイの匂いも、もう残っていないかった。リボルトとキイは、ダステイの向かっていた方角を見つめた。住んでいる場所とは反対側のその方角は西。つまり、進んでいけば、乱暴な鰐達が暮らしているとヒエナ女王に言われた地に着く。あの日のダステイは、何故、そちらへ進んだのだろうか。そして、ジュナイは何処へ消えたのだろうか。

「本当に、追いかけてなくて、いいの？」

キイが訊ねてきて、リボルトはちらりと振り返った。

「そっちに行ったというのが確実ではない。確実ではない限り、ここはいったん引いたほうがいいと思うんだ。ジュナイもダステイも、戻ってくるかもしれない」

リボルトは低く、力ない声で言った。

そう、二匹はシェイドとブレイズの待つ、住処へと戻るところだった。確かな手掛かりがない以上、そして、ジュナイとダステイの匂いが残っていない以上、危険な道へ進むわけにはいかなかった。

「だから、戻ろう。猿に気をつけながら……」

「わかった」

キイは素直に従った。

リボルトが前を走り、キイがちよこちよことそれを追う。二匹は、そんな日々を二日続けていた。サバンナの出口はもう少し。もう少しで、チーター三兄弟の住処が見えるだろうとリボルトは気合を入

れて走った。

「待つて。リボルト、早い！」

そんな声ができる度に、リボルトは、しまった、と走りを止めた。キイの小さな体と、リボルトの体では、一步ごとの幅が違う。リボルトが振り返ると、キイの息はすっかりあがっていた。

「すまない、キイ。少し休もう」

「そうしてくれるとありがたいよ……」

キイはげえげえ言いながら、尾をばたばたと振った。

二匹は暫く言葉を交わさなかった。リボルトはぼんやりと一角を見つめていた。揺らめく陽炎の向こうに、微かにだが、遺跡が見えたような気がした。そういえば、とりボルトは考えた。なぜ、あのようなものが、此処リポスに存在しているのだろうか。あんなもの、自然に出来たとは思えない。リポスだから、外界とは根本的に違うのかもしれないが、ダステイが前に言ったように、あの岩柱は、外界の人間の手が加わっているもののようにも見えた。これはリボルトにとって、玉虫流れと同じくらい不思議なことだった。なぜなら、自然界から見放された人間たちが、このリポスへと踏み込むことは、非常に稀なことだと野の獣たちの間では言われていたからだ。その稀な人間たちが集まって、あんな岩柱を築いたのだとしたら、彼らは何処にいるのだろうか。

リボルトはその疑問をキイに問おうと振り返った。その時、キイの後ろに、見知った顔が見えた。

「フェリ」

キイが驚いて振り返る。

フェリは、草むらからこっそりこちらを覗いていた。見つかったと分かると、元から笑っているようなその顔に、さらに笑みを浮かべた。その顔は、山猫であるのに、まるで、狐のような顔だった。「コヨーテと狼犬のお嬢さんが覚醒したんだね。あのおっさんはあんならよりも長く生きているし、女はもともと繊細なもんさ」

フェリはそう言って、ひょっこりと顔を上げた。

「ジャツカルはまだ若いし、ドールは来たばかり。これじゃいつになるんだかって感じ」

「どういうこと？ 何がいつになるっていうの？」

キイの質問に、フェリは細めた目を広げた。

「ねえ、あんた達、東に帰るんでしょ？」

応えずに質問を返したフェリだったが、キイは戸惑い一つも顔に表れなかった。

「そうだよ。そこに仲間が残っているんだ。もしかしたら、いなくなつたダステイやジュナイも戻ってくるかもしれないし……」

「戻ってくるかは分からないが、探す当てもないからね」

リボルトも口を挟んだ。

フェリはじつと二匹の顔を見比べ、すつと立ち上がった。

「あたしも連れてってよ」

二匹にとつては、意表を突く言葉だった。

「なぜだい？」

リボルトは訊ねた。

フェリは尾を軽く振り、草むらから這い出して、二匹に近づいていった。

「東の地にあたしも行かなきゃならないの。どうしてもね」

リボルトとキイは顔を見合わせた。別に東に帰る動きに、カラカルの娘が一匹ついてくるぐらい、どうってことなかった。況してや、知らない者ではなく、何度も喋つたことのあるフェリだったら、不気味でもない。

「連れていく理由なんてないが……断る理由なんてないな」

リボルトは正直に言つた。キイもそれに同意する。

フェリはちよつと安心したようだった。

「じゃあ、勝手について行く。いなくなった二人は、焦らずともすぐに戻ってくるさ」

フェリの言葉には確証なんてなかったが、それでも二匹が妙に信じてしまうような力があつた。他でもない熱帯草原に住む者の言葉

だからかもしれないが、リボルトには、別の理由もあるような気がしていた。

何にせよ、東へと帰る連れ合いが、二匹から三匹になったのは、少し心強かった。フェリは一回も熱帯草原から出たことがないと言ったが、それでも勘が強いのか、ちよつと逸れても迷うこともなく、その後は普通に合流することができた。

フェリによれば、リポスに長くいると、独特の土地勘というものがつくらしい。

「長くいるってどのくらいいるの？」

キイに訊ねられたフェリは、あのいつもの小さな笑みを浮かべ、答えた。

「あたし、ここに来てから、満月をずっと数えてた。でも、二千回ぐらいを越してから、もう何度目の満月なのか分からなくなっちゃった」

満月を二千回。あるいは、それ以上。

リボルトにとっても、キイにとっても、果てしない数だった。

「その間に、誰かが死んだりするの？」

キイが訊ねた。

だが、フェリは首を振った。

「分からない。誰も死んでいないのか、忘れてしまったのか……」

ヒエナ女王が、存在が消される、と言っていたのをリボルトは思い出していた。存在が消されるということは、このリポスにおいて、死と同等なのかもしれない。だが、不思議だった。一体何が、リポスに反するものの存在を消し、此処リポスを管理しているのだろうか。リボルトには想像もつかなかった。

神のみぞ知る。或いは、神そのものか。

リボルトは綺麗に欠けた月を見つめた。下弦奥。もはや懐かしいあの山ではそう言われていた。シェイドとブレイズは、下弦奥の場所で見ているのだろうか。そもそも、前の下弦奥では、何をしていただろう。

リボルトはすぐには思い出せなかった。

下弦奥の場所。前、寛いだその場所は、確か、鹿達が寛ぐ湖だった。そこには一緒にこの地に迷い込んだ雌鹿のプレティがいた。

そこまで思い出していくと、段々と記憶が繋がって出てきた。

寛いでいると、ジュナイが話しかけてきた。そう、抜け駆けの強力だった。そして何処に行ったのだっただろうか。

「フェリ……」

リボルトはぼつりと口を開いた。

「東の地には、どうして行きたいんだい？」

フェリはじつとリボルトの顔を見つめたが、すぐにふいつと顔をそらした。

「どうしても、行かなきゃいけないの」

そう言つと、寝てしまった。

七章 目覚めし者（二）

目覚めし者（二）

「あの微かに見える山が狼のねぐらかい？」

フェリが静かに言った。

リボルトとキイはそう言われてから、やっと自分達の岩山が近づいてきたことに気付いた。

「ああ、そうだが、なんで分かったんだ？」

リボルトの呟きを無視する形で、フェリは先を急いだ。ここは、猿の縄張り付近。猿と猪が争っているという森林のすぐそばだった。キイがちらりと森林を見つめた。猿と猪の争いの下になっているというもの。新鮮な小川。きれいな水。水。

「ああ、喉が渴いた……」

キイが心底うんざりした様子で呟いた。

そういえば、暫く水を飲んでいない。唯一の食事だというのに。

リボルトは無言でフェリを見やった。フェリはキイの呟きに振り返り、澄ました目を猿達の森林へと向けた。

「ふうん、あの森が噂の森だったかな？ 猿どもが猪と水を巡って争っているとかいう」

「ああ、そうだ。俺達も来る時、水を失敬して猿達を怒らせてしまった」

リボルトの返答に、フェリはくすりと笑い、森林へと完全に向き直った。

「ひとつ行ってみるかい？ どうせリポスでは争い事は禁忌だ。襲われて最終的に罰を受けるのは向こうのみでしかないからね。まあ、この先にも水を補給できる場所があるんじゃないんだけど……」

リボルトとキイは思い出してみた。熱帯平原へと向かう道すがら。

このけちな猿達の森に来るまでに、どのくらい水を飲める時間があつたか。そして一分にも満たない間に、二匹とも、同じ結論に至つた。

「ここで飲もう。水が湧いているのは随分と先だ」

言葉にするのは、リボルトのほうが早かつた。

「そうかい。じゃあ、極力猿に会わないように気をつけながら行くじゃないか」

フェリは言い終わるなり早速飛び出し、真つ先に森林へと駆けて行つた。リボルトとキイは、一拍遅れで、その長い尻尾に続いていった。

間もなく森林に踏み込むと、リボルトは急に寒気を感じた。平原と森林とで温度差が激しいようだ。この間はそんなことはなかったのだが、これは何なのだろうか。寒気を感じているのは、リボルトだけではなく、キイも、フェリも、同様にぶるつと身震いした。

「おかしいね。リポスのこの方角でこんなに寒気がするなんて」
フェリが囁いた。

森林は妙に静かだつた。たまに聞こえるのは、鳥達の声。リボルト達には分からない、鳥達だけの言葉。それは、他所の鳥達の可愛い歌声ではなく、他種族を怯えさせる、陰鬱でおどろおどろしい旋律の歌だつた。

言語が分からないのが、特に、不気味だつた。

リボルト達は極力喋らずに、小川へと進んだ。

猿達に会わないようにといった警戒心から、というよりは、この不気味な雰囲気による圧力から、といったほうが正しかった。

だから、進んでいって、がさがさと音がする度に、三匹は心臓が跳ね上がるほど驚いた。

そうして小川にたどり着いたのが、三十分後。しかし、この三十分は、普段の十倍以上は長く感じた。

「ついた……」

キイが掠れ声で囁いた時、リボルトは声というものを久々に聞い

たような感覚に浸った。得体の知れない緊張と静けさで、時間感覚がおかしくなっているかのようなようだった。早く水を飲んでここを去りたい。リボルトは真っ先にそう思った。

何も言わずに小川に近づき、水を飲む。冷たくきつい刺激が走る。しかし、喉は渴いていたらしく、リボルトの舌はどんと水を身体に流し込んでいく。キイも、フェリも、いつの間にかリボルトと同じく水を飲んでいた。

耳に聞こえるのは、遠くからの鳥の声。そして、虫の声。後は雑音。三匹が水を飲む音、小川の流れる音、誰かが草を踏む音、誰かが気の枝を折った音。

リボルトの耳が、すばやく反応した。

誰かがこっちに来る。

猿だろうか。

いや、それよりも、大きな何かの音。

「おやおや、狼とは珍しいものだ」

老婆の声だった。

キイもフェリも素早くそちらを見やる。小川の向こう側からこちらを見る者がいる。それは、猪だった。白い毛の混じった、老猪。濁った色の目を細めて、こちらをじつと観察している。

「山猫と狼の組み合わせかえ……面白いもんだ」

リボルト達はじつと老猪を見つめた。岩のような胴体に、どっしりとした足、頑丈そうな蹄。濁った色の目で、こちらを見据えている。

「踏み込んですまない。すぐに去るよ」

リボルトはそう言つて、踵を返そうとした。

その途端、老猪はくつくつと笑んでみせた。

「きつと、おまいさんは前に猿と会ったんだね？ そうじゃなきゃ、リポスに来たばかりなのかえ？ 心配せずともこの水は私のものじゃない。沢山飲んでいくがいいさ」

リボルトもキイも呆氣にとられた。何しろ、前に来た時の猿の対

応があれだ。その猿とぶつかり合っている猪というと、同じように他所者を嫌い、小川を守るのだと思っていた。

「婆さんはあたし達を追い出したりしないんだね」

フェリが思ったままに訊ねた。

「他の猪たちも同じなのかい？」

「大体は同じだろうねえ、山猫のお嬢さん」

老猪は答え、鼻を少しだけ動かした。

「猿と争っていたのは、猿が傲慢だったからねえ。だが、今はもう平和さ。猿どもがいなくなったからね」

老猪はそう言つと、水を飲み始めた。

猿がいなくなった。その言葉を遅れて理解し始めたリボルト達は、はつと老猪に訊ねた。

「猿がいなくなった？」

リボルトが真つ先に口を開いた。

「いったい何処に？」

老猪は水を飲むことを中断し、ちらりとリボルト達を見上げた。

「消えた」

ぼつりとそう告げ、また飲み始める。

消えた。

ただそれだけの情報。ただそれだけの情報だったが、リボルトは色々と思案を巡らせた。リポスの禁忌を犯した猿達。それが、消えた。何が、どう起こつて、そうなったのだろうか。消えるとはどういう事なのだろう。

存在が、消える？

リボルトは考えた。

リポスの禁忌を犯して争いを起こした猿達。彼らはどうなったのだろうか。罰として、残らず消えてしまったのだろうか。どうやって、消えてしまったのだろうか。彼らの身に、何が起こったのだろうか。

その間に老猪は水を飲み終え、ゆっくりと顔を上げた。

「消えたってどういう事だ？」

リボルトの問いに、老猪は表情を変えずに答えた。

「そのままの意味さ」

「猿達に何が起こったの？」

キイが問い直した。

老猪はちらりとキイの目を見つめると、小さく溜め息を吐いた。

「酷い夜だった」

老猪は語り始めた。

月の無い夜、猿達の悲鳴が響き渡って、森林の生き物たちは騒然とした。

あの猿達が、何者かに襲われている。

猪だろうか？と殆どの生き物は思ったものの、そうではないと知っている猪たちの恐れと驚愕は計り知れなかった。すぐに幾らかの生き物たちは悲鳴の下へと駆けつけ、猿達の身に何が起こっているのかを確認した。

そして、見に行った者の殆どが、そのことを後悔した。

「私も見に行った一人さ」

老猪は静かに語る。

その濁った目では殆ど何も見えなかったものの、鼻と耳が目を力バーし、何が起こっているのかを彼女に把握させた。

全ての者が、見ていることしか出来なかったという。

それは、綺麗な姿だったという。老猪の目にも、淡い光として見えたらしい。空の虹をそのまま地上に降ろしたかのような、綺麗な存在だったらしい。輪郭はあやふやで、捉えどころのない姿。生き物というよりも、自然現象という雰囲気。死んでもいないし、生きてもいない、美しくて不気味な存在。

目玉の無い空洞の目が、笑っていたらしい。

全ての者が、見ていることしか出来なかった。その得体の知れない者が、泣き叫ぶ猿達の身体を少しずつ擦って、消していくという光景。

「止められなかった」

老猪は低く唸る。

「止めてはいけないと誰かが私達に言ったんだ」

「止めてはいけない？」

リボルトに、老猪は頷いた。

「確かに聞こえた。あの日から、もうあの荒っぽい猿はいない。だから、平和になった。それだけさ」

そうぼそりと言い、老猪は踵を返す。一步彼女が踏み出そうとした時、急にフェリがはっと顔を上げ、老猪に声をかけた。

「ねえ、待つて」

老猪はそのまま制止する。

「猿はみんな消えてしまったのかい？」

フェリの質問が妙に響き渡った。まるで、その言葉に深い意味が込められているかのようだった。そう、リボルトには感じられた。

老猪は振り向きもせず、小さく尾を振った。

「一人……以外はね」

「その一人って、誰？ 何処にいるの？」

「ガリ」

老猪は短く言った。

「何処にいるかは、自分達で探すがいいさ」

そうして、ゆっくりと去っていった。

七章 目覚めし者（三）

目覚めし者（三）

ガリに会ってもいいかと言いだしたのは、フェリだった。

リボルトにもキイにも彼女に反対する理由もなかったので、二人ともついていく事にした。ガリという名前だけが手掛かりだなんて乏しすぎる、そうキイは文句を言ったけれども、森を探索するのは少し楽しそうだった。

だが、リボルトには憤慨する余裕すらなかった。

生き残った猿、ガリはこの森の何処か。そして、それを阻む者はいない。

確かに森は広大だが、歩きまわればそのうち会えるだろうと呑気に構えられる。

否、リボルトが不穩に思っているのはその事ではなく、先程の老猪の話だった。

猿が消えた？

そしてその光景を目の当たりにした者たちが聞いたという、「止めてはいけない」という声。

消えた、消えた……。

否、消された？

リポスの掟を破ってはいけないという話を思い出した。破る事の可能性を破ってはいけないという話だ。でないと、抹消される。存在を。

そうだと、リボルトは眉間にしわを寄せる。

ヒエナ女王が言っていたのだ。野性と心についてを知っていると、あの女王が、リポスに逆らう者は抹消されると言っていたのだ。つまり、そういう事。

猿達は掟を破った。

リポスの精神を穢した。

破ってはいけない、争い事をしてはいけないという掟を穢した。食べ合わないの次にあげられるというその掟を、穢してしまったのだ。

だから、抹消された。ただ一人を残して。

「フェリ……」

リボルトは黙って歩くフェリを見つめた。

急に呼ばれて、フェリは若干驚いたようだったが、すぐに目を細め、いつものあの山猫の微笑を浮かべた。

リボルトは無表情にそれを見つめ、訊ねた。

「フェリ、君は熱帯草原の者なら、野性と心は知っているとっていたね」

その問いかけに、フェリは何かを察したのだろうか、笑みは崩さなかったものの、リボルトには、その奥に秘める雰囲気が少しだけ変わった気がした。

彼女は小さな口を小さく開き、呟く。

「言っただよ」

「なら聞きたいのだけど、今……」

リボルトは言いかけたのだが、口を噤んでしまった。

こちらを見つめるフェリの瞳に気付いたからだ。

猫の瞳。森の薄暗さで丸く爛々と輝くそれには、見る者に沈黙を押しつける魔力のようなものが秘められていた。少なくとも、リボルトはそう思った。

相手が自分の魔力に囚われたと分かったのか、フェリはやや己の緊張を解し、狐の笑みにも似た表情を作った。

そして、また、小さな口から、小さな声。

「あたしは何も言わない、何も言えない、何も言いたくない」

拒絶だった。絶対的な拒否。笑みとは裏腹に、その言葉は強かった。

何も把握出来ずにいるキイまでもがうるたえるほどの、強い否定の意志。

なぜ、どうして、という質問を一切受け付けないような力だった。思ってもみなかった局面に、リボルトもキイも戸惑っていると、フェリがそれまでの妖艶な笑みを解し、くすりと違う笑みを見せた。「行こう、ガリに会えば少しは分かるよ」

ガリに会えば少しは分かる。

フェリがそう言う事が、妙に引っかけた。

どうして彼女が言う事が出来ないのだろうか。

どうして彼女は言う事を拒否するのだろうか。

それが分からないと、ガリに会わなくてはいけないと言われても、しっくりこない。

でも、フェリの拒否は絶対的だった。

話す気になれないから話したくないという程度ではない。少し意地悪をしたいから話さないという程度ではない。それは、もっと強い意志によるもの。しない、したくないという単純な理由ではなく、出来ないという複雑な理由。

リボルトには細かいところはよくは分からなかった。

だが、その中にずかずかと踏み込んでいいものではないという事はよく分かった。

リボルトにとって、狼は、特に、リボルトのいた《赤狼^{ドール}》の群れの中では、集団で生きつつも、野里の犬よりも個人を捨てない生き方を大事にしているものだった。その集団と個人の狭間で、リボルトは《赤狼^{ドール}》並みに悩み、《赤狼^{ドール}》並みにもがいていたものだった。でも、それはリボルトだけではなく、他の《赤狼^{ドール}》も同じ。

集団で過ごしつつも、自分自身との擦れを感じた時に、皆、悩み、もがき、そして解決するという事を繰り返しながら時を過ごしていたものだった。

集団だけを考えるのが狼ではないのだ。

誰もが、他人には不可侵の自分の領域を持っている。

そして、その中には、どんなに親しく、どんなに心を許した相手であっても、容易く侵入して欲しくないと感じてしまい、いつの間にか反撃して、自分の世界を守ろうとする。

その自分の領域を守る傾向はきつと、猫達のほうが数倍強いだろうともリボルトは感じていた。

だが、個人主義の猫でも、集団の中で悩む事はあるという話を、フェリから聞いたばかりだった。

猫は他人とのことで悩む事なんてないだろうとリボルトは勝手に思っていたけれど、そうでもないらしい。フェリも悩み、でも、自分の世界も大事にしながら、うまく渡り歩くコツを学んでいくらしい。

勿論、その方法は猫科専用なので、狼であるリボルトが真似したって上手くはいかないだろう。

でも、リボルトはそれを聞いて、フェリをもっと理解出来るようになった気がした。

つまり、狼も、猫も、違いはあれども、個々はそう変わらないという事かも知れない。

だから、深入りしない。

フェリが拒否するのなら深入りはしない。

それが礼儀だと思った。

「しかし、ガリはこの広い森の何処かなんでしょう？ 一体何処にいるんだろうねえ？ もうくたくただよ」

ため息交じりにキイが言った。

キイの身体は小さいのだから、リボルトやフェリよりも先に疲れてしまうだろう。

フェリだって、狼と猫という身体の差はある。素早さ命の猫は、狼ほどの持久力がない。だから、あまり無闇に歩いて、体力を浪費するだけだった。

「うっん、誰かに会えればなあ」

リボルトが溜め息を吐いて、空を見上げた時、ふとこちらを見下

ろしている目に気付いた。丸い目。闇の中で光り輝く目。ぎらりと反転し、リボルト達を見つめ、細められる。

その余りの不気味さに、リボルトはぎよつと身を竦ませた。

そのリボルトの様子から、フェリもキイもそれに気付く。キイはリボルトと同じくびくりと身を竦ませ、いつもは垂らしている尾をびんと上げた。

だが、フェリは、それを見つめ、「ああ」と目を細め、その目を見上げて微笑みかけた。

「忍び鼻じゃないか。噂にや聞いていたが、本当に全く気付かなかったわ」

「忍び鼻？」

リボルトの問いに、フェリは答えず、くすくすと笑むばかりだった。

その忍び鼻とやらも、フェリが笑むのに合わせて、ほー、ほー、と笑っていた。笑っていると辛うじて分かったのは、その表情からだ。

「狼と猫という珍しい面子の旅人っちゅうのはおまえ達か」

年の全く分らない男の声。忍び鼻は目を細め、ほうほうと笑う。「見たところ、猫と狼と言った方がよさそうだな。目覚めた順はその通りだろう？」

忍び鼻に合わせて、フェリもくすくすと笑った。

「その通り。さすがは忍び鼻さんだよ。噂は本当のようだねえ。こいつらはまだ雛ひな。やっとリポスの与えた殻を破って孵ひったばかりの雛さ」

「ほう、つまりは目覚めたばかりの狼、というわけか。……覚醒した狼の瞳の奥には炎が宿る。だが、なるほど、そいつらのはまだ生まれたばかりのぬるい炎だ。しかし、ぬるい炎はいつか、大火になり、すべてを焼き尽くすだろう」

「大昔の話ね。やれやれ、年寄りの話を聞かされると、耳に胼胝へんしが出来るよ」

フェリが呆れたように言った。

リボルトには彼らの話がさっぱり分からなかったが、どうやらこの忍び梟とやらは、フェリよりもずっと長く生きているらしい事は分かった。

「……それより」

フェリが話を切り出した。

「この森の裏主と言われている貴方にお聞きしたいのだけれど」

「ほう、なんだね？」

忍び梟は首をぐるりと回す。

リボルトは大して驚かなかったが、キイはかなり驚いたらしく、びくりと身震いした。フェリは相変わらずくすくすと笑い、その姿を見上げる。リボルトから見ると、フェリと忍び梟は何年振りに再会した友人同士のようなだった。そうではないというのは、フェリの言葉の端々から、リボルトにも分かったのだけれども、妙にそれが気になった。

フェリは一頻り笑うと、忍び梟をまっすぐ見つめ、訊ねた。

「ガリという猿を探しているんだが、知らないかね？」

「……ガリ、それはまたなんでだね？」

ガリという言葉に耳にし、忍び梟は表情を変えた。

澄ました笑いに隠されているのは、敵意ではなかったけれど、警戒か、嘲笑かのどちらかが含まれていた。どちらにせよ、リボルト達がガリという猿に出会う事に、この忍び梟はあまりよい感情を抱いていないのがリボルトとキイには分かった。

それは勿論、フェリも同じだった。

「それは、あたしの都合さ。知っているんだらう？」

「ううむ、知っているには知っているんだが……」

「じゃあ、何処にいるか教えてくれないかい？」

フェリは笑っていたけれど、その言葉には脅迫的なものがあつた。忍び梟はフェリの様子をみて、ただ、ほうほうと鳴いた。その声からは、どんな気持ちが含まれていたのか、リボルトには分からな

った。

「猫は猫でも山猫だねえ」

忍び鼻は呟くと、羽根を広げ、木から下りてきた。

「さてと、ガリを見たのはちよいと前だったかな。会いたいのなら急ごうか」

そう言っで、飛び立つ。

リボルト達が啞然としている中、フェリがその後を追った。そして、二、三歩進んで、リボルト達がついて来ないのに気づき、はつと振り返る。

「何してんだい、置いてかれるよ」

その時になつて、やっと、リボルトは状況を把握した。

八章 森の賢者（一）

八章

森の賢者（一）

同じ森の中はすなわに、際立つて雰囲気の違う場所というのは何処にでも存在する。リボルトが生まれ育った場所だってそうだったし、リポスに来てから過ごしているあの山だって、その付近の森だってそうだった。同じような風土で育った木々、同じような空気が流れ込んでいるはずなのに、その場所だけ、何故か異質。

忍び梟に誘われてたどり着いた場所も、まさにそんな場所だった。精霊の住処とでもいうのだろうか。プレティ達、鹿が集まっていた湖に漂っていた雰囲気にも少し似ている。とにかく、この場所が特別な場所である事はすぐに分かった。この場所に、ガリは潜んでいるという。まさに、只者でない者が潜んでいそうな場所であった。だが、もはや最後の一頭となってしまった猿。

そこは、たった一頭で暮らすには、とても寂しい場所だった。

忍び梟が突如、ほう、ほう、と鳴きだした。何と言っているかは分からない。独自の呼びかけのようだった。それに答えるように、ほう、ほう、と声がする。返答は梟ではない。梟の声をまねた何かの声。それが何か、考えるまでもなかった。

木々が揺れて、鬱蒼と茂る葉の間からどさりと落ちてきたのは、とても大きな猿だった。キイやフェリよりは勿論、リボルトすらも小さく見える程の山猿。否、ただの山猿ではないだろう。尾は長く、黄色い長毛がぶらりと揺れている。顔は細長く、少し灰色がかっている。何らかの変種だと分かったけれど、リボルトにはこれが何と言う種族なのか分からなかった。ガリの目はぎらりと光る茶色。そ

の鋭い眼光に、キイがびくりと震えたのを、リボルトは見逃さなかった。

「ほほう、狼とな。つい最近話には聞いたけれど、久々に見たな」
そう言つて、目をフェリに向ける。

「サバンナのお嬢さんもな。ようこそ、ジャングルへ」

フェリはくすりと笑み、小さく頭を下げる。リボルトとキイはどうしたらいいか全く分からなかったが、慌ててフェリに倣つて頭を下げた。

「それで、忍び梟めが俺の場所を軽々と案内したからには、それなりのものをかぎ取つての事だろうて。お嬢さんはええが、若狼二人の話を聞かせてくれるかな？」

急に話題を振られ、リボルトもキイも口籠った。話すといわれても、何を話せというのだろうか。あまりにも見当がつかないので、リボルトは恐る恐る口を開いた。

「話……というと？」

すると、ガリは少しも動じずに、静かに答えた。

「今までの事だよ。思うままに話しておくれ」

当然のように言われ、リボルトは困り果てた。

ここまで自由な質問となると、何を話し、何を話さないか考えるだけでも大変だ。

一方、キイはというと、今の説明だけで何かを納得したらしい。

キイだけは自分と同じく困るだろうと思つていたので、リボルトはいよいよ心細くなった。

「わかった。今までの事、話すよ」

キイの言葉に、リボルトは無言でその場を譲った。

「俺はこのリポスに来る前、とんでもない落ちこぼれたんだ」
リボルトには唐突すぎる告白だったが、フェリやガリの反応を見ていると、この場に見当違いの話題ではないらしい。ますますリボルトには分からなかった。それにしても、キイが此処に来る前の話を詳しく聞くなんて、初めてのこともしれなかったことに、リボ

ルトは今になって気付いた。

「他のジャツカルの家族は木の実を採ったり、落ちている肉とかを拾って食べたりでよかったんだけど、俺の家族は代々続く名ハンターの家柄で、新鮮な肉ばかり食べたがるような奴らでね。母さんに父さん、そして、乳兄弟の他に、年の違う兄や姉に囲まれて、何度も何度も狩りの練習をさせられたよ。他の乳兄弟は優秀だったけど、俺だけは別だった。落ちこぼれさ。俺なんか残していたって特にはならない。だから、せめてケンカだけは強くなろうと思って、ケンカばかりしてた。けれどね……」

キイはそこでとても寂しそうな顔をした。群れ社会に生きる者なら何となく分かる気持ち。リボルトには、キイの気持ちが、少しだけ理解できそうだった。

「暮らしには、ケンカよりも食べ物確保が大切なんだ。そう俺に教えてくれたのは、姉だったよ。兄と姉は一人ずついて、二人とも父さんと母さんのヘルパーをしていたんだ。毎年新しい大人のうちの一人が残って、父さんと母さんのヘルパーをするっていう決まりだったんだ。そして、いつか父さんと母さんが死んだ時は、ヘルパー達は分かれてそれぞれが群れを継いでいくっていう事になった。俺達のいい遊び相手にもなったし、いざという時は守ってくれたし、すごく頼もしい存在だったんだ。出来れば俺も二人みたいないいヘルパーになりたいって思っていたんだけど、姉が教えてくれたのは、その夢を閉ざす事だった。ケンカが強いついていうのは、他の家族だったら此処に残れる利点だっただろうけれど、此処は優秀なハンターの暮らす場所。だから、俺にはヘルパーにはなれないだろう……ってさ。それに、ケンカしなくても、もう新しいヘルパー候補は決まっただけで、それは俺じゃなかった」

そこまで言って、キイは目を細めた。

「つまりさ。俺はいくら頑張ってもヘルパーにはなれないってわけ。勿論、俺だけじゃない。俺以外にも、ヘルパーになれずに出ていく奴なんてわんさかいた。けれど、皆、俺とは違って、輝いているん

だ。木の実や肉を拾い集めるだけじゃなくて、俺よりもずっと上手く狩りが出来るんだから、一人立ちへの不安なんて殆どないようにも見えた」

そこで、リボルトははつとなった。リポスに来てから思い出しもしなかった、リポスに来る以前　つまり、生まれ育った群れの想い出が蘇ってきたからだ。

母親やお守り役に護られて遊び回った子ども時代。そのうち大人として扱われるようになり、若い男手として、狩りを手伝われるようになった青年時代。足に自信のない者たちのやっている木の実や肉を拾い集める係りを横目に、ひたすら獲物を追いかけていたあの時代。誰もが群れに残るのに必死だった。使えなければ、いつかは追い出されてしまう。彼が生まれ育ったのは、そういう群れだった。やがて対抗していた付近の二つの群れと和解し、複合した結果、急に人数が多くなってから、さらにその色は強くなった。

「俺は不安だった。ものすごく不安だった。生きていけるのか、木の実や肉を拾い集めるだけで生きていけるのか、ものすごく不安だった。そして、残ってヘルパーをやっている兄弟が憎かった。すごく憎かったんだ」

リボルトも思い出す。

憎かった。残って子どもを産み育てる場を設けられている姉や妹が憎かった。群れの者たちに特別期待されて優遇されている兄が憎かった。ケンカの強さと子どもの扱いのうまさをかわれてお守り役として残る事が決まった兄弟がとても憎かった。そして、悲しかった。自分なんて、食糧確保として頼れなくなったら群れを追い出されるのではないかと思うと、とても悲しかった。とても辛かった。

「皆を憎みながら、もうあと少しで一人立ちの日になるというある夜、子ども時代の幸せだった頃を思い出すと堪らなくなつて、一人で家を飛び出して走り回ったんだ。ありったけの声で鳴いて、鳴いて、鳴きまくって、走れるだけ走った。そう、走る事しか頭になくなるぐらい、走り続けたんだ」

フェリもガリも真剣にキイの話を聞いていた。その目には、何もかも見通した上で理解しているような、異様な寛大さがある。その表情は、彼らがリボルト達とは比べ物にならないほど生きているのだという事を思い知らせるものだった。もちろん、ガリがリポスに来てどのくらい経つのかなんて知らない。けれど、あの表情を見れば分かる。その年数が、どれだけ古いものなのか。

キイは長いこと、思考にふけていた。

きつと、此処に来る前の想い出を、噛み締めているのだろう。

ずいぶんと長い間考え、想い出を味わうと、やがて、小さく溜め息を吐き、下を向いた。見間違いはないだろう、白い滴がぼたりと地面に落ちた。その涙を見て、リボルトの中の想い出が、変化した。そうだ。どうして、この時まで、リポスに来る前の事を思い出していなかったのだろうか。どうして、この時まで、あの時の気持ちを忘れてしまっていたのだろうか。辛く、憎く、苦しく、大変で、それでも美しく、希望に溢れた生まれ故郷の事。生きる事だけを考え、生きる事だけに固執し、生きる事だけをただひたすら目指した、ある種の美。力強く、一生懸命、生きていくという美しさ。

どうして忘れていたのだろうか。

たしかに、嫌だった。出来る事なら、楽をして生きていたかった。「不安のない世界にあこがれていた」

キイは言う。

「闘わず、獲らないで済む世界に憧れていた。そしたら、道に迷って、いつの間にか、リポスの平原にたどり着いていたんだ」

それは、突然来た幸福への機会。獲物を狩るという概念は完全に捨て去られ、飲む事だけを考えて、後はゆっくりと過ごすことの出来る世界。今まで獲物だった者たちが友人となり、それぞれの仲間のもとで幸せに静かな時を過ごす、理想の世界。

「幸せだった。とても、幸せだった」

キイは段々と声を荒くした。

リボルトの心もまた、激しく揺れ動いていた。

食べる事を心配しなくていいこの世界。入った群れの決まり事さえ守っていればいい世界。ここでは群れを追われるなんて心配しなくてもいいのだ。

「……そして、生きていくうえでの全ての心配事がなくなった時、俺の頭から、野性が奪われていったんだ」

野性。

生きる事。

生きるために、食べるものを一生懸命集める事。

そして、その事に対しての、誇り。

そうだ。どうして、忘れていたんだろう。辛く、苦しい野性の生活。それでもリボルトには誇りがあった。自分の役目に誇りを持っていた。懸命に生き、いつかは死んでいくこの身体と精神に、誇りを持っていた。

「思い出した」

キイは身震いをした。

「いいえ、思い出させてもらった！ あなたに！」

キイが目を丸くして見つめる先。ガリの表情は、少しも変わらなかった。

八章 森の賢者（二）

森の賢者（二）

ガリ。この雄猿は不可思議な存在だった。キイが興奮気味に騒ぎ、リボルトもまた、冷静でいられない状況になってきたというのに、ガリは全く動じない。

考えてみれば、それもそうだ。このガリが、自分達の中にて眠ってしまった野性を引き出したのだから。野性が引き出されたことによって、静かな死へと向かっていた心もまた新しく目覚めた今、自分達がすべきことは何なのだろう。

リボルトは高まる心を懸命に沈め、じつとガリを見つめた。

ガリもリボルト達をじつと見つめる。その目は猿の目であるはずなのに、フェリと同じ目をしていた。否、同じものを宿していたという方が正しいだろう。この輝きは、何も彼ら特有のものではない。熱帯草原特有のものではない。かつて、リボルトは、これを当たり前に感じていた。実際、自分の目にもこの当たり前前の輝きがあったのを覚えている。

そう、これこそが野性と心。

野を生きる全ての生き物が、この目を持っていた。

「光が見えるのかな」

ガリが言った。

今まで気付かなかった事が不思議なくらい、ガリとフェリの目は輝いている。そして今や、キイの目も、そして、リボルト自身の目も輝いている。気付けた者にしか分からないこの確かな輝き。それは、荘厳なものだとリボルトは感じていた。

「この光。当り前の生き物が当たり前に生まれ持つ光であ。だが、リボルトに反する光でもある。この光を持って生活を許される者は、

規律を守る者のみ」

ガリの表情が渋くなる。

この森の他の猿達のことを思い出しているのだろう。そうリボルトは感じていた。きつとここの猿達も何らかの形で輝きを思い出した。

「此処の猿達は、光のもたらず本能に抗わず、周囲との争いを始めたんだ。その激しさは日に日に増していき、ついにはリポス全体に目をつけられるまでとなったというわけだ」

そして、その結果がこの有り様。存在を消されるという事態。ただガリだけが許され、こうしてリボルト達にも輝きを取り戻させるに至った。

「俺が消されずに済んだ理由は、俺にも分からない」

ガリはリボルト達の意を察したように言った。

「ただ、俺は皆とは違う存在でなあ。少しずつ確実に血の気を増していく群れをあまりよく思っていないかった。だから、俺の心はもう群れから離れていたんだろなあ。そして、ついに群れから離反しようとした夜、あの事件が起こった」

離反しようとする者。猿達を消したという美しく残酷な魔物たちが、明確な意思を受けていたとすれば、このガリをどう捉えただろうか。

リボルトは考え、そして、納得に至った。

「だから貴方は魔物に襲われなかった」

「魔物が……」

ガリはその言葉だけを繰り返した。その黄色く光る目の奥に、何処かの光景が映し出されている。リボルトはそれを、単なる反射ではなく、きつと例の夜にガリが見た光景だろうと思った。直感だった。

「あの魔物は何者だったのだろう」

ガリが呟く。

「あれ程美しく、残酷な生き物を見たことがなかった」

ガリの嘆きにも似た呟きに、フェリがちらりと視線を送った。

「あれは、リポスの使い。そう言われているよ」

フェリの言葉に、ガリもすぐに注意を向けた。

「サバナナでは知られている者なのかね？」

ガリの言葉に、フェリは頷く。

「実際に見たことがある。随分昔、真昼間にイナゴが全滅したという事があってねえ。そのイナゴ、やっぱり目覚めてしまっただけは凶暴になって、大暴走しては周囲の草花達を痛めつけていたんだ。

その時、その魔物が出てきたというわけさ。もつと昔にも、出てきた事があつたらしい。誰よりも長くリポスにいらると言われているサバナナのサイの話だ」

フェリの表情が陰しくなる。

「リポスの使いつてのは、とても美しい化け物だ。リポスが最終手段として、自分の身体を清潔にするために送り出すと言われているやつで、標的にされた者は容赦なく削られ、存在そのものを消されてしまう。その標的の事を知っていた奴も、やがては皆の記憶から薄れていき、思い出されることはなくなっていく。ただ、目覚めている者だけが、忘れないでいられるらしいんだ」

フェリの言葉に、ガリは目線を落とした。

「つまり、俺の昔の仲間達はこの森のほとんどの者達から忘れ去られていくだろうな。恐らく俺だけが、そして、お前達だけが、この出来事を思い出す事が出来る。そういうわけだね？」

フェリは小さく頷き、リボルト達を見た。

「だから、熱帯草原の者たちは規律をしっかりと守るんだ。ハイエナの国やライオンの帝国だって、衝突しないようにしている。規律の範囲でそれぞれの生活を守っているんだ」

リボルト達を捕まえたハイエナの国でさえも、規律の範囲だったのだろう。だとすると、猿達はもつと酷い破り方をしてしまったという事になる。果たして、それはどんな破り方だったのだろうか。そして、それが、少しずつ削られて存在を消されるに値するほどの

事だったというのだろうか。

「ふむ、つまり、彼らを襲ったのはリポスの使い。標的になった者は例外なく排除されるというわけか」

ガリが静かに言った。その声は何処か冷たく、余所余所しくも感じられた。フェリも頷き、軽く目を閉じる。

「消えてしまった猿達は気の毒だが、リポスの使いの行動は止めてはいけない。邪魔したのも敵とみなすからだ」

つまり、標的の存在そのものが罪となる。このリポスにおいては、の話だ。

フェリはその後、リポスの使いについての話をガリとリボルト達に向けて話した。邪魔さえしなければ、彼らは襲ってこないという。言葉はあまり通じず、勿論、命乞いもほとんど通じない。誰も彼らを止めることなどできないという。

ガリのほうはフェリの話聞きながら、度々何かを口籠りつつ、思案にふけり始めてしまった。

リボルト達も、何も言葉を発せられなくなってしまった。

この場所に、そんな魔物がいたなんて。そんな驚愕が大きかった。それも、リポスという場所の規律に大きく関わっているなんて。

話を聞けば聞くほど、リボルトの目には、この世界が今までとは違う雰囲気を満たされているように見え始め、何処となく気持ちが落ち着かなくなっていくのを、リボルトは感じ始めた。

世界そのものが、おかしく見え始める。

リポスの外と比べて、何者かの手が世界全体に加わっている気がするという疑惑。

それらがどつと押し寄せてきた。

八章 森の賢者（三）

森の賢者（三）

ガリの話を聞けば聞くほど、リボルトとキイは奇妙な気持ちを抱くようになっていた。

この世界、このリポスという箱庭には、全てを制する何者かが存在しているのではないかという疑問。そして、その何者か、このリポスにおいて、神ともいうべき者は、慈愛あふれる神というわけでは決してないということ。

フェリがくすりと笑み、ガリもにやりと笑う。

まるで二匹とも、リボルト達がこの奇妙な感覚に浸り続けている事を面白がっているかのようだ、とりボルトは感じていた。

「リポスはかのような場所」

フェリがひっそりとした声で言った。

「それを知る者は、沈黙を守り、このおかしな世界と向き合って、何回も、何回も、時を重ねていく」

そう、フェリがいつか言ったこと。

リボルトやキイの手が届かないほどに重ね上げられた、フェリの年齢。

「まるで異種の木の子葉を繋ぎ合せたような世界ではあるけれど、それに歯向かうのは、とても賢いとは言えない。

目覚めし者は、目覚めぬ者を勝手に起こしてはならない。目覚めたくない者を無理に起こすことになれば、それもリポスの意に反すること。

『リポスを拒絶するからとて、死を望むわけではなからう、て』
そう言った賢者も居たものよ」

フェリはまるで歌うようにそう告げた。

「お分かり？」

ガリとフェリ。先に目覚めた者たちが、リボルトにはまるで悪魔のように見えた。

「あたし達は知っていないながら、知っていないかのように振る舞わなくてはならない。それでも、歯向かい、全ての柵から抜け出したいこの欲求。この欲求に完全に負けてしまった時、その時が、死と同等であるっていうこと、あなた達ももう分かるよね？」

リポスを楽園だただけ思っていた時とは全く違う感覚。

リボルトは今や、ずっと監視されているかのような錯覚に囚われていた。ひよつとするとこれは、単なる錯覚ではないのかもしれないという考えが、リボルトの思考を蝕んでいく。全てから自由になりたい。この窮屈感から、抜け出してやりたい。

無限だと思っていた世界が、狭い箱庭でしかないと気付いた今、リボルトは、自分を囲っている柵の外へと抜け出したい気持ちで一杯だった。

きっとキイも同じだろう、とリボルトは感じていた。

キイだけでない。先に目覚めたダステイも、ジュナイも同じ。さらには、ここに居るガリも、フェリも、例外ではないはずだ。

「俺達は、耐えねばなんのだよ」

ガリが言った。

「このリポスに辿りつき、安息を手に入れた以上、死、あるいはその同等を拒絶する以上、俺達は耐えるべきだ」

ガリは空を見上げた。その表情には、リボルトから見れば、虚無より先の何かが見えた。無よりも先にある何か。だが、今のリボルトには、それが何なのかが分からなかった。

「お前たちが何処へ行くかは知らない。が、この先、何処へ行つたとしても、何を見たとしても、これだけは覚えておくとええな。耐えろ。リポスに逆らうな。悲惨な消され方をしたくないのなら」

ガリの警告ともいえるその言葉は、リボルトにとっても、キイにとっても、非常に嫌な気持ちになるものだった。

厳密に言えば、嫌というよりも、不気味さが拭えなくて不快ということになるだろう。

ともかく、リボルトはガリのこの言葉によって、非常に奇妙な気持ちになった。そして、いつまでも払拭できないこの気持ちにさらに不気味に思えてきて、ついに、口にした。

「その言葉は覚えておく。それだけ聞ければ俺は満足だ。もう先へ進ませて貰うよ」

自分から訊ねてきておいて無礼なとも思ったが、リボルトはどうしてもそうすることしか出来なかった。

「俺も、リボルトと一緒に行かなきゃ」

キイも慌てて賛同する。リボルトと同じ気持ちなのだ。

ガリがそれを見越したかは分からなかったが、不意にくすりと笑んで見せたフェリには悟られていたかもしれない、とりボルトは感じていた。

「そろそろ先に進むのかい？ 走り疲れも忘れて、さらに走ろうっていうの？」

フェリが幾らそうからかっても、リボルトはここに留まる気にはなれなかった。

「ああ、出来るだけ早くシェイド達の所へ帰りたいんだ」
きつとそこにいれば、ダステイもジュナイも帰ってくるに違いない。

そう信じるしかなかった。

「無限ともいえるこのリポスにて」

ガリが口を開いた。

「《急ぐ》という事もまた嗜みのひとつ」

遠くを見つめる形で、ガリは独り言のようにいう。

「嗜みをなくすことは、精神の死をも促す」

ガリの言葉は何処までも低く、何処か寂しげだった。

「行くがいい。お前たちの場所へ」

九章 分裂した世界（一）

九章

分裂した世界（一）

「世界が壊れる」という表現は、まさにこの光景が相応しいだろう。

そうリボルトは思った。無論、世界が壊れるなどと、今まで思ったこともなかった。だが、今、目の前にて広がっているそれこそが、その表現を生み出したのだ。

人間が作ったモノは、人間が使わなくなると朽ちてリボルト達が使う状態へと適応していくが、これはまさに逆のことだった。

否、もしかしたら、人間でさえも不便かもしれない。

不便どころか、脅威を覚え、何かを唱え始めるかもしれないとさえリボルトが思った。

問題は、彼らがそれに直面した場所。

動揺していなかったのは、フェリだけだった。

リボルトもキイも、それを見た瞬間に啞然とした。

どうしてこんなことに、とほぼ同時に呟いた。

キイが言うには、一度、野を炎という悪魔が焼き払ったという事件に巻き込まれた事があるらしいのだが、この恐怖はその炎とやらを目の当たりにした時以来だという。

リボルト達の前に広がる世界は、それほどまでに異様だった。

そこは、自然的でもなければ、人間達の世界とも何か違う。そもそも、生き物が住むという事が出来ないようにしか見えない場所だった。あらゆる所に線が引かれたようになっており、その線を境に空間が歪んでいる場所なんて、誰が住めるだろうか。木も、草原すらも、居なくなっている。雲も、否、空自体が、別の何かに変わっ

ている。色は、灰色、赤、青、白、黒、緑などがめちゃくちゃに散りばめられているようで、リボルトが普段見ることのない色までも当り前のように浮かんでいた。

ずっと目にしてしていると、何処か身体が悪くなったような気になった。

しかし、フェリの驚きは薄く、呆れたようにこの場を見やり、ため息交じりに言った。

「分離したのか」

何か知っているかのような口ぶりに、思わずリボルトは声を荒げてフェリに訊ねた。

「何か知っているのか？」

フェリは目を細め、その場を見つめる。

「まだ分らないね。とにかく、この先に行かないと」

「この先に行くのツ？」

キイが慌てて問い直した。

リボルトもわが耳を疑った。

どう見ても、危ない場所にしか見えない。これより先に言うてはいけないと、彼の中に巢食う勘が訴えてくるようだった。

しかし、フェリは何故二匹が驚くのか分らないといった様子で頷いた。

「行かないと分らないし、あたし、元々この先に行くためについてきたんだもの」

そう言つて、何のためらいもなく、その空間へと飛び込んでしまった。

リボルトとキイは暫く惚けてフェリの姿を目で追った。

フェリは、当り前の空間から、ひと越えで気味の悪い空間へと入りこんでいってしまう。心配していたわけではないのだが、フェリの姿は変わったりしなかった。フェリはフェリのままで、謎の空間をちょこちょこ彷徨っている。

リボルトはちらりとキイを見た。

キイもリボルトを見上げ、恐る恐る口を開いた。

「行く？」

「行こうか？」

リボルトは素直に怖いと思っていた。

怖いという感覚は無視できない。怖いという感覚がなくなってしまうたら、生きていけるわけがないのだ。長生きできない者は、いずれも怖いという感性を失ってしまった者達。狩りの間でさえ、怖いという気持ちは大事になってくるのだ。

フェリはそんな大切な気持ちすらも忘れてしまったのだろうか。しかし、リボルトは、長くこのリポスにいるのなら、それも仕方ないという気もしていた。

キイと声を掛け合って、同時に気味の悪い空間へ足を踏み入れてみると、耳の中を刺激するような弾力のある音が聞こえた。自然に置いていて絶対に耳にしないような音だ。真似鳥などが聞くと、一気に流行りそうなくらい、馴染みのない音だった。その音は数秒程度リボルト達の耳にまとわりついて、ずっと溶けるように消えていった。

「なんだろう、今は」

キイの問いに答えられるわけもなく、リボルトは無言で周囲を見渡した。フェリはもう随分離れた所から、こちらを見つめていた。

「早くおいでよ」

あんなに遠くにいるように見えるのに、フェリの声は随分近くに聞こえた。

リボルトとキイはほぼ同時に走りだした。この空間を独りきりで走れるほど、怖さを感じる能力が鈍っていなかったからだ。やっとフェリに追いつくと、フェリはくすくすと笑いを噛み殺して、小さな声で言った。

「やっぱり、あんた達は若いね」

リボルト達の反応を待たずに、またフェリは先に行く。まるで、行くべき場所を最初から心得ているかのようだった。

リボルト達は止むを得ずまたフェリに続いた。彼らには、ここが何処なのかはつきりとしなかったからだ。狼達の住まう山は何処か、その下に広がる森は何処か、湖は何処か、月は何処か、全く分からなくなっていたからだ。

この得体の知れない空間の中で、キイがぼつりと呟いた。

「シェイドとブレイズ、どうなっちゃったんだろう……」

此処に待っていたはずの二匹、そして、その他、ここに暮らしていたはずの者たちは、気配すら残っていない。消えてしまったのか、何処かへ逃げたのか、逃げたとしたら、何処へ逃げたのか、様々な疑問が、リボルトの頭を巡った。

再びフェリに追いつくと、フェリは真っ直ぐ前を見つめ、強張った表情を作っていた。

「ここがどうしてこうなったか、分かる？」

フェリの急な質問に、リボルトとキイは何も言わずに首を振る。

寧ろ、一番知っていそうなのはフェリだ。と、リボルトは思っていた。

「誰かが禁忌を侵したんだ。それも、この地域一帯を巻き込む形で」
フェリはぼつりと呟くと、じつと一点を凝視した。

「あたしが会いたい人は、まだここにいる」
その言葉に、リボルトは思わず口を開いた。

「此処にいた者達はまだいるのか？」

いないとしたらどうなってしまったのだろう。そんな疑問を仕舞いこんで、リボルトはフェリの反応を待った。フェリは、じつと眼を細め、さらに小さく呟いた。

「あたしには分からない。でも、存在が消されたりしてはいない……」

フェリは振り返り、リボルトとキイを順番に見つめた。

「《あの人》に会えば、もっとはつきりと思う」
そう言って、再び走りだした。

九章 分裂した世界（二）

分裂した世界（二）

進んでいるのか、いないのか、フェリを追いかけるリボルト達には見当もつかない。そもそも、フェリはどうなのだろうか。フェリは分かっている走り続けているのだろうか。そして、フェリが会いたいという人は、本当にここにいるのだろうか。

走れば走る程、それらはかなり疑わしいこととなった。

生き物の気配もなく、風が流れるという気配もなく、時が流れているという感覚すらもないこの世界で、じっと留まるような者がいるのだろうか。

リボルトは疑わしく思い始めていた。しかし、ここでフェリに置いていかれてしまうのは、とんでもないことだ。誰もいないこの世界。かつては緑溢れ、リボルトの生まれ育った場所と大して変わらない住みやすい場所だったのに、どうしてこんな事になってしまったのか。この場所が、自分の身体にどう影響してくるのか。

リボルトの本能は、これを危機と受け取っていた。

「フェリ……」

リボルトは走りながら、声をかけた。本当は立ち止まりたかったが、立ち止まったところでフェリに置いて行かれるだけだと分かっていた。

「何処へ行くんだ？」

「言ったでしょう？」

フェリは前を見つめたまま、返事をする。さほど大きな声も出していないのに、フェリの声はよく響いていた。

「《あの人》のところだって……」

フェリの返答は予想通りで、期待はずれのものだった。何処へ行

くことになるのか、これからどうなってしまうのか、何も分からな
い。そんな状況でただ走り続けるなんて、気になって仕方がない。

「いいからついてきてよ。そのうち分かるんだから」

今のフェリはリボルト達に構っている暇も惜しい程、進まなけれ
ばならないという気持ちに支配されていた。それほど、《あの人》
とやらの会わなくてはいけないのだろうか。そんなに重要な人物な
のだろうか。

ともかく、これ以上訊ねても答えなさそうなフェリに、質問した
って仕方ない。それどころか、追いかけて続ける体力を無駄に消費し
てしまうだけだ。

ふとその時、黙って走っていたキイが、目を見開き、吠えるよう
にフェリに呼びかけた。

「待って！ 何かいる！ 何かいるよ！」

フェリが急に立ち止まった。

辺りを見渡し、ちらりとキイを振り返る。リボルトも周囲を窺っ
た。しかし、キイの言う《何か》は、確認出来なかった。

キイは一点を見つめたまま、固まってしまったかのように立ち止
まっている。

「あっち、ほら、こっちを見てる、ねえ、見えないの？」

キイのしている場所に目を合わせても、リボルトには何も見えな
かった。どうしようもなく、首を傾げ、フェリの方を向いて訊ねた
が、フェリも首を振った。

「あたしには見えない」

「でも……」

キイの様子から、嘘をついているようには見えない。見えないし、
感じない。キイの言っている場所に何かあるようにはとても思えな
い。

「でも、本当に……」

「あたしは、居ない、とは言っていない」

フェリは目を細め、じっとキイのしている方向を見つめた。目と

は裏腹に、口元からはやや牙が覗く。

「今度はキイの番……」

フェリの呟きに、キイが小さな悲鳴を上げた。リボルトから見て、今のキイは、威圧と恐怖で雁字搦めにされる小動物のようだった。

「どうしよう、俺、どうしたら……」

キイの尾が忙しく動く。尋常でない慌てぶりに、いよいよリボルトも焦りを感じてきた。自分には全く見えないし感じないけれども、何者かがキイを狙っているらしい。それだけは把握できる。あとは、フェリを頼るしかなかった。

「あたしが行きたいのはあっち」

フェリは頭を使って方向を示し、表情を抑えた顔でキイを見た。

「で、あんたが見えている奴らがいるのはどっちだっけ？」

「あっち。ずっと俺を見てる」

両者の示す方向は、ややずれていた。しかし、大別的にとれば、方向は同じ。フェリやリボルトに見えない分、これ以上進むのは危険でしかない。しかし、フェリの表情には、退くという文字が窺えなかった。

「一体、何がいるんだ？」

リボルトはフェリを質した。フェリが何でも知っていると限らない事は重々承知だ。けれど、この件に関しては、フェリも何かしら心当たりがあるようだという雰囲気は読みとれた。

「まさか、あの猿達を消したという者たちが……？」

まっさきに思ったのはそれだった。《存在》を消すという恐ろしい役割を担う者。それが、ここにることくらい予想できた。しかし、それならばどうしてそれらはキイだけを狙い、フェリやリボルトには見ることもすら出来ないのだろうか。

「違う。そいつらじゃない。それだけは確か」

フェリははつきりとそう言った。そして、キイにそつと小声で告げた。

「怖いと思う。けれど、あたしとリボルトの間で、とにかく走るん

だ。あいつらが動いたら、あいつらに捕まらないように動いて欲しい。《あの人》のはすぐ近くにいるんだ。そこまで辿り着けば、あいつらも追ってこないはず……」

「本当に？」

フェリの言葉は、キイにとって多大な安心感へと繋がったらしい。キイはじつとその何者かがいる方向を見つめ、しっかりと頷いた。

「分かった。走るよ」

フェリは小さく頷き、リボルトとキイの両方を見た。

「よし、行こうか」

九章 分裂した世界（三）

分裂した世界（三）

今のリボルトとキイには、フェリの感覚だけが頼りだった。

言葉に出来ない不安が、キイの周囲に漂っている。リボルトにとってもそれは、大きな恐怖だった。何故、どうして、キイが狙われているのかは分からないし、キイに何が見えているのかも見当もつかない。だが、フェリ感覚にあわせて走り続けても、キイの不安そうな鳴き声は、漏れるばかりだった。

「どうしよう、どうしよう、あいつら追ってくるよ。ねえ、リボルト、フェリ、見えないの？ 君たちにはどうして見えないの？」

まるで子ども。キイの心はまだ大人になっていない。實際生きている期間はリボルトよりも長いかもしれないけれども、それでも、キイのこの様子は、まだ親離れもしないうちに親をなくしてしまった子どものようだった。

「落ちつきな。叫んでいると、遅れてちまうよ！」

フェリが牙を剥きながら忠告する。持久力を考えれば、種族の違いがフェリが一番劣るはずなのだが、それでも今は、キイの方が明らかに憔悴していた。不安と焦りが、その小さな身体を蝕んでいる。

「キイ、今はフェリを信じて走ることにだけ考えよう」

リボルトはキイに告げた。

きつと、キイのしているものは、自分が考えているよりもずっと恐ろしくて、得体の知れない何かなのだろう。しかし、リボルトはあえてその事を踏まえずに、キイを励まし続けた。とにかく今考えるべきは、フェリの言っている場所まで、疾走し続けること。

キイは半ば泣きながら、必死に、フェリとリボルトに足並みをそろえていた。

「吠えた。あいつらが吠えてる。仲間を集めるんだ。なんなの、あいつら、何者なの？」

「フェリッ！」

リボルトは堪らず、前だけを見続けるフェリに咆哮した。フェリはリボルトの方向にも動じずに、依然として前だけを見続けている。「あとどのくらいなんだ？ 《あの方》とやらは一体何処にいるんだ？」

フェリが眉間にしわを寄せる。彼女が何か告げようとしたその時、キイがまた悲鳴を上げた。

「来た。来たよ！ 助けて、すごく速いよ！ 大きい奴が！ 大きい奴が先頭にいるんだ！ 真っ直ぐ走ってくる。追いつかれてしまふよ！」

キイの声も表情も、まさに異常だった。彼の恐怖は本物で、リボルトには自分が見えていないのが不思議なくらい、この事態の異様さを感じ取れた。キイは一生懸命走っていた。息を切らしながら、自身の力を根源まで出しきる様に、走り続けていた。

「フェリッ！」

リボルトはまた、フェリを急かした。

フェリは猫族独特の唸り声をあげて、大声で返答した。

「分からないよ！」

フェリの声はこだまして、この不自然な空間を反響し続ける。

「ただ、《あの方》は確かにこの先にいるんだ。いいから黙ってついてこいよ！」

フェリも焦っていた。彼女にもキイが見ているものは見えないと言っていたが、そのことがやはり、彼女にも不安を与えているのだろう。そして、そのキイにしか見えないモノについて知っているような素振り。リボルトは小さく唸りつつ、これ以上彼女には口を開かなかった。

キイは震えながら、呟いた。

「もういやだ……」

息を切らしながら、どんな獲物を追う狼よりも必死に走りながら、キイは叫んだ。

「もういやだよッ!」

その直後、キイの姿は消えた。まるで、積もった塵が風によって飛ばされるように、キイの姿は、リボルトとフェリの間で、突然消えてしまった。フェリも、リボルトも、すぐに足を止め、キイの消えたその地点を凝視した。何がいるわけでもない。ただ、キイが消えたという事実以外、何も分らない。

この分裂した世界には、もはや、リボルトとフェリ以外はいなかった。

「キイ……?」

リボルトの問いは、このめちゃくちゃな世界の奥へと吸い込まれていく。フェリはじつとキイの消えた地点を見つめ続け、あがっていた尾をゆっくりと下げた。

「リボルト……」

落ちつき払った声には、空虚ばかりが漂っていた。

フェリの視線が静かに、前方へと移る。

「そこだ」

目の前にあるのは、洞窟。めちゃくちゃに散りばめられた線と色の間に、その洞窟だけ、やけにくつきりと存在していた。

「その中に、《あの方》がいる」

フェリはそう言くと、走りだしてしまった。

十章 理想の屍（一）

十章

理想の屍（一）

フェリの言う《あの方》は、洞窟の奥に寝そべっていた。

リボルトはその者を見て、はっとした。

きりつと伸びた耳に、ぴんと張ったひげ。白く美しい毛並みをもったその者は、リボルトとフェリと交互に見つめ、微かに笑んだ。まるで、最初からリボルト達が来ることが分かっていたかのようなのだ。いや、それだけでなく、今まであったこと全てを見通しているかのようなその表情に、リボルトはつい身構えた。

そう、そこに居た白い大山猫、ビアレスは、余裕たっぷりの表情でリボルトを見ていた。

「久しぶりね、カラカルフェリ」

ビアレスが小さく口を開けて喋った。フェリは深くお辞儀をしてそれに答え、まっすぐビアレスの姿を見つめた。ビアレスは微かに目を細めてそれに応え、すぐにリボルトへと視線を移した。

「そして、《赤狼^{ドル}》の若者……リボルト」

ビアレスの声にリボルトは動揺した。外はあんなにも異常なことになっているのに、どうしてこのことビアレスは無事なのだろうか。そればかりが気になって仕方ない。そもそも、この場所を離れてリボスの目に着くようなことをしてしまったのは、このビアレスという存在に触れたからだ。リボルトは思っていた。結果、意味も分らないうちに仲間を失い、今もその不確かな恐怖をじわじわと感じている状態で、このビアレスという山猫と対話するのは途轍もなく不安なことだった。

しかし、ビアレスはそんなリボルトの気持ちを知ってか知らずか、話を続けた。

「外で何があったか。貴方達に何が起こっているか。私には分かる。私がよくないと忠告したものに触れて、全てを思い出してしまったのね」

ビアレスが何のことを言っているのか、リボルトには分かった。野性と心を探る。ビアレスに会わなければ思いもなかったことだ。リボルトはその旨を反論したかった。だが、反論できなかった。ビアレスの視線が、それを制していたからだ。

「この周辺は全てリセットされました」

ビアレスが言った。

「貴方達もいずれ捕まって、全てを書きかえられてしまっでしょう」
「どういう意味ですか？」

リボルトにはビアレスの言っている意味が全く分からなかった。試しにフェリの表情を見ているが、分かっているのか分かっていないのか判断のつかない顔で、ビアレスを真っ直ぐ見つめているばかりだった。リボルトがビアレスに視線を戻すと、ビアレスはゆっくりと答え始めた。

「この辺りは生き物ごと、生まれ変わるのです。今、全ての生き物が捕われ、中身を書き換えられようとしている。それは、消失ではなくて、生まれ変わり。今までのその者を捨てて、新しいその者へと変わるのです」

「ここに住んでいた皆が？」

フェリが口を挟んだ。信じられないという表情で、ビアレスに視線を送っている。ビアレスは静かに頷いた。

「私にはどうしようもない事。これは、ここを管理する者たちが決めたことなのよ。この土地の書き換えはもう始まっている。捕まった生き物たちもいずれ、書きかえられてしまっでしょう。そうすれば、ここは全く新しい土地になるのです」

「俺達も、その、書き換えられる？」

リボルトの問いに、ビアレスは頷いた。ゆっくりとした動作が不気味で、それがさらにリボルトの不安を掻き立てた。

「ここを管理する者に捕まれば、貴方達も書き変えられるでしょう。フェリも例外ではないわ。この土地に踏み込んだ以上、書き変えなければならぬと判断された」

「ここを管理する者というのは、何者ですか？」

フェリが訊ねた。

「奴らは消去人じゃなかった。あたしも知らないような姿をした奇妙な者たち。彼らは何者なのですか？」

フェリの問いに、ビアレスは軽く溜め息をついた。

「それには答えられない。ただ、管理する者、とだけ。消去人ではない、とだけ。貴方達は許されない土地で血を流すという最大の禁忌までを侵してはいない。それはとても重要なことだから、消されることはない。ただ、書き変えられる。それだけです」

「それだけ、が嫌なのです」

リボルトはふと声を漏らした。ビアレスの耳が微かに動く。

「俺は俺でいたいんです。他の皆も皆でいてほしい。それは許されないのですか？」

リボルトの問いは自然に出てきたものだった。口に出してから、リボルトは段々と頭で理解していった。そう、書き変えられるという事の恐怖。キイは捕まってしまった。そのうちに、キイはキイでなくなってしまうのだろうか。そんなこと、リボルトは許せなかった。

ビアレスはしばし黙した。リボルトには何かを考えているようにも見えたし、返答を拒んでいるだけのようにも見えた。しかし、やがて小さく息を吐いて、口を開いた。

「やはり、貴方は少し変わっている」

無機質な声だった。

「でも、予想どおりの言葉だったわ」

ビアレスは再び微笑みを浮かべ、顎を前脚の上にのせ、静かに語

りだした。

「捕まった者たちはこの辺りの消された空間の何処かに閉じ込められている。けれど、貴方の望む者がそこにいるかは分からない。書き変えられるのが嫌なのね。それならば、抵抗するといい。けれど、これだけは覚えていなさい」

そう言つて、ビアレスは尾を微かに振つた。

「血を流すような争いは行つてはいけない」

その言葉だけが、妙に浮き出ているようだった。

フェリはその言葉に深く頭を下げていた。リボルトはただ、ピアレスの姿を見つめたまま、ぼんやりとその言葉を頭に刻んだ。

血を流すような争いは行つてはいけない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3850g/>

永遠ノ園

2011年2月1日02時40分発行